

# 博士論文

## 逆接句を構成するコソの係り結びとその周辺

鴻野 知暁

## 目次

1. 本論文の目的と構成.....	6
2. 逆接句の意味分類.....	8
2.1. はじめに .....	8
2.2. 先行研究 .....	8
2.2.1. 逆接と順接との対応を重視する立場 .....	8
2.2.1.1. 前田直子(2009) .....	9
2.2.1.2. 松下大三郎 (1928) .....	13
2.2.1.3. 阪倉篤義 (1993) .....	16
2.2.2. 順接との対応によって逆接を規定することの問題点.....	19
2.2.3. 逆接を表す各形式の共通性・相違性を重視する立場.....	19
2.2.3.1. 丹羽哲也 (1998) .....	20
2.2.3.2. 渡部学(1995a)・(1995b) .....	21
2.2.3.3. 石黒圭 (1999) .....	22
2.2.4. 先行研究の二分類に収まらない例.....	25
2.2.5. 網羅的な分類へ .....	26
2.3. 三分類の概要 .....	28
2.3.1. 期待性による二分.....	28
2.3.2. 期待性がある場合の逆接.....	29
2.3.3. 期待性がない場合の逆接.....	30
2.4. 個々の分類の詳細.....	32
2.4.1. 意外的逆接 .....	32
2.4.1.1. 論理的推論による期待.....	32
2.4.1.1.1. 原因から結果への推論 .....	32
2.4.1.1.2. 結果から原因への推論 .....	34
2.4.1.2. 言語主体の意思・希望・予想.....	39
2.4.1.3. 意思・希望・予想を伴う行為.....	41
2.4.1.4. 意外的逆接のまとめ .....	43

2.4.2.	反発的逆接 .....	43
2.4.2.1.	相手の短絡への非難 .....	43
2.4.2.2.	通常とは異なる心情の表明 .....	49
2.4.2.3.	障害への反抗的行為 .....	53
2.4.2.4.	反発的逆接のまとめ .....	54
2.4.3.	対比的逆接 .....	55
2.4.4.	先行研究で分類が困難な例 .....	57
2.5.	コソの係り結びの逆接性の二極 .....	59
2.5.1.	意外的逆接のコソの係り結びの後続句の特徴 .....	59
2.5.1.1.	意外性を表す副詞語句や終助詞を伴うもの .....	59
2.5.1.2.	疑問詞疑問文 .....	61
2.5.1.3.	連体形終止 .....	62
2.5.1.4.	3タイプのまとめ .....	64
2.5.2.	反発的逆接のコソの係り結びの後続句の特徴 .....	64
2.5.2.1.	反語表現 .....	65
2.5.2.2.	ナクニ終止 .....	66
2.5.2.3.	後続句が省略されているもの .....	67
2.5.2.4.	3タイプのまとめ .....	68
2.6.	おわりに .....	68
3.	逆接のコソの係り結びの構成原理 .....	71
3.1.	先行研究 .....	71
3.1.1.	石田春昭(1939) .....	71
3.1.2.	大野晋(1993) .....	72
3.1.3.	森野崇(2002) .....	72
3.1.4.	半藤英明(2003b) .....	73
3.1.5.	半藤英明(2005) .....	74
3.1.6.	蔦清行(2006)・同(2007) .....	74
3.1.7.	先行研究の問題点 .....	75
3.2.	已然形 .....	78

3.3.	コソの語性・その強調の性質.....	80
3.4.	コソの区別が働く範囲.....	80
3.5.	コソにより意外的逆接が生じる原理.....	82
3.5.1.	コソが直前の語に働く場合.....	82
3.5.2.	コソが係り結び句全体に働く場合.....	84
3.5.3.	コソの係り結びによっては示されない意外的逆接.....	85
3.6.	コソにより反発的逆接が生じる原理.....	87
3.6.1.	コソが直前の語に働く場合.....	87
3.6.1.1.	仮定条件.....	88
3.6.1.2.	比喩的对象.....	92
3.6.1.3.	対概念を成す事物.....	94
3.6.2.	コソが係り結び句全体に働く場合.....	95
3.6.3.	コソの係り結びによっては示されない反発的逆接.....	96
3.7.	おわりに.....	97
4.	シの語性.....	101
4.1.	はじめに.....	101
4.2.	方法.....	101
4.3.	シの語性の措定.....	104
4.4.	単文中のシ.....	105
4.4.1.	…シ…形容詞.....	105
4.4.1.1.	「…シ…形容詞」における等閑視の第一のレベル.....	105
4.4.1.2.	「…ハアレド…シ…形容詞」構文にみる等閑視の第二のレベル.....	110
4.4.2.	…シ…ユ.....	113
4.4.2.1.	「…シ…ユ」における等閑視の第一のレベル.....	113
4.4.2.2.	「A（ヲ）見レバ B シ思ホユ」構文にみる等閑視の第二のレベル.....	116
4.4.3.	…シ…ラシ.....	118
4.5.	条件句中のシ.....	119
4.5.1.	条件句における等閑視の第一のレベル.....	119
4.5.2.	構文パターン別に見るシの等閑視の第二のレベル.....	122

4.5.2.1.	仮定条件句.....	122
4.5.2.1.1.	$\alpha$ : 「A シ B ナラバ A'ハ B ナラズトモヨシ」のタイプ.....	122
4.5.2.1.2.	$\beta$ : 「P ニシアラバ P'ナリトモヨシ」のタイプ.....	123
4.5.2.1.3.	$\gamma$ : 「P ニシアラバ P' ナリトモ」のタイプ.....	124
4.5.2.1.4.	$\delta$ : 「P ニシアラバ P'ナリトモ Q」のタイプ.....	126
4.5.2.1.5.	$\varepsilon$ : 「A シ B ナラバ A'ハ 〈ドウデモイイ〉」というタイプ.....	127
4.5.2.1.6.	仮定条件句の構文パターンのまとめ.....	129
4.5.2.2.	確定条件句.....	130
4.5.2.2.1.	$\zeta$ : 「P ニシアレバ P' ナレド (モ) Q」のタイプ.....	130
4.5.2.2.2.	$\eta$ : 「P ニシアレバ 〈ドウショウモナク〉 Q」のタイプ.....	131
4.5.2.2.3.	$\theta$ : 「P ニシアレバ 〈ドウショウモナイ〉」のタイプ.....	132
4.5.2.2.4.	確定条件句の構文パターンのまとめ.....	133
4.6.	おわりに.....	134
5.	コソの文末における一用法.....	136
5.1.	はじめに.....	136
5.2.	用例の整理.....	137
5.2.1.	中古資料中の用例の提示.....	137
5.2.2.	異文の整理.....	140
5.3.	「N+コソ」の機能と表現性.....	144
5.4.	コソの文末用法の発生.....	146
5.4.1.	「N+ナリ」と「N+ニコソアレ」の使用状況.....	146
5.4.2.	文中でのコソの出現位置の変化.....	148
5.4.3.	ニの脱落現象.....	149
5.4.4.	「N+ニコソアレ」から「N+コソ」へ.....	151
5.5.	中世における係助詞の連体ナリへの介入.....	152
5.6.	逆接句を構成しないコソの係り結び.....	153
5.7.	おわりに.....	156
6.	本論文の結論.....	158
	出典一覧.....	160

参考文献 .....	160
------------	-----

## 1. 本論文の目的と構成

本論文の考察の対象の中心は、古代語のコソの係り結び、特に逆接句を形成するそれである。上代においてはこの逆接用法は特に多く、管見では万葉集のコソ係り結びのおよそ4割を占める。

コソによる係り結びは、已然形述語を結びとするという形式的な面でゾやナムによる係り結びと異なるのみならず、そこで文が終止せず、何も接続助詞を伴わずにしばしば逆接の関係で後続句につながるという、解釈上際だった特徴を持つ。この現象自体は基礎的な事実であるが、その詳細については研究の余地が残されている。本稿の大きな目的は、①「コソによる係り結びはいかなる意味の逆接を表し得るか（そして表さないか）」という逆接性の具体的様相を明らかにすること、②「なぜコソの係り結びは、他の係り結びと異なり逆接の意味となるのか」という、逆接が引き起こされる原理を考察することの二つである。本論文の各章について以下に述べる。

第2章にて「コソによる係り結びはいかなる意味の逆接を表し得るか」という問題について論じる。この問題を考えるには、逆接が一般的にどのように意味分類されるかを体系的に把握し、その中でコソの係り結びの逆接性を位置づける必要があるだろう。

本論文はまず「逆接とは何か」という逆接の概念を規定し、その上で「期待性」という心理的概念を元にして逆接の意味を大きく三つに分類する。続いて、上代でのド・ドモの用例を調べ、この三分類をさらに細かく分ける。そして、コソの係り結びがこの細分類のうちどれを表し、どれを表さないかを見るのである。最後に、コソの係り結びの逆接の意味を大きく二分するときの判断基準となる、言語的特徴についても述べる。

第3章では「なぜコソの係り結びは、他の係り結びと異なり逆接の意味となるのか」ということを考える。上代の已然形には、接続助詞を伴わず、単独で文を接続する用法があった。これは前後の文脈によって順接とも逆接とも解されるものである。コソの結びの已然形は文を接続する働きを持つだけであって、これが逆接へと直ちに結びつくわけではな

い。コソの強調性が働くことではじめて、逆なる接続につながると考えねばならないのである<sup>1</sup>。本論文はこのような観点から、コソの強調性に焦点を当て、その性質がどの対象にいかにして働くと逆接性がもたらされるかを説明しようと試みる。第2章で検討した、コソの係り結びの二つの逆接的意味のそれぞれについて、用例を通して、コソの強調性の働きを確かめる。

なお、本論文はコソの係り結びの、特に上代での使われ方を中心に論じる（ただし、上代とほぼ同じ用法と認められるものに関しては、中古資料からも例を引くこととする）。中古になると逆接の用法は少なく、コソの独自の性質も希薄となっていると考えられる。「コソ～已然形」が逆接用法として使われたとしても、形骸的なものである蓋然性が高く、コソに特徴的な性質がそこに認められるとは限らないためである。

第4章では、これまでの研究では休め辞などと言われ、語調を整えるくらいのもものと見なされていた助詞のシの性質について考える。シは現代の間投助詞ネ・ヨ・サなどと異なり、どこにでも自由に生起するわけではなかった。既に上代にその出現位置は偏りを見せ、中古以降は専ら条件句内に現れたのである。

本論文は、これらの位置は助詞シの本領が発揮されやすい箇所だったと考える。この見通しの元で、単文での述語の傾向、また、条件句の様々な構文パターンに一貫して認められるシの性質を追求する。

さらに、シとコソとがそれぞれどうやって仮定条件に働くか、また、どのような文構造の違いをもたすかを見ることで、それらの強調の質の差を考察する。

第5章ではコソの用法の一つとして、文末に現れ、述語相当として働く「体言・連体形＋コソ」について述べる。これは中古以降になって現れた珍しい語法であり、決して逆接にならないという点で、第2・3章で見たコソの係り結びの使い方と大きく異なるものである。中古以降のコソの働きの弱化・変質の一つとして、この用法を扱いたい。

なお、第5章は既発表論文「助詞コソの文末における一用法」『言語情報科学』10、2012年に加筆修正を行ったものである。

---

<sup>1</sup>石田春昭(1939)は「逆接の『接』は已然形の受持つ所であり、之を『逆』に決定する事のみをコソが引受けて居るのである」(上、p.80)と言う。



## 2. 逆接句の意味分類

### 2.1. はじめに

コソの係り結びはしばしば確定の逆接句<sup>2</sup>として働くということはよく知られているものの、それがいかなる意味の逆接を表すかについては、先行研究では詳細に論じられてこなかった。

上代では確定の逆接表現の形式はさほど発達しておらず、「～ド・ドモ」が汎用的に使用されていた、すなわち、様々な逆接の意味をこの接続助詞が主に担っていたと考えられる。一方、「コソ～已然形」は接続助詞によらない特殊な逆接表現であり、その表す意味も無制限に広がってはいないものと推察される。

「コソ～已然形」の表す意味を知るためには、逆接とは何かということ（逆接概念の規定）を改めて問い直し、逆接句を意味分類した上で、「コソ～已然形」がどのような意味を表し得るか（そして表し得ないか）を検討する必要があるだろう。

本章は、2.2 節で先行研究を概観した後、上述の動機のもとに、まず逆接の意味を大きく三分類する（2.3 節）。続いて、上代の「～ド・ドモ」と「コソ～已然形」の該当例を挙げながら、さらなる細分類を試みる（2.4 節）。最後に、「コソ～已然形」の逆接を分類するときの基準となる、言語的特徴について述べる（2.5 節）。

### 2.2. 先行研究

#### 2.2.1. 逆接と順接との対応を重視する立場

「逆接」は字のごとく逆態なる接続であって、前句と後句とを逆なる関係で接続するものである。用語上は、これは順態なる接続の「順接」と対をなす。「逆接」の意味分類にあたっては、「順接」との対応を重視するというのは不自然ではない。本節では、かかる立場

---

<sup>2</sup> コソの係り結びはその述語が已然形の形を取り、いわゆる確定の逆接表現と考えられる。本論文ではコソの逆接性に関するときには、特に誤解のない限り「確定の逆接」を単に「逆接」と言うことがある。

を取るとみられるもので、現代語の研究から前田直子(2009)を、古代語の研究から松下大三郎(1928)と阪倉篤義(1993)を、それぞれ取り上げ概観する。

#### 2.2.1.1. 前田直子(2009)

前田直子(2009)『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究』は、タイトルにもあるように複文を扱う研究であるが、氏の関心はとりわけ論理的な面での「条件文と原因・理由文」(氏のいう「論理文」。後述)の分析に向けられている。

はじめに前田氏の複文の分類を見よう。氏は複文を連体節と連用節とに二分する。そして連用節を、「従属節と主節が意味的・文法的に対等に近い関係のもの」である並列節と、「そうでないもの」の副詞節に区分する(p.17)。その上で、意味的な関係を次のように分類している。

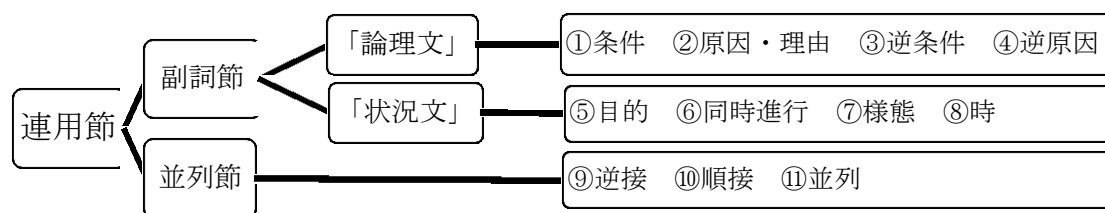


図 1 前田直子(2009)の連用節の分類 (p.17)

この分類中、いわゆる「逆接」の範疇に入ると考えられるものは「③逆条件」、「④逆原因」、「⑨逆接」の三つである<sup>3</sup>。

本書の目的の一つは、「連用節のうち、『論理文』として上記の4種を、他の連用節、すなわち『状況文』とは切り離して一つのグループとして取り出すことの妥当性・有効性を示すことである」(p.17)とされている<sup>4</sup>。「論理文」とは、小泉保(1987)で提唱された用語であり、そこでは「前件と後件の因果関係を予測したもの」である条件文、「結果的に条件文が成立しないことを推意している文」である譲歩文、「結果的に条件文が成立することを

<sup>3</sup> 前田氏自身、「③逆条件」と「④逆原因」を「逆接」としている。後述の論理文の分類を参照。

<sup>4</sup> 実際、本書のほとんどは「論理文」の記述・分析に当てられている。

推意している文」である理由文の三つがあげられていた。前田直子(2009)は小泉保(1987)を受けつつ、さらにそれを発展させたものである。

それでは前田氏のいう論理文の内実はいかなるものであろうか。氏は、「論理文の分析では、表されている事柄が『事実』なのか『事実かどうか不明』なのか、それとも『事実反する事なのか』ということが重要になって来る」(p.30)と述べる。この、現実との事実関係は「リアリティー」と呼ばれる。そして、「前件・後件のリアリティーと、それらが基底に流れる条件・因果関係の論理展開に沿うものかどうか(即ち、「順接」か「逆接」か)」(p.30)という2点によって、論理文は次の4種に分類される<sup>5</sup>。

表 1 前田直子(2009)の論理文の分類 (p.30)

		論理展開の方向	
		順接	逆接
リアリティー	仮定的	条件文	逆条件文
	事實的	原因・理由文	逆原因文

これを見ると、「③逆条件 ④逆原因」の逆接のグループは「①条件 ②原因・理由」の順接のグループと対応していることが明らかである。そして単に対応するのみならず、用語の命名を見ても、「条件→逆条件」、「原因・理由→逆原因」というように順接を元として、その対概念として逆接が定められているのである。

本書ではこれら 4 種の論理文を構成する代表的な接続辞として、以下の各種が用いられている (p.31)。

条件文……「ば」「なら」「と」「たら」

理由文……「から (のだから)」「ので」

逆条件文…「ても」

逆原因文…「のに」

以下は先の表 1 にこれらの形式を使った例を当てはめたものである。

<sup>5</sup> 逆接の場合は、仮定的な論理文は事實的なそれに移行しやすく、両者をリアリティーで明確に区切ることはできないため、境界が破線で示されている (前田直子(2009 : 31)参照)。

表 2 前田直子(2009)の論理文の例 (p.202)

	順接	逆接
仮定的	薬を飲め <u>ば</u> 、治るだろう	薬を飲ん <u>でも</u> 、治らないだろう
事實的	薬を飲んだ <u>ので</u> 、治った	薬を飲んだ <u>のに</u> 、治らなかった

ここで注意したいのは、通常逆接を表すとされる「けれども」や「が」があがっていないということである。本書を通じて、「けれども」と「が」は、3.3.3 節『『のに』の基本的な意味—『が・けれども』『ても』との意味的な違い』において、「のに」とのニュアンスの違いや置き換えの可否の面で若干言及されるに過ぎない。前田氏が逆接の接続辞として「のに」「ても」を中心に挙げた理由として、「のに」「ても」は「が」「けれども」に比べ主文への従属度が高く<sup>6</sup>、条件と同じ性質を持つからと述べられている (p.185)。ここでも前田氏が「論理文」の分析を主眼としていることが強く影響している。氏の分類では並列節の逆接もあるわけで、「が」「けれども」はそれを自然に表現できると思われるが、これらは考察対象として積極的に取り上げられないのである。

上記のように「③逆条件」と「④逆原因」は氏のいう「論理文」の中で、明確な位置づけを与えられた。さて一方で、並列節の「⑨逆接」についてはどうか。本書ではその詳細は述べられてはいないが、少なくとも「論理文」で説かれた「因果関係の論理展開に沿うものかどうか」(p.30 の再度引用、下線部は引用者による) という順接・逆接の規定は、因果関係が認められない並列節には通用しないだろう。並列節の意味分類中に、順接でも逆接でもない「並列」が現れていることから、論理文と同様の分類法が有効でないことが推し量れる。とすれば、「⑨逆接」の意味的關係は、同じく並列節に収まる「⑩順接」「⑪並列」との関連の上で、改めて位置づけられねばならない。考察対象が並列節に及ぶにあたり、逆接とは何か、そして、逆接は順接といかなる対応を持つか（そもそも対応づけることが可能か）が再び問題となるのである。

実際、前田氏自身、「のに」の用例を検討して、順接と対応づけられない場合が存在すると述べている。以下、本書 p.200 から用例と説明をあげる。

(1) a. お金があるのに、幸福ではない。

<sup>6</sup>南不二男の3分類で「のに」「ても」はB段階であり、「が」「けれども」はC段階であることが援用されている。

b. お金があるので、幸福である。

(1)は逆原因・理由文の例であって、「逆の」操作をすとうまく原因・理由文に戻せる場合だが、次のように戻せない例もある。

(2) a. お金はあるのに、時間はない。(だから、旅行には行けない)

b. ?お金はあるので、時間はある。

(3) a. 駄目だと思っていたのに、合格した。

b. ?駄目だと思っていたので、合格しなかった。

(4) a. スキーに行ったのに、雪がなかった。

b. ?スキーに行ったので、雪があった。

(2)は「前件と後件の中の何かが対照的であることを表す場合」であり、ここでは前件と後件の主体（＝お金と時間）が正反対（＝有と無）である（p.202）。(3)は「前件が希望や予測・予想あるいは意図そのものを表している場合」である（p.203）。(4)は「『のに』文で与えられる状況下において、その状況から生じる話者の期待を裏切るような不本意な事態が後件に述べられる場合」に当たる（p.205）。

前田氏は「のに」文をこのように4つに整理する。

①逆原因・理由文

②非並列・対照

③予想外

④不本意な事態を生み出した状況

繰り返すが、②・③・④は、もはや順接との対応が付かない。だから「順接」とは無関係に、別の規定を与える必要がある。前田氏は、この4者に共通する性質として「話者が食い違いを認識している」と考え、次のように「のに」の意味規定を与えている。

①原因と結果との食い違い

②二つの事態の肯否の食い違い

③予想と現実との食い違い

④ある状況から期待される事態と現実との食い違い

結局のところ、前田氏の考えでは「のに」の意味規定は「食い違い」というところに帰着する。これは一応は「のに」という個別の接続形式の意味であって、逆接一般の意味規

定ではなく、上記①～④は逆接一般の意味分類でもない<sup>7</sup>。そして逆接一般の意味とその分類は前田直子(2009)の目指すところではなく、射程外であろう。しかしながら、逆接の接続辞である「のに」の意味が、順接（の論理文）と対応しない場合があるという問題がここで明らかにされた。逆接一般の意味規定は「順接の逆」というように簡単に片付けられないこと、そして、順接の意味分類と逆接の意味分類とは対応づけられないこと、これらが逆接を考える際の難しさとして浮き彫りになったのである。

#### 2.2.1.2. 松下大三郎（1928）

松下大三郎（1928）『改撰標準日本文法』<sup>8</sup>は、独特の文法体系と用語法とともに卓抜した着想によって注目される。特に条件文研究に強い影響を与え、現在では少なからず本書の枠組みが参考とされ、受け継がれている。

松下氏は名詞のみならず動詞にも格を認める立場を取る（p.467、p.495 参照）。動詞の十の格の中で、拘束格、放任格と呼ばれるものがあるが、これらがいわゆる順接条件、逆接条件にそれぞれ該当する。本稿では、氏の説く文語の拘束格および放任格の分類法を検討したい。

拘束格の分類は以下のように示されている。

---

<sup>7</sup> 「『のに』文の多くは、『が』『けれども』で置き換えられるが、置き換えたとしても、ニュアンスが異なる。『が』『けれども』も予測が外れた事態を表すことはできるが、外れたことから生じる話者の『意外感』とか『驚き』は『のに』に比べて薄いようである」（前田直子(2009 : 206)）と言われる。

<sup>8</sup> 本論文での以下の引用は 1978 年刊、勉誠社の改訂再版による。

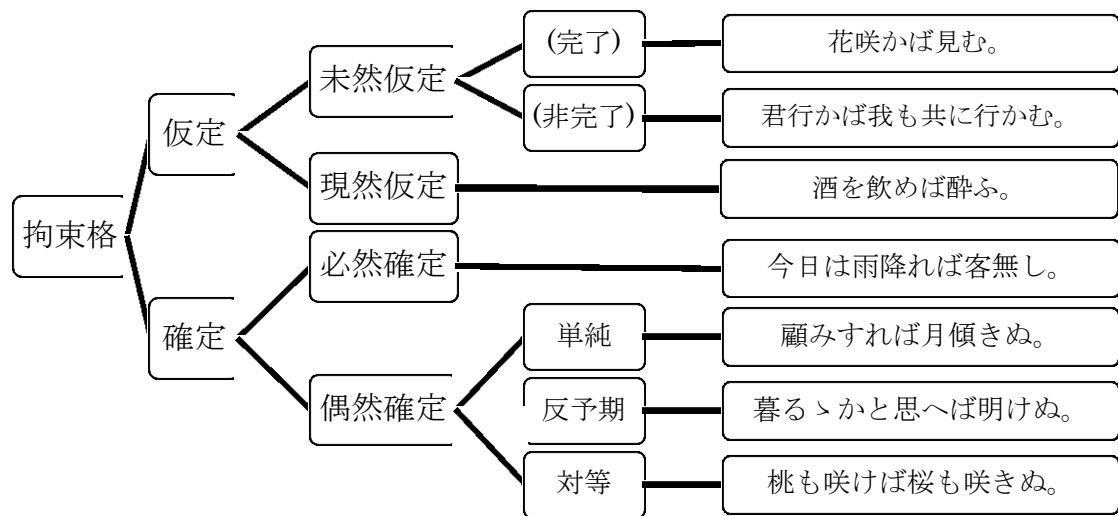


図 2 松下大三郎（1928）の拘束格の分類（p.544）

形式的には未然假定は「第一活段—ば」（いわゆる「未然形+ば」）によって表示され、現然假定・必然確定・偶然確定は「第五活段—ば」（いわゆる「已然形+ば」）によって表わされる。「現然假定」は「其の觀念を未然に置いて待ち設けるのではなく、之を現然として假定する」（p.536）もので、已然形+バの形をとりながら仮定的性質を備える。現在の研究では「恒常条件」（小林賢次（1996）の用語）や「恒常確定」（阪倉篤義（1993）の用語）などと呼ばれる。確定拘束格には、前件が後件に対して「因果的關係に在る」必然確定と、「偶然的の俱存關係に在る」の二種の別がある（pp.537-8）。偶然確定は、「その結果に就いて何等の予期がない」単純性、「何等かの予期が有つて予期以外の結果を見たことを表す」反予期性、前件が後件に対して「並列的な対等の事件である」対等性の三つの区別を持つと言われる（p.538）。

放任格の分類は次のとおりである。拘束格の分類と比して分かるように、假定・確定の別、そして未然假定・現然假定・必然確定・偶然確定の 4 種の下位分類は変わらない。つまりこれら 4 分類には順接（拘束格）—逆接（放任格）の対応関係が存する。

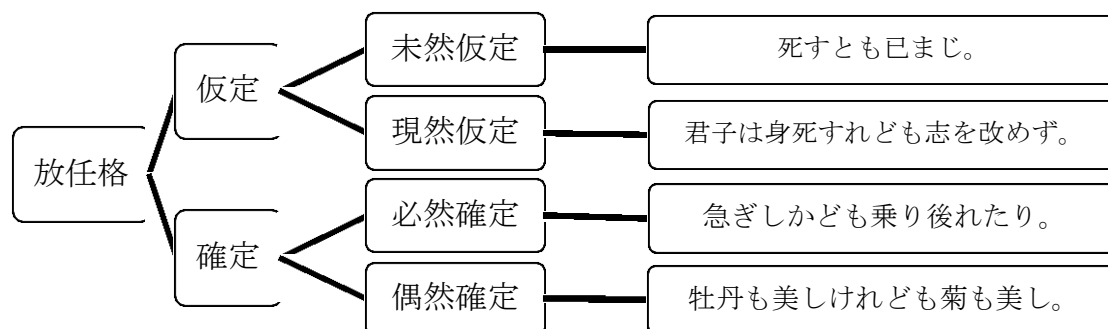


図 3 松下大三郎 (1928) の放任格の分類 (p.552)

松下氏は「放任格」の定義として「放任格は動詞の一格であつて、自己の作用を他の作用の出現の機会たるに足らないとして放任するものである。」(p.551) と述べる。続いて、〔拘束格〕と〔放任格〕の例を並べ、「放任格は拘束格と相対するもの」であるという (表 3 参照)。

表 3 松下大三郎 (1928) の拘束格と放任格の例の対応

〔拘束格〕	〔放任格〕
(I a) 風有らば涼しからむ。	(I b) 風有りとも涼しからじ。
(II a) 夏も、風有れば涼し。	(II b) 夏は、風有れども涼しからず。
(III a) 今日は風有れば、涼し。	(III b) 今日は風有れども、涼しからず。

(p.551 の挙例より。線の表記を変え、例文番号を付した。)

松下氏は、拘束格の一重下線部が放任格の二重下線部と相対すると見る。拘束格と放任格とが意味的にいかにして相対するかについて、氏は説明していないが、この表を見る限りでは、波線部 (後件の述語) の肯定—否定関係によるようである。たとえば(II a, b)では「拘束格～涼し (肯定)」—「放任格～涼しからず (否定)」のように。

上表の放任格の 3 例は、各々、松下氏の放任格の下位分類を代表するものが選ばれているとみられる。氏の分類でいうと(I b)は「未然仮定」、(II b)は「現然仮定」、(III b)は「必然確定」であろう。注意されるのは、「偶然確定」の例があがっていないことである。という



より、「偶然確定」においては拘束格と放任格とが相対せず、例をあげるには不都合であった—そのように本論文の筆者は考える。

ここで図 2 および図 3 の、拘束格と放任格の分類に目を向けよう。拘束格の偶然確定はさらに「単純」・「反予期」・「対等」の 3 種に分かたれる。対して、放任格の偶然確定はかかる分類をされていない。まずこの点において、偶然確定の拘束格・放任格は相対する形をとってはいない。真に拘束格と放任格とが相対するものなら、「単純」・「反予期」・「対等」の区別が両者に認められてしかるべきである。

さて、松下氏が拘束格の偶然確定の中で「対等」としてあげているのは、

(5) 桃も咲けば桜も咲きぬ。(p.544)

のごとき例である。これを放任格の偶然確定の例

(6) 牡丹も美しけれども菊も美し。(p.552)

と比べよう。接続助詞を無視して構造を抽出すれば(5)・(6)ともに「A も P、B も P」である。相対するどころか同じである。松下氏のいう拘束格の偶然確定の一部（対等）と、放任格の偶然確定とは、表現の仕方は変わってくるとしても示される内容としては同一になるのである。ここでは表 3 で見た「拘束格～肯定」—「放任格～否定」の関係はもはや認められない。松下氏が、偶然確定の拘束格と放任格が相対する例を挙げていないのは、このような事情があるからではなかろうか。

以上をまとめると、松下氏の文語（古代語）の条件表現の分類では、順接（拘束格）・逆接（放任格）ともに、未然仮定・現然仮定・必然確定・偶然確定の 4 種の下位分類を備えており、両者は同一の構造を持つ。しかし、用例とともに拘束格と放任格とを付き合わせ、その意味的な対応関係を探るとどうか。未然仮定・現然仮定・必然確定では「拘束格～肯定」—「放任格～否定」というように逆なる関係が認められた。一方、偶然確定の例においては拘束格と放任格とが近接し、逆接が順接に相対するとは言えないのである。偶然確定の拘束格が単純・反予期・対等と区別されるのに対して放任格がかかる区別を持たなかったのも、拘束格での区別が放任格へ持ち込めなかったからであろうと推察される。

#### 2.2.1.3. 阪倉篤義（1993）

阪倉篤義（1993）『日本語表現の流れ』は、「条件表現というものの構造を以上のように考えるについては、松下大三郎氏が説くところから、多くの示唆を得ている」（p.67）と述

べられているように、松下氏の用語と枠組みを意識して書かれている。

阪倉氏の考える条件表現の種類は以下のようにまとめられる。用例は万葉集から引かれており、括弧内の数字は歌番号である。

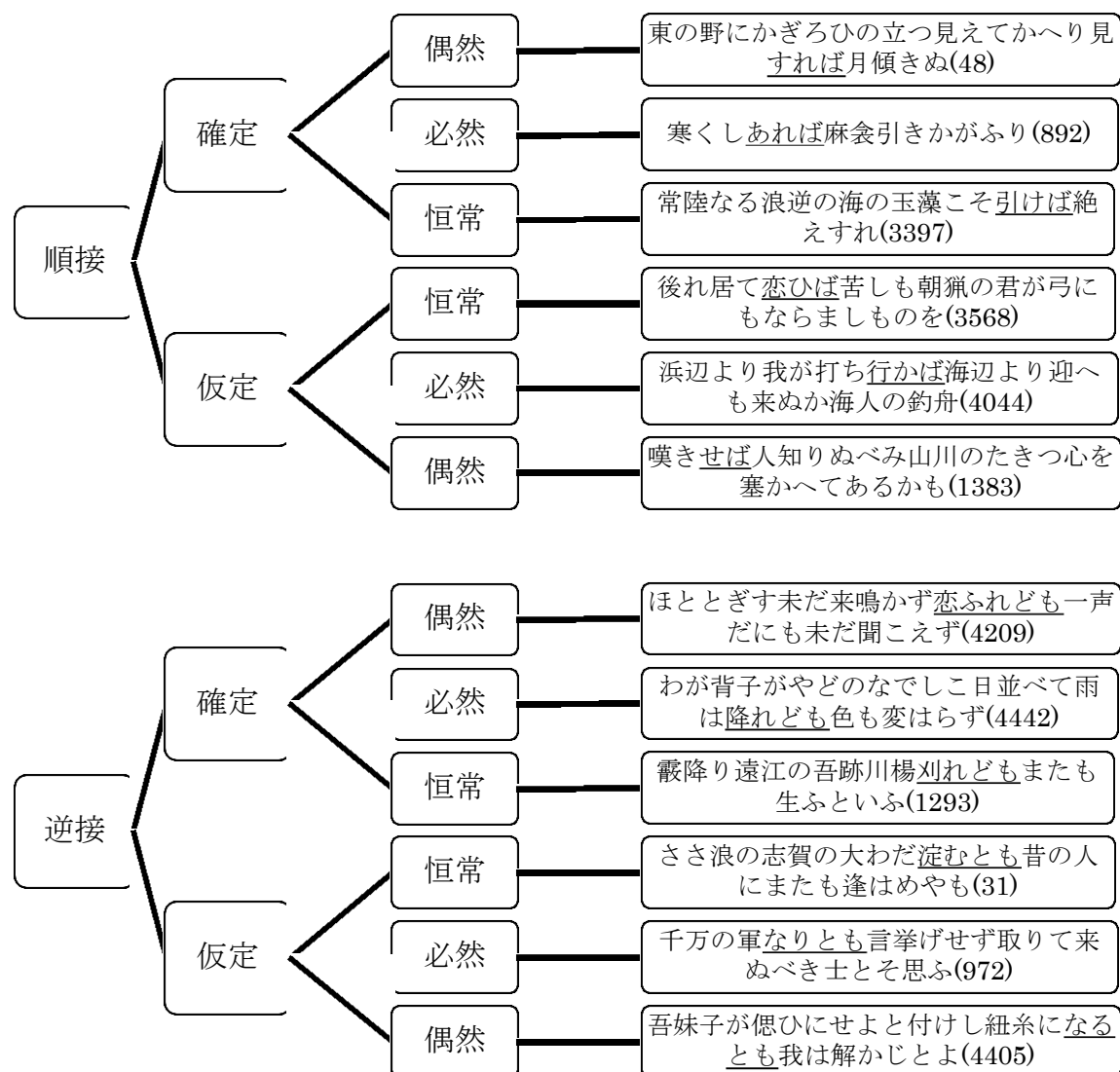


図 4 阪倉篤義 (1993) の条件表現の分類 (p.69)

順接・逆接の両方をまず仮定と確定に大きく二分するのは松下氏と同じである。松下氏はそこから仮定を未然と現然とに、確定を必然と偶然とに分けていた。しかし、阪倉氏は仮定にも確定にも、一律に、偶然・必然・恒常の別を設ける。この結果、仮定と確定とが同じ下位分類を持つものとして提示されることとなる。

図 4 の形は条件表現の展開に並行するものとして配置されている。阪倉氏による順接確定条件の説明を以下に引用する。

すなわち、二つの事態が同時に、あるいは継起的に生起するとき、その間に深い関係を設定することなく、個別的な偶然として捉えることがまず行われる。それが「順接の偶然確定」の段階である。しかし、やがて同様な事態に遭遇することが度重なるにつれて、これらを互に関連づけて、一つの事件において先に生起した事態が後に生起した事態を導くものであった、という因果の脈絡を認識するにいたる。それが「順接の必然確定」の段階である。しかし、この段階ではまだ特殊から特殊への推理がはたらくだけであって、一般的なもの媒介されてはいない。さらに経験を重ねると、事態をその具体的な場面から切り出し、実在するもののそれぞれの因子を一定の系列に導き入れて、原因と結果という範疇的な次元における思考法が生れてくる。これが、「順接の恒常確定」の段階である。(pp.69-70)

阪倉氏は条件表現の種類に話し手の認識の段階を認めている。偶然→必然→恒常となるにつれて、話し手は因果性を強く認識し、また、個別的・特殊的事態から一般論への認識と展開していくと見ているのである。氏は続いて順接偶然条件の説明を行い、「順接の恒常仮定」と「順接の恒常確定」とは、ともに一般論的に言うものである以上、極めて近いものである、との指摘をしている<sup>9</sup> (p.70)。

阪倉氏は逆接の条件表現についても、大体順接条件表現と同様な段階を考えているが、興味深いことに、偶然条件においては順接条件表現と逆接条件表現との間に一種の接近が認められるといわれる。

(7) さびしさに宿を立出てながむればいづくもおなじ秋の夕暮 (後拾遺・333)

これと同じ歌が、『小倉色紙』には「ながむれど」と逆接の言い方になっているというのである。「ながむれば」の現代語訳は「あちこち見わたすと」となるが、「ながむれど」というと「あちこち見わたしてみたが、やはり、」という気持ちが強められるという。しかしながら、この「やはり…」という気持ちは「ながむれば」の形にも当然含まれるものであるといわれる。ここでの順接の言い方と逆接の言い方の接近は、偶然条件における因果性の

---

<sup>9</sup>阪倉氏のいう「順接の恒常仮定」と「順接の恒常確定」の近接性は、氏が仮定条件と確定条件とを過度に対応させたことに因るものだという批判もある。木下正俊 (1972 : 68-9) や小林賢次 (1996 : 9-10) を参照。

希薄さに起因すると阪倉氏は考える (p.72)。氏はまた、『覚一本平家物語』の平教盛の歌、  
(8) はかなしな主は雲井にわかるれば跡は煙とたちのぼるかな

を引き、これが『延慶本』では「わかるれど」と逆接の言い方になっているという。そして、「それでも意味は通じるわけで、つまりこの『わかるれば』は、『一方はこう、また一方はこう』と二つの事柄を対比した言い方であると考えられる」(p.72) と述べている。

阪倉氏の考える条件表現の範疇分けでは、逆接と順接とが同様の下位分類を有している。しかし、氏は、単純に逆接と順接とが意味上対立するとは考えていない。因果性の希薄な偶然条件において逆接と順接とが接近するということは大変に重要な指摘である。ただし、(7)・(8)の例で順接と逆接が接近する事情というのはやや異なるようである。(8)は阪倉氏のように二つの事柄の「対比」で良いとしても、(7)は二事態の対比ではないので別の説明が必要である。これは逆接の偶然確定条件が等し並みに片付けられるようなものではなく、意味的に更なる区別を要することを示唆する。また、因果性が希薄な場面において「逆接」をいかにして規定したらよいか、順接の表現を選択するか逆接の表現を選択するかでどのようなニュアンスの差が生じるのか、という問題が改めて生じてくるのである。

### 2.2.2. 順接との対応によって逆接を規定することの問題点

これまで見てきた研究は、順接という概念から反照的に逆接を規定するものであった。前件と後件の因果関係が強い場合には、この規定は有効である。しかし、因果性が希薄になってくると、順接—逆接の対応付けは困難となる。そのような場合における逆接性とは一体何かが問題となってくるのであり、また、望ましい逆接の意味分類とはかかる場合を網羅するものでなくてはならないのである。

### 2.2.3. 逆接を表す各形式の共通性・相違性を重視する立場

現代語では、ケレドモ、ガ、ノニ、シカシなどの多様な逆接の接続表現が存在する。これらの形式の差異—特に意味的な違い—を研究する立場では、逆接の意味分類が不可避免に関わってくる。このような研究動機からすると、逆接の形式間の共通性および相違性に基づいて意味分類を行うこととなる。本節では丹羽哲也 (1998)、渡部学(1995a)と同(1995b)、石黒圭 (1999) の研究を概観する。

### 2.2.3.1. 丹羽哲也（1998）

丹羽哲也（1998）の冒頭で研究の目的が簡潔に述べられているので引用しよう。

逆接確定条件を表す接続助詞には、「が」「けれども」「のに」「にもかかわらず」「ても」「ものの」「とはいえ」などがある。本稿はこれらの諸形式が同じ逆接を表す中で、それぞれどのような特徴を持って対立しているのかを考察するものである。（p.91）

ここであげられる接続助詞は、「逆接性」を表すという点で共通しつつも、形式の違いに伴う特徴の違いがあるというのである。

丹羽氏の論は次のように進められる（p.91）。

- ①まず、用法の広い「が」「けれども」を扱い、逆接とは基本的にどのようなものであるかを考察する（第一章）。
- ②次に、「が」と、「のに」「とはいえ」とを比較して、逆接関係を大きく二つの型に分かつ（第二章）。
- ③さらに、「のに」「にもかかわらず」「とはいえ」「ても」「ながら」「ものの」を取り上げて、具体的にそれぞれの特徴を考察する（第三章）。

すなわちはじめに逆接表現の共通性を捉え、徐々に細かい型へと分類する方法がとられる。

丹羽氏は逆接関係を、従属節  $P$  と主節  $Q$  とが肯定と否定とに対立し、「 $(x$  において  $p) \Leftrightarrow (y$  において  $\sim p)$ 」と表示される関係と考える。「 $x$  において  $\cdot y$  において」というのはその対立の枠組みである（p.92）。逆接を表す「が」は、最も意味・用法が広く、対立の枠の  $x \cdot y$  に特に制限がない。丹羽氏はこれを自由対立型と呼ぶ。一方、「のに」「とはいえ」は、 $P$  が話者の考えを表し、 $Q$  が現実または話者の別の考えを表す用法に限定される。このようなものは「話者の推量・希求に反する」逆接であるので、反推量希求型と呼ばれる。

以下、個別の接続助詞についての記述は省略するが、丹羽氏が逆接関係を「 $(x$  において  $p) \Leftrightarrow (y$  において  $\sim p)$ 」と明確に規定したことは大きい意義を持つ。丹羽氏の論文は現代語を対象としたものであるが、この逆接の規定は古代語にも、そしておそらくは汎言語的に通用するであろう。しかも、これは前件と後件の間に因果性の認められない場合にも十分に適用可能な規定である。

本論文の筆者も、逆接関係の基本は丹羽氏によって示された対立関係であると考えている。従属節  $P$  と主節  $Q$  とが肯定と否定とに対立するとした、丹羽氏の考えをやや変更し、本論文では次のように逆接関係を規定したい。

- 事態 P と Q とが「x において p であるが、y において q である」という対立関係を持つ。ただし述語 p と q とは何らかの意味で対立関係にある。

### 2.2.3.2. 渡部学(1995a)・(1995b)

渡部学(1995a)、同(1995b)では、従来の研究では「通常の逆接」<sup>10</sup>が「対比的逆接」と「推論的逆接」とに大きく二分されていたと述べられている<sup>11</sup>。渡部氏も基本的にはこの二分類を踏襲する。ただし、文を接続するという面で通常の逆接から逸脱するものとして、「感情的逆接」を認めている。

対比的逆接は、「接続された2文間に、対比された述語的要素を認めるもの」(渡部学 1995b : 595。以下、本節の引用のページ数は同論文による)である。

(9) 太郎は背が高い。しかし二郎は背が低い。(渡部学 1995b、例(5)。以下、括弧内の例文番号は同論文による)

(10) 太郎は新聞を読む。しかし二郎は新聞を読まない。(例(6))

(9)は述語の意味的対比、(10)は肯定否定の文法的対比を示している。

推論的逆接は「前件から日常言語的に推論される命題を介して、後件がその推論に相容れないという接続的意味を示す」(p.595)ものである。

(11) 一生懸命働いた。しかし仕事も家族もすべてを失ってしまった。(例(7))

一生懸命働いたことから、日常言語的に妥当な推論として、人生で成功する事が導かれる。この推論を前提として、それに反した事態(仕事も家族もすべてを失ってしまった)が逆接の接続詞によって示される、というのである。

上記の二つの用法は汎言語的に存在するとされるが、渡部氏はこれらに加えて、日本語

<sup>10</sup> 通常の逆接とは、「接続形式が2つの文を結び、間に妥当な論理的関連が想定できるもの」(渡部学 1995a : 557)である。

<sup>11</sup> 沖裕子(1991)は、「しかし」を意味的・形式的特徴から分類し、「推論」「対比」に加え、「前件評価」の用法を認めている。これは、「明日は晴れるとニュースで言っている。しかし、晴れるとどうして分かるのだろうか。」(p.27、(23)の例)のように、内容上「しかし」が明確な反対概念を結んでいないものである。そこでは『読み手・聞き手』に対して『書き手・話し手』がこう思うのだという、いわばモーダルな態度が意味されている」(p.28)。氏は「しかし、今日は楽しいなあ。」(p.29、(30)の例)のようないわゆる「転換」の用法を「前件評価」に含め、聞き手、話し手が共有している{今日のさま}(α)を「しかし」が引き取り、{αが、私は楽しい}と聞き手に向かって主張していると考えている。文頭にくる話題の転換の用法の分析として興味深い。

に特徴的な、話し手の事態に対する受け入れ難さを示す「感情的逆接」を認める。

(12) (夏のむし暑い昼下がり、隣を歩いている友人に、一人言のように) しかし、毎日暑いなあ。(例(8))

この文は、前件と論理的関係を結んでおらず、「文を接続するという機能からは明らかに統語的にも意味的にも逸脱した用法であり、話し手の非論理的、感情的意味を吐露する用法と考えた方がよい」(p.596)と言われている。

渡部氏の研究は、このように用法を分類した上で、ケド、ノニ、シカシなどの接続詞・接続助詞がどの用法として使用されうるか、また、各形式間の意味的差異は何かを探ろうとするものである。

さて、「感情的逆接」は周辺的な用法として、ひとまず措いて差し支えないであろう。すると、逆接は「対比的逆接」と「推論的逆接」とに二分される。確かにこれらは意味用法が全く異なるものとして分かつたよう。しかし、果たして逆接のありようがこの二つでカバーされるのかという点は問題である。これは次の石黒圭氏の分類でも難点となってくるものと考えられる。石黒氏の論文を見た後、その具体例を 2.2.4 節で検討する。

### 2.2.3.3. 石黒圭 (1999)

石黒論文では、「これまで何人もの研究者が指摘しているように、逆接表現を理解するには必ずその逆接の下地となっている前提を同時に意識している」(石黒圭 1999 : 15) ということが逆接を考える際の土台となっている。かかる立場からは、「一般に逆接を表すと考えられる形態的指標が存在しても、前提となる表現が想定できないとき、その表現は逆接表現とは呼べなくなる」(p.15) ことになる。

(13) 新聞でも報道されましたが、これは港則法に関係するのですが、四日市を根城とする小型タンカー数隻に酸のため冷却水パイプが短時間で異常にふしょくして破れたりポンプの弁がふしょくして故障するなどの事故がおこりました。(石黒圭 1999、例 (2))。

以下、本節の用例の後ろに付した例文番号は同論文による)

この例における二つの「～が」は、いずれも後件の背景知識を注釈的に説明するものであり、逆接表現ではないというのである。

さて、石黒氏は前提のタイプを大きく因果関係を前提とするものと並立関係を前提とするものとの二つに分類する。それに従って、逆接のタイプも二つに分かたれるというわけ

である。

因果関係を前提とするのは、次のようなものである。

(14) ロクな治療もうけず、栄養食もとらなかったのに、私の病気は“戦後”が終わると同時に、いつの間にか、なおったも同じ状態になっていたのである。(例(5a))

この前提は「ロクな治療もうけず、栄養食もとらなかったのに、私の病気はなおらなかった。」であり、前件と後件を逆順にした「私の病気はなおらなかったのに、ロクな治療もうけず、栄養食もとらなかった。」はおかしい、とされる。すなわち因果関係を前提とする逆接は原則としては逆順不可能である<sup>12</sup>。

これに対して、並立関係を前提とするものは、原則として逆順可能である。そして、並立関係は「並列関係」、「包含関係」、「平行関係」の三つに下位分類される。

「並列関係」の前提は、並立関係の中でも典型的であり、接続詞「また」や接続助詞「し」で結ばれるのがふさわしいものである。

(15) 侵入した軍隊は、武力的な抵抗には出会わなかったが、占領と同時に、ありとあらゆる抗議の言葉に出会った。(例(9a))

この前提は「侵入した軍隊は、武力的な抵抗にも出会わなかったし、占領と同時に、ありとあらゆる抗議の言葉にも出会わなかった。」であり、逆順にして「侵入した軍隊は、占領と同時に、ありとあらゆる抗議の言葉にも出会わなかったし、武力的な抵抗にも出会わなかった。」としても差し支えない。

「包含関係」は

(16) その会議には役員全員は集まらなかったが、その大半が出席した。(p.18. 例文番号は無し)

のようなものである。前件の「その会議には役員全員は集まらなかった」は、論理的には「ほとんど誰も出席しなかった」、「数名は出席した」、「約半数が出席した」、「大半が出席した」を広く包含している。このように論理的には様々な可能性があるわけだが、石黒氏は、「逆接の前提としてこの前件を見る場合、その意味は『役員全員が集まらなかったのなら、少ない人数しか出席しなかったのだろう。』と理解主体によって極端な方向に限定され

---

<sup>12</sup> 石黒論文の 2.1.2 節で逆順可の因果関係の例があげられているが、「当初のように原則として逆順不可能であると考えておいた方が、並列関係を前提とする逆接との区別をはっきりさせる意味でわかりやすいと思われる。」(p.17) と述べられている。



るのが普通である。」(p.18)という。「こうした極端な方向への推論を制限し、現実在即した適正な推論に戻す場合」(p.18)に逆接が用いられるとされる。包含関係を前提とした逆接は、極端な方向への推論に歯止めをかけるものなのである。

石黒氏の言う平行関係とは、「本来は共存し得ない事態」(p.19)の間の関係である。たとえば、「教師でありながら同時に学生であることも原則的には不可能である」(p.19)。よって、「ある人を教師であるということは、その人が学生ではないということをも含意している」(p.19)。「あの人は教師であって、学生ではない。」というのが並行関係なのである。石黒氏は、「ある人が非常勤の教師でもある一方、同時に大学院の学生でもあるような場合」(p.19)は例外的に共存可能になっているとする。これは

(17) あの人是非常勤講師でもあるし、大学院生でもある。(p.19。例文番号は無し)

のように表されるのが普通であるが、「表現主体が、共存関係を意識しつつも、その共存関係が本来は共存し得ないものであることも同時に意識した場合」(p.19)は、

(18) あの人是非常勤講師でもあるが、大学院生でもある。(p.19。例文番号は無し)

という逆接表現によって述べられるとされる。

包含関係と平行関係の共通点と相違点については次のように述べられている。

含む・含まれる関係を利用しているという意味では、この並行関係を前提とする逆接は包含関係を前提とする逆接と共通しているが、包含関係を前提とする逆接は係助詞「は」の発想を下地にしている逆接であるのに対し、並行関係を前提とする逆接は係助詞「も」の発想を下地にしている点で明らかに異なる。(p.19)

石黒氏の「並立関係を前提とするもの」は一見すると、渡部学(1995a)・(1995b)の「対比的逆接」に当たるかのようなものである。しかし、両者の内包は実は大きく異なる。石黒氏は4節で対比と逆接の違いについて述べている。

(19) 学者の中には、いろいろの角度から、この判決を非難する者が多い。しかし、わたしは、大体において、この判決を支持する。(石黒圭 1999、例(13a))

(20) 学者の中には、いろいろの角度から、この判決を非難する者が多い。一方、わたしは、大体において、この判決を支持する。(石黒圭 1999、例(13b))

石黒氏は(19)を逆接、(20)を対比とし、前者は「後件比重性」を持っている点で後者と分かれたれると考えている。

対比を表す「一方」の場合、前件と後件が対等に並んでいて、単に前件と後件が異な

るのだという対立だけが際立って感じられるのに対し、逆接を表す「しかし」の場合、前件がもとになって後件が導き出されるという推論過程を伴い、その推論の結果が外れているという感じがする。(13a)の例でいえば、「学者の中には、いろいろの角度から、この判決を非難する者が多い。」→「それならわたしもこの判決を非難するか、というところではなく」→「わたしは、大体において、この判決を支持する。」という思考のプロセスを経ているということである。特に大切なのは、「それならわたしもこの判決を非難するか、というところではなく」という、「一方で」のときは切断されているように感じられた前件と後件をつなぐ橋渡しの思考のプロセスが「が」<sup>13</sup>の存在によって保証された点である。そして、この思考のプロセスを経ることによって、後件に比重が偏っている感じ、すなわち後件比重性が生まれるのである。／推論過程の有無こそが逆接と対比を分ける重要なポイントである。(以下略) (石黒圭 1999 : 21、下線は引用者による。改行を／で示した。)

つまり、石黒氏は、逆接は「推論過程」を伴い、その点で対比と異なると考える。一方、渡部氏は「推論的逆接」という分類を別に立てており、「対比的逆接」には推論は関係しないと考えるのである。

石黒論文の逆接の分類をまとめよう。まずは「因果関係を前提とするもの」と「並立関係を前提とするもの」との大きな二分類があり、さらに後者には「並列関係を前提とするもの」、「包含関係を前提とするもの」、「平行関係を前提とするもの」の三つの下位分類があるのであった。

氏の分類によると、逆接は必ず「推論過程」を伴うことになる（だから「推論過程」を伴わない「対比」を、氏は逆接と認めない）。ところが、実際の用例を見るとそのように言い切れないものが存在する。次に節を改めて検討したい。

#### 2.2.4. 先行研究の二分類に収まらない例

渡部氏と石黒氏は逆接を理論的に大きく二分類したものであるが、いずれも通常「逆接」とされるものを網羅していないと思われる。ここでは基本的かつ重要と思われる二つの例を挙げる。

---

<sup>13</sup>正しくは「しかし」であろうか。例(19) (石黒論文の例(13a)) での逆接の接続表現には「しかし」が使われている。

(21) きょうも雨降りになりました。目に見えないような霧雨が降っているのです。毎日々々、外出もしないで御返事をお待ちしているのに、とうとうきょうまでおたよりがございませんでした。いったいあなたは、何をお考えになっているのでしょうか。(太宰治『斜陽』)

(22) 姉さん。／僕たちは、貧乏になってしまいました。生きて在るうちは、ひとにごちそうしたいと思っていたのに、もう、ひとのごちそうにならなければ生きて行けなくなりました。(太宰治『斜陽』、引用は岩波文庫による。改行を／で示した。)

(21)は、述語に意味的対比も肯定否定の対比も認められず、渡部氏の分類では「対比的逆接」とするわけにはいかない。とすると渡部氏は「推論的逆接」とせざるをえないところだろう。しかし、自分が返事を待っていることと、相手がたよりを出すことの間に因果関係はない(「返事を待てば必ずたよりが来る」とは言えない)。「返事を待っている」ことから「たよりがくること」への推論も成り立たない。渡部氏の分類ではこの例を扱えないのである。また、逆接は必ず推論過程を伴うと考える石黒氏の論によっても当然この例は扱えない。

(22)は、前件が言語主体の希望を表すものである。後件で、実際にはその希望が叶えられず終わったと述べられる。これも推論が認められない例である(「ひとにごちそうしたいと思っているのなら必ずごちそうできる」という推論は成り立つはずがない)。(21)同様、渡部氏も石黒氏もこの例は扱えない。

これらは周辺的な例ではなく、むしろ中心的と考えられる逆接の文であろう。望ましい逆接の分類は、少なくともこれらを扱えるようなものでなくてはならないと考えられる。

#### 2.2.5. 網羅的な分類へ

我々が先の例を虚心坦懐に見たとき、そこに逆接性を認めるのはなぜであろうか。

(23) きょうも雨降りになりました。目に見えないような霧雨が降っているのです。毎日々々、外出もしないで御返事をお待ちしているのに、とうとうきょうまでおたよりがございませんでした。いったいあなたは、何をお考えになっているのでしょうか。(太宰治『斜陽』、(21)の再掲)

(24) 姉さん。／僕たちは、貧乏になってしまいました。生きて在るうちは、ひとにごちそうしたいと思っていたのに、もう、ひとのごちそうにならなければ生きて行けなくな

りました。(太宰治『斜陽』、(22)の再掲)

(23)の言語主体は、毎日、外出せずに相手の返事を待っている。それは明らかに意図的な行為である。そして、言語主体がそのような行為を取るのは、たよりがきつと来ると思っているからである。つまり、返事を待つという意図的行為の裏には、たよりが来るという期待が伴っている。その期待が「とうとうきょうまでおたよりがごさいませんでした」と裏切られており、だからこそ逆接の接続表現ノニによって結ばれるのであると考えられる。ここでは、期待とそれに反する現実とが逆接関係にある。

(24)では前件が「～したいと思っていた」と、言語主体の期待を直接表している。後件はそれに反する現実である。(23)同様、(24)もやはり、期待とそれに反する現実とが逆接関係を結んでいると考えられる。

先行研究のキーであった「推論」という概念の代わりに、本稿では「期待性」という概念を分類の軸としたい。(23)(24)の例を見ても、「推論」という論理的な概念よりも「期待性」という心理的な概念を根本に据えた方が、より逆接の実態を捉えるのにふさわしいと考えられるのである<sup>14</sup>。

なお、井島正博(1996)、同(1999)でも「期待」という用語が使用されている。井島正博(1996)ではこの概念について、「“期待”という概念を設定することは、現実世界とは異質の心的世界を前提としている」(p.2)と述べられ、「予想、思い込み、希望など言語主体の心的世界に生じる内容を、総じて『期待』と呼ぶことにしたい」(p.2)と定められている。井島正博(1999: 108-9)は、「太郎が来る(p)ので、花子は帰る(q)」という順接の文と、「太郎が来る(p)のに、花子は帰る(q)」という逆接の文とが、いずれも論理的には  $p \cdot q$  という同一の表現になってしまうと指摘し、論理的には仮定／確定、順接／逆接の区別ができないと主張する。井島氏はそこで期待概念を持ち込み、「太郎が来るので、花子は帰る」という現実には「太郎が来れば、花子は帰る」という期待に一致するので順接確定表現として表され、「太郎が来るのに、花子は帰る」という現実には「太郎が来れば、花子は帰らない」という期待に一致しないので逆接確定表現として表されるという(同、p.109)。氏はこのように期待概

---

<sup>14</sup> ただし、本論文でも「推論」という概念を否定するわけではない。「期待」と「推論」とは排他的な概念ではなく、「推論に基づいてある事柄が起こることを期待する」というのは十分考えられるからである。実際、逆接のより細かな下位分類を設けるに当たって「推論」をその基準に使用する。

念によって接続表現を捉えるのである。そして、假定／確定、順接／逆接という十字分類によって区分けされた四つの領域は同価値なのではなく、順接假定条件の期待表現を中心とすると見ている(同、p.110)。

本論文も「期待」という概念の内容に関しては井島氏とほぼ同じ考えである。しかし本論文は順接と逆接とは簡単に対応しないと考える点で井島氏とは異なる。本論文は假定／確定、順接／逆接という十字分類にそもそも立脚しないのである。また、本論文が「期待性」を導入する目的は、(23)や(24)のように因果関係にはない前件と後件の間の逆接性を説明することがその一つであり、その点でも井島氏と異なる<sup>15</sup>。

さて、本稿は期待性を軸として逆接を三つに大きく分類し、さらにそれらを下位分類する。次節で三種の大分類について述べる。

## 2.3. 三分類の概要

### 2.3.1. 期待性による二分

2.2.3.1 節で述べたとおり、本論文は丹羽哲也(1998)を参考にし、逆接関係を次のように考える。

- 事態 P と Q とが「x において p であるが、y において q である」という対立関係を持つ。ただし述語 p と q とは何らかの意味で対立関係にある。

述語 p と q の対立は、肯否対立である、語彙的な意味の対立である、内容的対立であるなど、いろいろなものが考えられる。

「x において p である」「y において q である」という二つの事態が「逆」であるという表現者の認識が、「が」(現代語)や「ども」(古代語)などの接続助詞を使うことで表明されているのである。

そして、本論文では、かかる逆接の意味を前句 P と後句 Q との間に期待性が存在するか否かで大きく二分する。

(25) 春が来た (=P) のに、暖かにならない (=Q)。

---

<sup>15</sup> 「期待」概念を使って接続表現をどのように捉えるかで井島氏と本論文は異なるが、それはあくまで論の目指すところの差であって、本論文は井島氏の考えを否定するものではない。

(26) こちらの箱は大きい (=P) が、あちらの箱は小さい (=Q)。どちらを開ける？

(25)では春が来たこと (=P) が、暖くなるはずだという期待感を通常伴うだろう。その期待が外れて「暖かにならない」 (=Q) のである。先ほどの枠組み「x において p であるが、y において q である」でいうと、x は「期待」、y は「現実」に当たる。p は「暖かくなる」、q は「暖かにならない」であり、この間には肯否対立が存する。全体としては「期待において暖かくなるはずだが、現実においては暖かにならない」となる。P と Q とは、このように期待性を元とした逆接関係にあると言える。

それに対して(26)は二つの異なるものを選択肢として提示しているのであり、「期待が外れた」ということはない。このタイプが「こちらの箱 (x) は大きい (p である) が、あちらの箱 (y) は小さい (q である)」と逆接の構造に従うことは明らかである。この期待性の有無というのが逆接関係を考える上で大きな違いの一つと考えられる。

今、「期待」と言ったが、そこには論理的推論に基づく期待から、話し手の単なる楽観的希望までいろいろなものが考えられる。ひとまずは「現実に関わったということが確実ではない、ある事柄の実現を心の中で見込む」というくらいの広い意味で「期待」という用語を使用する。「期待」の実際の意味については、2.4 節の個々の例を通して明らかにする。

### 2.3.2. 期待性がある場合の逆接

期待性がある場合の逆接関係から論じよう。

もしも期待通りにものごとが進むのなら、そこに逆接として表現される余地はない。「逆」となるからには、期待は否定されねばならない。本稿は、この「期待の否定」に言語主体がいかに関わるかということに着目し、期待性がある場合の逆接を二分したい。

まず考えられるのは、言語主体自らの抱く期待が否定されるという場合である。典型的には、言語主体の期待はそれに反する現実事態によって打ち消される。

(27) 彼女が来ると思っていたのに、とうとう来なかった。

の文では、「彼女が来る」と期待していたのは当の話し手である。しかしそれは現実には起こらなかった。前句で言われた期待は後句の現実事態によって打ち消されており、前句と後句は逆接関係によって結ばれることとなる。(25)でも、暖かくなるはずだと話し手本人が期待しているのだが、それが打ち消されている。

この場合、言語主体は「自らの期待が外れた」、「思いの外である」と感じているのであ

り、本稿はこの類の逆接を意外的逆接と呼ぶこととしたい。現代語では接続助詞「ノニ」によって逆接関係が表示されることが多い。

「期待の否定」への言語主体の関わり方として、もう一つが考えられる。すなわち、何者かが抱く期待を言語主体が否定するという場合である。典型的には、他者がある期待を抱くだろうと想定して、その期待に対して言語主体が否定的な主張を行うものである。

(28) 勝負には負けたものの、満足の行く試合だった。

この文は、「勝負に負けたのなら満足しないだろう」という期待に対して「否、満足の行く試合だった」と述べているものである。満足しているのは言語主体たる自分である。そしてこの後句は、「満足しないだろう」という他者の期待を想定して、それを打ち消すように述べられていると考えられる。(28)に否定が関与していることは、それが概ね「確かに勝負には負けたが、だからといって試合を不満と感じたわけではない」とパラフレーズ可能なことから認められよう。「勝負に負けたのなら満足しないのでは？」という他からの問いかけを想定して、それに対して自ら「否」と答えているのだとも言える。

以上においては、言語主体は「自らの期待が外れた」と感じているわけではなく、むしろ積極的に期待を打ち消している。言語主体は何者かの期待に対して「否」と反発するのである。本稿はこの類のものを反発的逆接と呼ぶ。

意外的逆接と反発的逆接における否定作用のあり様は対蹠的である。意外的逆接では言語主体は「期待が否定された」と受動的にとらえていることが表現されるが、反発的逆接では言語主体が「期待を否定した」と能動的に主張していることが表現される。「期待の否定」と言語主体との関わりにより、期待性がある場合の逆接はこのように大きく二分されるのである。

### 2.3.3. 期待性がない場合の逆接

続いて、前句 P と後句 Q という二つの句の間に期待的關係が無いものに移る。

(29) こちらの箱は大きい (=P) が、あちらの箱は小さい (=Q)。どちらを開ける？ ((26) の再掲)

(30) 彼は数学は得意だ (=P) が、英語は苦手だ (=Q)。

これらの文では、前節で見たような期待の否定は見出されない。二つの句 P と Q とが逆であるというのは、述語の意味的な対立 (大きい／小さい、得意だ／苦手だ) によって示さ

れている。「x において p であるが、y において q である」という逆接の構造がそのまま認められる。このように「期待性を介在させずとも、対立関係にある述語によって、二者の項が逆の関係で比べられているもの」を本稿は対比的逆接と呼ぶ。

対比的逆接では、比べられる二つが対等の関係にあり、両者に同じだけの比重がかかっている。そのため、(29)のガの前後を交換して、

(31) あちらの箱は小さいが、こちらの箱は大きい。どちらを開ける？

としても意味するところはほぼ変わらない。

対比における二句の対等性は、

(32) こちらの箱は大きくて、あちらの箱は小さい。どちらを開ける？

(33) こちらの箱は大きく、あちらの箱は小さい。どちらを開ける？

のように、テ形による接続や連用形による接続が成り立つことでも確認される。これらは一般に並列と呼ばれるものである。対比的逆接は並列に連続するものとして、意外的逆接・反発的逆接とは異なる性質を持っているのである。

以上のように、逆接句は意味的観点から三分類される。期待性がないか有るかによって「対比的逆接」とそれ以外に分かたれた。さらに期待の否定に言語主体がいかに関わるかということから意外的逆接と反発的逆接とが区別された。分類の大枠は下の図のようにまとめられる。

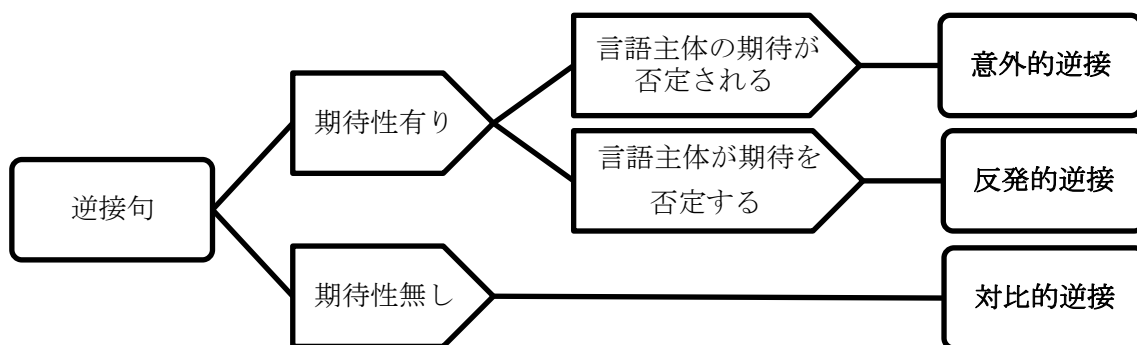


図 5 逆接句の意味分類



## 2.4. 個々の分類の詳細

本節では、先の三つの大分類を古代語の例を通して具体的に見ることにより、それぞれをいくつかの下位範疇に分ける。以下、逆接の用例としては、万葉集の「～ド」、「～ドモ」の例を使用する。また、コソの係り結びで逆接となるものの用例も基本的には万葉集から採る。ただし、万葉集に近い用法のものは平安期の例を挙げる場合がある。

### 2.4.1. 意外的逆接

先に意外的逆接と呼んだものには期待性が存するのであった。本節では、言語主体がいかにして期待を抱いているかに注目して、意外的逆接を三つに下位分類する。

#### 2.4.1.1. 論理的推論による期待

「推論」とはある事実を元にして推し量り、結論を導くことであるが、特に「因果関係に基づく推論」のことを「論理的推論」と呼ぶこととする。意外的逆接の下位分類として今考えたいのは、「言語主体が論理的推論を行い、その結論が実際に起こる（もしくは起こった）と期待するが、これが現実事態によって否定される」というものである。推論の方向としては原因から結果を導くものと、逆に、結果から原因を導くもの<sup>16</sup>との二つがあるので、これに対応して逆接のあり方としても

(a) 「ある事実を原因と見なして結果を推し量るが、現実事態によってその推し量りが否定される場合」と、

(b) 「ある事実を結果と見なして原因を推し量るが、現実事態によってその推し量りが否定される場合」とが考えられる。次節でまず前者から見よう。

##### 2.4.1.1.1. 原因から結果への推論

(34) 我が待ちし 秋は来りぬ 然れども 萩の花そも いまだ咲かずける

(私が待っていた 秋は来た しかしながら 萩の花が まだ咲かないことだ)

万葉 2123

この歌では、「秋が来た」という既定の事実が認められる。そして「秋が来れば萩の花が咲

---

<sup>16</sup> これは「逆行推論」と呼ばれることがある。

く」という因果関係が一般常識的知識としてある。言語主体は、既定の事実を原因と見なし、それと因果関係とを合わせることによって、「萩の花が咲くはずだ」ということを結論として導く。言語主体が推論の結論たる結果の実現を見込んでいるという点で、「萩の花が咲く」という事柄が期待されていると言える。ところが実際にはそれに反して「萩の花はまだ咲かない」。前件から結果を推論して、その実現が期待される中で、それに反する現実が後件によって述べられるのである。この二者の関係を、逆接的なものとしてドモが結んでいる。上述のことは、模式的には下の図のように表せよう<sup>17</sup>。

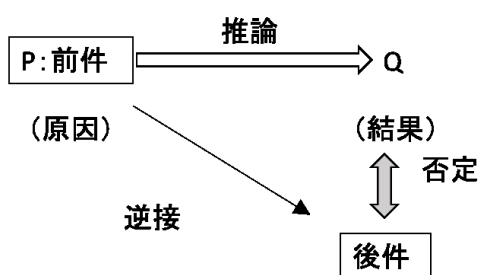


図 6 原因から結果への推論が関わる意外的逆接の構図

以下に類例を挙げる。

(35) 我が背子が やどのなでしこ 日並べて 雨は降れども 色も変はらず

(あなたの 家のなでしこは 幾日も続いて 雨が降っているが 色も変わらない)

万葉 4442

(36) …み雪降る 冬に至れば 霜置けども その葉も枯れず 常磐なす いやさかばえに…

(…雪の降る 冬になると 霜が置いても その葉も枯れず 永久に変わらないように  
いよいよ栄え輝いて…)

万葉 4111

(37) …布肩衣 <sup>ぬのかたぎぬ</sup> ありのことごと <sup>きそ</sup> 着襲へども 寒き夜すらを…

(…布の肩衣を あるかぎり全部 着重ねるが 寒い晩なのに…)

万葉 892

(38) 我が君に 戯奴は恋ふらし 賜りたる 茅花を食めど いや痩せに痩す

<sup>17</sup> 川端善明(1958 : 44)で似た図が示されている。

(我が君に 私めは恋をしているようだ 頂いた 茅花を食べたが 痩せる一方だ)

万葉 1462

(39) 針袋 帯び続けながら 里ごとに 照らさひあるけど 人も咎めず

(針袋を 付けたまま 里々を 見せながら回ったが 誰も変だと思わない)

万葉 4130

(40) 家人の 使ひにあらし 春雨の 避くれど我を 濡らさく思へば

(この春雨は家人の 使いであるらしい 春雨が 避けても私を 濡らすことを思うと)

万葉 1697

次は言語主体が、自らの推論が外れて意外であるということを明示的に言語化している例である。(41)では「怪し」という述語の語彙的意味によって、(42)では「なにしか(なぜ)」という疑問語によって意外性が表されている。

(41) あらたまの 五年経れど 我が恋ふる 跡なき恋の 止まなくも怪し

万葉 2385

(42) 朝づく日 向かふ黄楊櫛 古りぬれど なにしか君が 見れど飽かざらむ

万葉 2500

#### 2.4.1.1.2. 結果から原因への推論

前節で見たのは、(a)「ある事実を原因と見なして結果を推し量るが、現実事態によってその推し量りが否定される場合」であり、2.2 で取り上げた先行研究でも、順接とよく対応するものとして逆接の一分類にまず挙げられるものであった。

ところで、山口堯二(1980: 65-66)では、前節のもの(氏が「因果対立性」と呼んでいるもの)と異なる、「因由不在性」という逆接表現が指摘されている。氏は「因由不在性」の表現について

和歌の表現で次のように前句が「……ねど(も)」と否定の形をなすものには、その判断がむしろ観念性にすぐれ、後句の現実からの推理によってその原因理由を求めながら、それにふさわしい事柄が存在しないことを示す意味あいの認められるものがある。

(p.65、下線部は引用者による)

と述べ、次のような例をあげている。

(43) うつたへに鳥ははまねど（雖）縄延<sup>は</sup>へて守らまく欲しき梅の花かも（万葉 1858）

(44) あしひきの山のあらしは吹かねども（雖）君なき夕<sup>よひ</sup>はかねて寒しも（万葉 2350）

(45) ひとりぬるところはくさばにあらねども秋くるよひは露けかりけり（古今 188）

そして、因果対立性の表現との違いについて、

因果対立性の表現が一般に因果関係に照らした結果の対立的なあり方に主として関心を寄せるのに対して、これらにはむしろ原因理由にふさわしい事柄の不在を指摘することへの興味が先行している。その意味でこれらの両句の意味関係は両句がともに現実的事態である場合の因果対立性とは区別することが可能である。そこで、このような意味関係を因由不在性と呼ぶことにしよう。（p.65、下線部は引用者による）

と説かれる。さらに、

この種の逆接では後句の状態を暗喩するような効果も認められる。それらしい原因理由もないのに、まるでであるかのような暗喩効果である。たとえば、「ひとりぬるところはくさばにあらねども……」には「草葉でもないのにまるで草葉のように……」という後句の状態への暗喩効果が期待されているであろう。そういう暗喩効果は、おそらくその判断の推論的な自覚性にみあった所産であり、この種の和歌における因由不在性の表現ではそういう効果が表現価値の半ばを占めているようにさえ思われる。

（pp. 65-6）

と述べられている。

さて本論文は、山口氏の言う「因由不在性」を、(b)「ある事実を結果と見なして原因を推し量るが、現実事態によってその推し量りが否定される場合」（の一つ）と見たいのである。すなわち、(45)でいうならば、「秋の夜に一人寝る床が濡れている」という事実を結果と見なし、そこから「この床は草葉だからだろう」と原因を推し量る（この「原因」が推論の結論にあたる）。実際は「床は草葉ではない」わけであり、推論の結論が否定されている。山口氏のいう「原因理由にふさわしい事柄」（今の場合、床が草葉であること）が「不在」という形で否定されるために、意外性が表出されるのである。この表現は氏の言うように「Pではないのに、まるでPであるかのようにQという事態が進行している」という型でまとめられるだろう。万葉集から同じ表現のものを挙げる。

(46) この小川 霧そ結べる 激ち行く 走井の上に 言挙げせねども

（この小川に 霧が出ている 激り行く 走井の上に 言挙げをしたわけでもないが）

言挙げをしていないのに、あたかも言挙げをした結果のごとく、霧が出ているのである<sup>18</sup>。

これら「ある事実を結果と見なして原因を推し量るが、現実事態によってその推し量りが否定される場合」の例は、「…ネド（モ）」という形式であった。コソの係り結びにこれと並行的に分析できるものが見られるのである。

(47)・島山を い行き巡る 川沿ひの 岡辺の道ゆ 昨日こそ 我が越え来しか 一夜のみ 寝

たりしからに 峰<sup>みね</sup>の上の 桜の花は 瀧の瀬ゆ 散り落ちて流る

(島山を 行き巡る 川沿の 岡辺の道を 昨日 わたしは越えて来たばかりなのに た  
だ一泊 したけなの に 尾根の 桜の花は 瀧の瀬を 散り落ちては流れている)

・君が見む その日までには 山おろしの 風な吹きそと うち越えて 名に負へる<sup>もり</sup>社に  
風祭りせな

(君が見る その日までは 山おろしの 風よ吹くなど (竜田道を) 越えて 名高い竜田  
の社で 風祭りをしよう)

前半と後半に分けて示した。虫麻呂の、難波から大和への帰路の歌で、竜田山の桜を詠んだものである。題詞に「難波経宿明日還来之時歌一首」（難波で一晩泊まりその翌日帰って来たときの歌一首）とある。前半では、一夜明けてみればもう桜の花が散っていたという驚きが詠まれている。この言語主体は、瀧の瀬を流れている桜の花を見たその時点にはじめて意外感を抱いている。「この前見たときは咲いていた桜の花が散って流れている」という事態が推論の出発点である。これを結果とみなし、「ずっと前に岡辺の道を越えて来た」と原因を探るが、実際にはそれは昨日のことであった。すなわちずっと前ではない、と否定される。ここから時間の推移を思いがけなく早く感じるという意外性が生じるのである。「一夜のみ寝たりしからに<sup>19</sup>」という言い方によっても、「たった一夜寝ただけ」と時間の短さを強調し、結果に対して原因が釣り合わないということは明らかである。

これは、図 6 で示した「原因から結果への推論」の図式の解釈とは異なるものである。

<sup>18</sup> 『新全集』頭注に、「言挙げをすれば霧が発生するというような俗信があったか」と言う。

<sup>19</sup> 「からに」は、「原因がきわめて軽いにもかかわらず結果の重いことを示す。…ばっかりで。それだけの原因で。」(『日本国語大辞典』第二版)

仮に、(47)を図 6 のように解したらどうなるであろうか。その解釈を試みると、昨日の時点で「現在桜の花が咲いているから、明日もまだ桜の花は散っていないことだろう」と推論し、日が明けてみて、「花が散って瀧の瀬に流れている」という現実事態によってその推論が否定されたということとなる。ところがこの言語主体は、昨日の時点では、桜の花が一日後に散るかどうかということを危惧しておらず、恐らく意識すらしていないだろう。明くる日（＝作歌時点）、瀧の瀬を流れている桜の花を見たその時にはじめて意外と感じているのであって、前もって何かを期待していたということはない。言語主体は、「桜の花は瀧の瀬ゆ散り落ちて流る」という突発的で思いがけない結果事態を目の前にして、そこから反省的に、時間的に先行する原因を探って（推論して）いるのである。こう考えると、(47)は「原因から結果への推論」の解釈を拒み、「結果から原因への推論」の解釈がふさわしいと言える。

先の因由不在性は、「P ではないのに、まるで P であるかのように Q という事態が進行している」というものであった。(47)もそれに類して、

- P（＝ずっと前に難波に行っていた）ではなく P'である（＝つい昨日だ）のに、まるで P であるかのように Q（＝花が散る）という事態が進行している  
という構図をなすと考えられる。すなわち、「P ではない」の具体的有り様として、「(P とは全く別の) P'である」と述べられているのである。そしてその「P'である」ことがコソの係り結びで表されている。

万葉集を見るとき、時の名詞の「昨日」がコソに前接して、事態がつい最近起こったということが示されるケースが多い。原因たる事態をずっと昔のことにように推量したが、実はつい昨日のことだった、という型を成している。下の例のいずれも、時間の推移の速さ、事態変化の間の短さということが歌の中心にあるのが明らかである<sup>20</sup>。

(48) 昨日こそ 舟出はせしか いさなとり 比治奇の灘を 今日見つるかも

万葉 3893

(49) 昨日こそ 年は果てしか 春霞 春日の山に はや立ちにけり

万葉 1843

---

<sup>20</sup> 注釈書類でもこの種の「昨日こそ」は「つい昨日」と、時間の隔たりがわずかであるように訳されることが多い。

(50) 昨日こそ 君はありしか 思はぬに 浜松の上に 雲にたなびく

万葉 444

このように、係り結びの後続句に「まるで P であるかのように」と補って解すと、どこに意外性が存するかが捉えられる。さらに、これが言語化されて歌の表面に出てくる場合がある。そうすると上記の構図は一層明瞭であろう。

(51) 妹をこそ 相見に来しか 眉引きの 横山辺りの 鹿猪なす思へる

(あの子に 逢いに来ただけなのに (眉引きの) 横山辺りの 猪のように思っている)

万葉 3531

(52) 折りつれば袖こそほへ梅の花ありとやここにうぐひすのなく

(梅の花を手折ったので私の袖が匂っている。それなのに、梅の花があると思ったのか、ここで鶯が鳴いているよ)

古今 32

(51)は、愛する人に逢いに来たところその親がつれなくあしらったという事実が推論の出発点にある。その原因を「自分が何か悪いことをしたのか」と探るが、反省してみても「ただ恋人に逢いに来ただけで、思い当たる節はない」というのである。ここで「鹿猪なす (= 田畑を荒らす猪であるかのごとく)」とあるのに注意したい。これが上述の構図の「まるで P であるかのように」に当たる。私は猪でもないのに、あたかもそのように事態が進行しているというのであり、そこに意外性がある。全体の解釈を、言葉を補いつつ改めて示すと、「(別に田畑を荒らしに来たわけではなく) ただあの子に逢いに来ただけなのに、あたかも私が猪であるかのように親は思っていることだ」となる<sup>21</sup>。(52)は古今集からの例。今ここで鶯が鳴いているという事実があり、その原因を「梅の花がここにあるからか」と推し量る。詠み手が原因をあれこれと探っているということは、「～とや」という疑問の語に明らかである。実際には梅は無く、袖に移り香が残っているだけである。梅の花があるかのごとく事態が進行している(鶯が鳴いている)というのである。

次の例も同じように分析される。

(53) 昨夜こそは 見るとさ寝しか 雲の上ゆ 鳴き行く鶴の 間遠く思ほゆ

万葉 3522

<sup>21</sup> これと同じ発想の歌に、「梅の花見にこそ来つれうぐひすのひとくひとくと厭ひしもをる(古今 1011)」がある。

(ずっと昔のことではなく) つい昨夜寝たばかりなのに、遠いことのように寂しく思われるというのである。

ここまで見てきた意外的逆接のコソの係り結びについて、文の構造とともにまとめよう。ここでの推論は、コソの係り結びの後ろに来る句（後続句）で示される事実 **Q** から出発する。**Q** を結果と見なし、そこから原因 **P** を推し量り、期待する。実際にはその期待とは全く異なった、期待に反する事柄 **P'** が起こっているものであり、**P'** がコソの係り結びで表されるものである。よってコソの係り結び (**P'**) と **Q** とは逆接の関係となる。この種のコソの係り結びは、**P** を補うことにより、「(**P** ではなく) **P'** であるのに、(まるで **P** であるかのよう) **Q** という事態が進行している」という解釈を受ける。これを模式化したのが図 7 である。

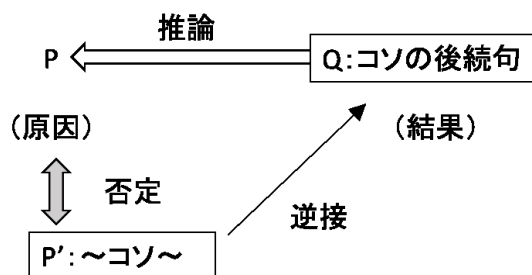


図 7 意外的逆接のコソの係り結びの構図

コソの性質が逆接と関与する原理の詳細は第 3 章で述べるが、意外的逆接のコソ係り結びは、このように「ある事実を結果と見なして原因を推し量るが、現実事態によってその推し量りが否定される」という、結果から原因への推論に関わるわけである。

#### 2.4.1.2. 言語主体の意思・希望・予想

この種の逆接は、前件の内容が言語主体（詠み手、話し手）の意思・希望・予想、すなわち実現が期待されることにあたり、後件で表される現実事態によってそれが未達成・失敗に終わったことが言われるものである。ここでの期待性は 2.4.1.1 節とは異なり、論理的推論とは関わらない。



(54) 恋ひつつも 居らむとすれど 木綿間山 隠れし君を 思ひかねつ<sup>22</sup>も

(恋いながらも じっと待っていようとするが 木綿間山に 消えた人を 思う辛さにこ  
らえきれない)

万葉 3475

前件で「居らむ」と助動詞ムが使われており、話し手の意思としては辛抱したいということが示されている。後件では現実世界が言及され、実際には我慢できないことが述べられている。つまり実際には抱いていた意思と逆の結果に終わった、と後件で言われるのである。模式的には次のようになる。

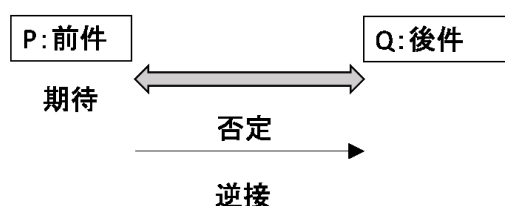


図 8 言語主体の意思・希望・予想による意外的逆接の構図

別の例を挙げる。

(55) 鶏が鳴く 東をさして ふさへしに 行かむと思へど よしもさねなし

(鶏が鳴く 東をめざして ふさへしに<sup>23</sup> 行こうと思うが 行くすべがない)

万葉 4131

前件は「～むと思へど」と、話し手の意思であることが明瞭である。後件では、「よし（手段）」がないことによってその意思が達成されなかったことが言われている。

以下の歌も類例である。それぞれ、意志の助動詞ム、話し手の希望を表す助詞ナ、願う意の動詞「欲ル」連用形から生じた「～欲リス」によって、言語主体の意志・希望が表示されている。

(56) 粟島に 漕ぎ渡らむと 思へども 明石の門波 いまだ騒けり

(粟島に 漕ぎ渡ろうと 思うのに 明石の波が いまだおさまらない)

万葉 1207

<sup>22</sup> 「思ひかぬ」には次の二種類の意味がある。①思おうにも思う心にたえられない。恋しさをおさえられない。②思いつかない。考え及ばない。([『時代別国語大辞典 上代編』の「おもひかぬ[念不得]」の項目による)。ここでは、①に当たり、つらい思いにこらえきれないの意である。

<sup>23</sup> 「ふさへしに」は未詳。(新全集)

(57) すべもなく 苦しくあれば 出で走り 去ななと思へど 此らに障りぬ

(どうしようもなく 苦しいので 走り出て 去りたいと思うが この子らに妨げられた)

万葉 899

(58) 朝なぎに 来寄る白波 見まく欲り 我はすれども 風こそ寄せね

(朝なぎに 寄せて来る白波を 見たいと 我は思うけれども 風が寄せてこない)

万葉 1391

意思・希望・予想が未達成に終わった理由が順接の条件句で示されることもある。

(59) 常磐なす かくしもがもと 思へども 世の理なれば 留みかねつも

万葉 805

「かくしもがもと 思へ」が話し手の希望。「留みかねつも」と、現実でそれが否定される。

「世の理なれば」がその理由に当たっている。次も類例である。

(60) 世間を 憂しとやさしと 思へども 飛び立ちかねつ 鳥にしあらねば

万葉 893

上代では「言語主体の意思・希望・予想」というタイプの意外的逆接がコソの係り結びによって示されることはない。万葉集中を見ても、「～と思へど」に相当する「～とこそ思へ」のような言い方は存在しない<sup>24</sup>。

#### 2.4.1.3. 意思・希望・予想を伴う行為

(61) 忘らむて 野行き山行き 我来れど 我が父母は 忘れせぬかも

(忘れようとして 野を行き山を行き 私は来たけれど 私の父母は 忘れられないなあ)

万葉 4344

この歌では、「忘らむ」という冒頭で言語主体の意思が示されている。「忘らむて」が「野行き山行き 我来れど」に係っていることで分かるように、野を行き山を行き来するという行為が、忘れようという意思に基づいて行われているのである。逆接の接続助詞は「来」の方についているが、後件では「忘れせぬかも」と、話し手の意思が実現しなかったことが述べられる。

全体の構造を見渡しても、～ドという逆接関係を成り立たせているものは、「忘らむ—忘

<sup>24</sup> ただし、平安期になると「～とこそ思ひしか」、「～とこそ思ひつれ」のような例が出るようになる。

れせぬかも」という「意思—否定的現実」の関係と考えられる。言語主体の行為の裏にある意思・希望・予想を考えることで、前件が言語主体の意思・希望・予想を直接表している場合と同様に分析することが可能なのである。

次は言語主体の意思・希望・予想が言語化されていない（表面にあらわれていない）例である。

(62) 東の <sup>たぎ</sup>多芸の御門に さもらへど 昨日も今日も 召す言もなし

（東の 多芸の御門に 伺候しているが 昨日も今日も お召しの言葉がない）

万葉 184

「皇子尊の宮の舍人等が働傷して作る歌廿三首」のうちの一首。第三句の原文は「雖伺侍」で「さもらへど」と訓まれるが、「さもらふ」は動詞の「守る（モル）」から出来た語で、「様子を見守りながら待機する」が原義である。ここでは「貴人に伺候する」の意であるが、お仕えする皇子はもはやいないのである。

一般に、伺候していれば必ずお召しがあるかという、そういうことは成り立たない。すなわち(62)の逆接句は「伺候していればお召しがある」という順接と対応関係を持っていない。ここでなぜ逆接のドが使われているかを知るためには、サモラフという行為の裏にある期待を読み込まねばならない。伺候している舍人は、お召しがあろうかという期待をつい昔の日々のごとく抱いてしまう、そのようにこの歌は詠まれているのである<sup>25</sup>。ところが実際には、その期待に反してお召しがない。行為の背後にある期待と現実事態とが相反するから逆接で結ばれているわけである。

例を追加しよう。

(63) 宇治川を 舟渡せをと 呼ばへども 聞こえずあらし 梶の音もせず

万葉 1138

話し手は、当然、舟を渡してほしいと思って「舟を渡せと何度も呼ぶ（舟渡せをと呼ばへ）」のである。それが「梶の音もせず」と失敗に終わり、その理由を「聞こえずあらし」と推

<sup>25</sup>『万葉集注釈』の【考】の「かうしてありし日の如く伺候してゐると、今にもお召しになる事があるやうな気がするが、それはもういつまで待つても現実にはあり得ない事だ、といふ歎が、薨去の事を云はず、悲哀の語を述べずに、すなほに切実に表現されてゐる」という説明がわかりやすい。折口信夫『口訳万葉集』の「いつもと変りなく、自分は東の水の落ち口の激湍(たぎ)の御門(ごもん)の詰所に詰めて居るが、とんと御召しにならない。昨日もさうだ。今日もさうだ。思へば、君はもう此御殿には、御いでにならぬのだ。」という解釈も参考となる。

測している。

(64)は大君がよみがえると思って祈っているのであり、(65)は亡くなった河内王が戻ってくるかと思っ待っているのである。

(64) 泣沢の 神社に神酒据ゑ 祈れども 我が大君は 高日知らしぬ

万葉 202

(65) 豊国の 鏡の山の 岩戸立て 隠りにけらし 待てど来まさず

万葉 418

上代ではこの「意思・希望・予想を伴う行為」の意外的逆接は、コソの係り結びによっては示されない。

#### 2.4.1.4. 意外的逆接のまとめ

以上、「意外的逆接」の様相を、その下位分類とともに見てきた。上代のコソの係り結びの逆接用法が表すのは「結果から原因への推論による期待」であり、それ以外の「原因から結果への推論による期待」・「言語主体の意志・希望・予想」・「意志・希望・予想を伴う行為」のタイプの逆接は表すことはなかった。コソの係り結びがなぜこういった意味を表すのか（もしくは表さないのか）という原理面については、3.5 節で考える。

#### 2.4.2. 反発的逆接

反発的逆接は、何者かがある期待を抱くことを想定して、言語主体がこれを否定するものである。言語主体がいかにして期待を否定するかに着目して、これを三分類する。

##### 2.4.2.1. 相手の短絡への非難

反発的逆接の一つとして、他者がある推論を行うだろうと想定し、それを短絡的である、間違った推論の仕方であると否定し、非難するものがある。ここでいう正しくない推論とは、「ある事実を元にして、無根拠にそれを拡張し他の事柄に結びつける」というようなあり方である。

(66) あらたまの 年の緒長く 逢はざれど 異しき心を 我が思はなくに

((あらたまの) 年月の長いこと 逢っていませんが 浮気心を 私は持っていませんよ)

万葉 3775

狭野弟上娘子に対して中臣朝臣宅守が詠んだ歌であり、ここでの「他者（相手、聞き手）」は娘子と明確に定まっている。この前件で表される「長いこと逢っていない」(=P)という事は自他共に認める事実である。相手はこれを誤って拡張して「詠み手が浮気心を持つこと」(=Q)を推論するかもしれない。しかしそれは間違っていると、後件で言語主体が否定している。「Pは認めるもののQとまでは言えない」、「Pではあるが、だからといってQというわけではない」と、話の拡大に歯止めをかけるのである。言語主体が能動的に否定しているのであり、ここに意外性といったものは認められない。反発的逆接は、意外的逆接とは明らかに性質の異なるものである。

次のものも同様の例である。この種の逆接は、後件がしばしば「～ナクニ」という詠嘆的打ち消し表現である（(67)・(68)）、反語表現である（(69)・(70)）など、修辭的に偏りを見せている。反語とは否定の答えが前もって用意されている問いである。これらの後件では、言語主体が強く相手の推論の否定に向かっていることが見てとれる。

(67) 大崎の 神の小浜は 小さけど 百舟人も 過ぐといはなくに

（大崎の 神の小浜は 小さいが どの舟人も 過通りすることはないよ）

万葉 1023

(68) 韓衣 裾のうちかへ 逢はねども 異しき心を 我が思はなくに

（韓衣の 裾が合わないようにな あなたと逢わないが あだ心を 私が抱いているわけではない）

万葉 3482 類、3588

(69) 雲隠る 小島の神の 恐れば 目は隔てども 心隔てや

（雲に隠れている 小島の神が 恐いので 逢うことはつつしんでいるが 心は離れていないのですよ）

万葉 1310

(70) 妹が袖 別れて久に なりぬれど 一日も妹を 忘れて思へや

（妻の袖は 別れて長く なったけれど 一日でも妻のことを 忘れてはいない）

万葉 3604

「コソ～已然形」による逆接にも、この種の反発的逆接と認められるものがある。以下は後件が上述の反発的逆接の特徴に合致しており、また、歌の内容的にも以上のド・ドモの反発的逆接に類している。

(71) 人目多み 目こそ忍ぶれ 少なくも 心の内に 我が思はなくに

(人目が多いので 逢うことはこらえていますが 並々ならず 心の内に 私は思っています)

万葉 2911

(72) 死なばこそ 相見ずあらめ 生きてあらば 白髪児らに 生ひざらめやも

(死んだなら (白髪を) 見ることもなからうが 生きてあるなら 白髪はあなたらにも 生えずにいきましょうか)

万葉 3792

(73) 横雲の 空ゆ引き越し 遠みこそ 目言離るらめ 絶ゆと隔てや

(横雲が 空を渡って姿を消すように 遠いからこそ 逢うことも語ることも避けていますが 切れようと思って離れているのでしょうか)

万葉 2647

以上、ド・ドモの逆接の例も、コソの係り結びの例も、「ある事実を元にして、無根拠にそれを拡張し他の事柄に結びつける」という他者の間違った推論を、短絡的であるというものであった。

反発的逆接のコソの係り結びでは、誤った推論のあり方として、「ある一局面で認められる事柄を無根拠に他の局面に拡張し、他方でもその事が通用すると主張する」という種のものが多く見られる。他者がこのような推論を行うことを想定し、言語主体がそれを反発的に否定するのである。万葉集およびそれに類した古今集の例を見てみよう。

(74) 常陸なる 浪逆の海の 玉藻こそ 引けば絶えすれ あどか絶えせむ

(常陸の 浪逆の海の 玉藻なら 引けば絶えようが どうして (私たちの仲は) 絶えるだろうか)

万葉 3397

言語主体は玉藻について引けば絶えるとは認めるものの、だからといって二人の仲が絶えるということは認めない。これも(71)・(73)の例と同じく後件が反語で述べられており、二人の仲が絶えることが強く否定されている。たかだか玉藻について言えることを、全く別の事柄である二人の仲にまで拡張することは許されないというわけである。

(75) 春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる

(春の夜の闇は理屈に合わずわけがわからないものだ。梅の花は、姿は見えないものの香は隠れるものか)

古今 41

これは、梅の花の姿は闇によって隠れるものの、姿と同様に香が隠れるわけではない、という歌である。

(76) 人の前栽に、菊に結び付けて植ゑける歌

植ゑしうゑば秋なき時やさかざらむ花こそちらめ根さへかれめや

(こうして植えておいたのなら秋の無い時にもきっと咲くであろう(一秋の来ない年などないのだからいつも菊は咲くことだろう)。花こそ散るだろうが、根までも枯れることはあろうか。)

古今 268

(76)では、「他方にまで拡張することは許されない」ということが「さへ」という添加の助詞で明らかである。花が散ったところで、根までも消滅するわけではないというのである。

「根が枯れない」ということが言語主体によって強く主張され、それが「植ゑしうゑば秋なき時やさかざらむ」ということの理由になっている。

次のコソの係り結びは、「昔」の時点である事柄が認められたとしても、それが同様に「今」にまで通用するわけではないと述べたものである。ここでは「昔」と「今」とが対概念を成している。

(77) 昔こそ 難波みなかと 言はれけめ 今は都引き 都びにけり

(昔は 難波田舎と 言われたろうが 今は都を引き移して 都会らしいになった)

万葉 312

題詞に「式部卿藤原宇合卿被使改造難波堵之時作歌一首」(式部卿藤原宇合卿が難波の都を改造させられた時に作った歌一首)と書かれている。「難波みなかと言はれけめ」とあるように、難波を地方と蔑む他者を念頭に置いてこの歌は詠まれている。詠み手は「昔は田舎と言われただろうが」と譲歩して認めるが、譲歩だけには終わらない。「しかし今もそのように思われては困る、今はすっかり都会らしいのだ」と反発するところにこの歌の眼目がある。『新大系』で『今、都引き都びにけり』と作者得意満悦の感が湧出している。」と指摘されるとおりである。

この歌は従来対比とされることが多かったが、係り結び部分(昔こそ難波みなかと言は

れけめ)とその後続句(今は都引き都びにけり)は、いわゆる対比のような、両者が対等に比べられる関係にはない。「難波みなか」というのは言語主体にとって否認すべき、否定的価値を帯びており、退けられるべき事柄である。逆に「都」には肯定的価値が与えられており、これが積極的に主張されることである。すなわち言語主体から見た価値の違いというものが両者に認められる。題詞の作歌事情からしても、当然、主張されるべきは「今は都引き都びにけり」にあると言える。

次もこれと類似の例である。

(78) 昔こそ よそにも見しか 我妹子が 奥つ城と思へば 愛しき佐保山

万葉 474

これは大伴家持が亡妾を悲しみ作った歌であり、「墓所と見る今、この佐保山がいとしく感じられる」という第三句以降に心情が表れている。「昔」は佐保山を自分と関係無いものとして見ていたと認めるが、今はもう昔とは違うのだという。歌の主張の中心はもちろん後者にある。

記紀歌謡にも反発的逆接を表すコソの係り結びが見られる<sup>26</sup>。いくつかを示す。

(79) 八千矛の 神の命 萎え草の 女にしあれば 我が心 浦渚の鳥ぞ 今こそば 我鳥にあらめ 後は 汝鳥にあらむを 命は な殺せたまひそ…

(八千矛の 神の命よ。(萎え草の) 女でありますから 私の心は 入江にある州の鳥です。今は自分の思いのままにする鳥ですが、後はあなたの思い通りの鳥になりましょうから その鳥の命は お奪いにならないで下さいませ…)

古事記歌謡 3

「我鳥」とは、自分の思うままにふるまうことを鳥にたとえて述べたもの。「今」は自分の思いのままに振る舞うが、それが「後」にまで通用するわけではない、「後」はあなたの思いのままですよ、というのである。後続句「後は汝鳥にあらむを」が詠み手の主張であることは、それが「命はな殺せたまひそ」という命令表現の根拠になっていることからも了解される。

---

<sup>26</sup>管見では、記紀歌謡中の逆接のコソは全て反発的逆接の用法である。このことは、コソの逆接性がこの用法から起こったことを思わせる。



(80) つぎねふ 山代女の 木<sup>こくは</sup>鋏持ち 打ちし大根<sup>おほね</sup> 根白の 白<sup>しろ</sup>腕<sup>ただむき</sup> 枕かずけばこそ 知らずとも  
言はめ

((つぎねふ) 山代女が 木鋏を持ち、 打った大根 ―その根のように白い あなたの  
白腕を 枕として寝なかったのなら 私のことを知らないと言ってもいいが (いや、そ  
うは言えない仲だろう))

古事記歌謡 61

この結び句「知らずとも言はめ」は、詠み手である仁徳天皇に対して皇后が冷淡な態度をとっていることを非難したものである<sup>27</sup>。「枕かずけば」という条件の下では、私を知らないと言ってもまあ許されようが、と一旦譲歩する。しかし、これは例外的な条件<sup>28</sup>であるとコソによって示され、実際の状況とは別のものとして退けられるのである。逆接句は省略されているが、その内容は「白腕を枕として寝た以上、そのような冷淡な態度は許されませんよ」と補われ、そこに相手への強い反発感がある。

(81) 天皇、八田若郎女に恋ひて、御歌を賜ひ遣りき。其の歌に曰はく、

や 八田の 一本<sup>ひともと</sup>菅<sup>すが</sup>は 子持たず 立ちか荒れなむ 惜<sup>すがはら</sup>ら菅原 言をこそ 菅原<sup>すがはら</sup>と言はめ 惜<sup>すが</sup>ら  
清し女

(八田の 一本菅は 子を持たないで 立ち枯れてしまうのだろうか。 惜しい菅原だ。  
言葉の上では 菅(すが)原と言おうが、 いや、本当は惜しい清(すが)し女―美しい女だ  
よ)

古事記歌謡 64

歌の前半は八田若郎女を一本菅になぞらえつつ、子を持たないままではもったいない、とからかいながら誘う。歌詞の全体の意味が物語と一致していないことから、もともとこれは独立の民謡であったと見られる<sup>29</sup>。続く「言をこそ～と言はめ」とは景物を提示してから本旨に転換するときの手法である<sup>30</sup>。「言葉ではスゲハラと言うけれど」と譲歩しながらもコソによって反発の意を示し、後ろに逆接の関係でつなぐ。係り結びに続けて「私の本当

<sup>27</sup> 『古代歌謡全注釈 古事記編』、『古事記歌謡 簡注』を参照。

<sup>28</sup> 内容的に、反事実的な条件でもある。

<sup>29</sup> 天皇の寵愛を受けている八田若郎女を「一本菅」と言うことなど。『古代歌謡全注釈 古事記編』を参照。

<sup>30</sup> 『古代歌謡全注釈 古事記編』を参照。

に伝えたいことはそれとは異なっている、あなたは素晴らしい女性なのだ」と強く主張するのである。

次も同じく「言をこそ～と言はめ」を使った反発的逆接の表現である。

(82) 大君を 島に放<sup>はな</sup>らば 船余<sup>ふな</sup>り い帰<sup>かへ</sup>り来むぞ 我が暈ゆめ 言をこそ 暈と言はめ 我が妻はゆめ

(大君のこの私を 島に追放するならば (船余り) 帰って来ようぞ。 それまで我が暈よ、変わってくれるな。 言葉の上では 暈と言おうが、 本当は我が妻よ、お前に変わってほしくないのだ)

古事記歌謡 85

本節をまとめよう。以上では反発的逆接の一種として、他者の推論を想定し、それを間違っていると否定するものを見てきた。具体的には、

- 「ある事実を元にして、無根拠にそれを拡張し他の事柄に結びつける」ことを否定する

ものがあつた。「～ド・ドモ」の逆接でも、また、コソの係り結びでもこのタイプは見られる。

特に、コソの係り結びでは

- 「ある一局面で認められる事柄を、無根拠に他に通用させる」ことを否定するタイプのものが多くあることを指摘した。

#### 2.4.2.2. 通常とは異なる心情の表明

これは、「通常はこのような心情を抱くであろう」と想定される状況の下で、「いや、自分はそれとは別のように思うのだ」と主体的に表明するものである。

(83) 桜花 今そ盛りと 人は言へど 我はさぶしも 君としあらねば

(桜花は 今が盛りだと 人は言うけれども 私はさびしい あなたと一緒にでないので)

万葉 4074

桜花が満開なのだから、普通だったら楽しむべき場面であるが、あなたと一緒に見るわけでは無いから寂しいというのである。「さぶしも」と感じる理由がよく自覚され、その理由も含めて歌に表されている。

万葉集で注目すべき表現として、「見れど飽かず」、またこれに類したものがある。集中に 50 例と数も多い。現代語に訳すと「いくら見ても見飽きない」ということであり、恒常条件と考えられよう。この表現が初めて現われるのは、人麻呂の次の長歌末尾および反歌である。

(84) やすみしし 我が大君の 聞こし食す 天の下に 国はしも さはにあれども 山川の 清き河内と 御心を 吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷きませば ももしきの 大宮人は 舟並めて 朝川渡り 舟競ひ 夕川渡る この川の 絶ゆることなく この山の いや高知らず 水そそく 瀧の都は 見れど飽かぬかも

万葉 36

見れど飽かぬ 吉野の川の 常滑の 絶ゆることなく またかへり見む

万葉 37

品田悦一(2007)でこの表現について詳述されている。品田氏は、まず斎藤茂吉の『柿本人麿』の記述を引く。茂吉は、37 歌の「見れど飽かぬ吉野の川の常滑の」について、一方では「自然の光景に即した」表現であると言い、他方では「この歌の内容不足を感じる」と言う。品田氏はここに茂吉の論理の捻れがあることを指摘し、「『自然の光景』を直叙した表現と受け取る限り、『見れど飽かぬ』にはどこまでも内容不足の感が付きまとうのだ。茂吉がそう教えてくれている。ここから抜け出すには、読みの前提を変更しなくてはならない」(p.36)と述べる。

品田氏は、トークイル・ダシー(2003)の見解に賛同しつつ、36・37 歌は、天武天皇の御製歌(27 歌)、「良き人の良しとよく見て良しと言ひし吉野よく見よ良き人よく見」を引き取り、それに直接応答したものと見る。こうして「よく見よ」―「見れど飽かぬ」の連関を考慮することにより、品田氏とダシー氏は次の解釈を得ている。

先帝がかつて「芳野吉見与」と命ぜられた、そのお言葉どおり、われわれはこうして吉野の地を「見れど」、あまりのすばらしさにいつまでも見飽きることがない。だから今後も機会あるごとに「また還り見む」と讃えるのである。(ダシー2003: 39)

この句の意味するところは「吉野の景色があまりに美しく清らかなので、いくら見ても指示に十分応えたと思えない」と押さえられるだろう。(品田 2007: 39)

品田氏とダシー氏の解釈を取ることによって、天武天皇の遺志への応答が吉野讃美につながることで、また、その遺志が反復され、大宮人全体に波及し、彼ら全体の「絶ゆることな

くまたかへり見む」という決意につながることがよく了解される。「見れど飽かぬ」は対象への讃美を極めて主体的に行っており、ここには言語主体自身の意外感認められない。反発的逆接の表現なのである。

次のものは「飽かず」という屈折した否定形ではないが同様に反発的逆接のものである。

(85) 青山の 峰の白雲 朝に日に 常に見れども めづらし我が君

(青山の 峰の白雲のように 朝も昼も いつも見ても 見飽きないあなたです)

万葉 377

(86) 一昨日も 昨日も今日も 見つれども 明日さへ見まく 欲しき君かも

(一昨日も 昨日も今日も 見ましたが 明日までも見たく 思うあなたです)

万葉 1014

「通常とは異なる心情の表明」の逆接は、コソの係り結びでは表現されない。「見れど飽かず」式の言い方が万葉集中で多く使われる一方で、コソを使用した同内容の表現（形式的には「見こそすれ飽かず」とでもなろうか）は存在しないのである。

(87) 小竹之葉者（ささのはは） 三山毛清尔（みやまもさやに） 乱友 吾者妹思（あれはいもおもふ） 別来礼婆（わかれきぬれば）

(笹の葉は 山中でさやさやと 音を立てているが 私は妻のことを思う 別れて来たので)

万葉 133

この歌は人麻呂の「石見相聞歌」の第一長歌の二首目の反歌であり、彼の代表作としてよく知られるものであるが、第三句「乱友」の訓みをめぐって、歌全体の解釈とともに多くの論が書かれている。現在有力な説としては、(1-a)ミダレドモ、(1-b)ミダルトモ、(2)サヤゲドモの三つがある。(1-a)と(1-b)は活用の違いはあるがミダル説、(2)はサヤグ説であり、大きくは二つに分かれている。これについてどれが妥当かを検討したい。

(1-a)を採る立場では、たとえば斎藤茂吉『万葉秀歌』が、聴覚・視覚の解釈の面から「また、此の場合の笹の葉の状態は聴覚よりも寧ろ聴覚を伴う視覚に重きを置くべきであるから、それならばミダレドモと訓む方がよいのである。」という。この立場ではミダレを四段活用とみることになるが、万葉集に自動詞ミダルの四段活用の仮名書き例が無いことか

ら語学的にはこの訓は支持しがたい<sup>31</sup>。また、茂吉はこう言い切っているものの、「聴覚を伴う視覚に重きを置くべきである」ということの根拠は不明瞭である。

ミダル説を採り、茂吉の聴覚・視覚の考えを精密化して論を成したものに、鉄野昌弘(1989)がある。鉄野氏は(1・b)説である。鉄野氏は「笹の顫動の様な広がり、それを視覚的に表すのが『乱』ではないだろうか、多数のものの交錯・動揺の視界における広がりこそ、『乱』字の基本的に意味するところと思われるのである」(p.102)と言ひ、文選や人麻呂関係歌の「乱」(ミダル・マガフ)の表記法を根拠にしてこれを裏付けている(pp. 102-3)。そして第二句・第三句の表す感覚性について次のように述べている。

この歌には、「乱」の視覚性が「み山もサヤニ」の聴覚性と対照をなすべく置かれているのではないか。即ち「み山もサヤニ」の中に音声を中心とした振動のサヤグ的表象性を取り込みつつ、それを外側から包み込む「笹の葉は……『乱』」という主述関係においてはそれと異なる捉え方、広がり大きく視覚的に「見る」表現が志向されているのではないかと思う。音・振動によって形成される世界。それは更に「見る」ことで確認されてゆく。かかる独自の世界の捉え方、立体的な表現構造こそ人麻呂の特徴をなすものだと考える。(p.105)

そして、「当該歌に造形された『笹の葉』は、極めて動的であり、『吾』の側に迫って来る性質のものである」(p.112)といい、「当該歌においては、『吾』は外界から不断に働きかけられているのであって、『吾』は常に『笹の葉』とともに顫動し、かつそれに抗うのである」(p.113)と結論を出している。

さて、この歌で詠まれている事柄は現在の、既定の事実であり、「ミダルトモ」説によると、仮定条件によって既定の事実を表現した、いわゆる「修辭的仮定」の例ということになる。しかし、これには反論が提出されている。サヤゲドモの訓を採る立場の坂本信幸(2010)は、万葉集中における「…トモ」と帰結句述語との呼応を詳細に分類、検討した上で、

集中の「とも」の用例から考えて、既定の事実を認めながら表現する場合には、それなりの呼応表現が用いられるべきといえる。つまり、万葉の訓詁において、この「乱友」とある第三句の訓みは、通常の終止である「妹思ふ」でうけることから考えて、「みだるとも」ではあり得ない。そうすると、「さわげども」か「さやげども」という逆接

---

<sup>31</sup> 澤瀉久孝(1941)『万葉古径』 pp.29-30 参照。

の既定条件「ども」の訓でよむべきであるということになる。その場合、澤瀉『古径』の指摘するように、木の葉の場合は「さわぐ」の例なく、すべて「さやぐ」であるということであるから「さやげども」と訓むことになるのである。(p.23)

と述べている。

「乱友」の訓みの決定は解釈・用字・活用・従属節の語法におよび、決して容易に結論を下すことはできないが、本論文は逆接句の語法を重視し、上記の坂本氏の論と同じ理由からひとまず「サヤゲドモ」を採りたい。解釈としては『新全集』頭注に、「ここは全山を蔽う笹の葉が乱れて鳴り響き、無気味な山中の感じを表す。しかし逆接の『ども』がついて、それにもかかわらず一心不乱に妻を思う故にぜんぜん不安を覚えない。」と同じ見方である。笹の葉がさやぐという状況下では普通ならば心も乱れるはずであるが、私はそのようなことはない、と表明しているのであり、ここでの「～ドモ」は反発的逆接ということになる。

ただし、「当該歌においては、『吾』は外界から不斷に働きかけられているのであって、『吾』は常に『笹の葉』とともに顫動し、かつそれに抗うのである」(鉄野 1989 : 113)のような説を採っても、言語主体が主体的意思を持って反抗するという点からすれば、意外的逆接ではなく(言語主体は決して意外に感じているわけではない)、やはり反発的逆接ということになる。

#### 2.4.2.3. 障害への反抗的行為

このタイプの逆接では、言語主体の行動を妨げるような何かしらの障害的状況が発生している。その状況下では通常、言語主体の目指す行為は起こらないと他者は期待するが、それに関わらず、言語主体が反抗的行為を押し通し、強く実行するものである。ここでは他者が想定するであろう期待を、行為によって覆すというようになっている。

(88) <sup>かみつけの</sup>上野 佐野の舟橋 とりはなし 親は離くれど <sup>わ さか</sup>我は離るがへ

(上野の 佐野の舟橋を とりはなして 母親は引き離そうとするが 私たちは離れるものか)

万葉 3420 類 3502

愛する人の親が、娘と遠ざけようとするが、私は離れるものか、という趣旨。他者(今の場合、相手の母親)は「遠ざけられるだろう」という期待を抱いているが、言語主体は「否、

離れはしない」と反抗的に否定している。「がへ」は上代東国方言で反語の意を表すものであり反発的氣息が觀察される。これは 2.4.2.1 の「相手の短絡への非難」の後件で反語表現が見られたのと同じである。「離れまい」というのは言語主体の意図的行為であって、意外性は認められない。

(89) 風高く 辺には吹けども 妹がため 袖さへ濡れて 刈れる玉藻そ

(風が空高くから 岸には吹いていましたが あなたのために 袖までも濡れて 刈った玉藻ですよ)

万葉 782

岸に風が強く吹き付ける。とすると、通常はそれに妨げられて藻を刈ったりしないと期待されるころだろう。しかしながら、言語主体はその一般的期待に反して藻を刈ったというのである。ここでは一般的期待を否定することで、相手への愛情の深さを示している。次の三つも相手の愛情の深さ故に、障害をものともせずに行為を成したというものである。

(90) 玉梓の 道は遠けど はしきやし 妹を相見に 出でてそ我が来し

((玉梓の) 遠い道のりではあるけれど 愛しい あなたに逢いに 私は出かけて来ました)

万葉 1619

(91) 天の川 瀬々に白波 高けども 直渡り来ぬ 待たば苦しみ

(天の川は 瀬々に白波が 高かったが まっすぐ渡って来た 待っていると苦しいので)

万葉 2085

(92) こもりくの 泊瀬小国に 妻しあれば 石は踏めども なほし来にけり

((こもりくの) 泊瀬の小国に 妻がいるので 石は踏んだが それでもやはりやって来た)

万葉 3311

「障害への反抗的行為」の逆接も、コソの係り結びでは表現されない。

#### 2.4.2.4. 反発的逆接のまとめ

反発的逆接として、本論文は3つのタイプを認定した。この区別は他者の期待を否定する、その仕方によるものである。

一つ目は「相手の短絡への非難」で、他者の行う推論を想定し、否定するものであった。

具体的には以下の二つがあった。

- 「ある事実を元にして、無根拠にそれを拡張し他の事柄に結びつける」ことを否定するもの
  - 「ある一局面で認められる事柄を、無根拠に他に通用させる」ことを否定するもの
- このタイプの逆接では、しばしば後件に反語などの強い否定性を帯びた述語が来ることが指摘される。

二つ目は「通常とは異なる心情の表明」で、ある条件下で通常抱くであろう心情とは異なった心情を抱いていると、言語主体が表明するものであった。「見れど飽かず」のような表現が万葉集に多く存在する。

三つ目は「障害への反抗的行為」であり、言語主体の行動を妨げるであろう状況下で、それに反抗し、行為を実行するというものであった。

いずれも、言語主体が意外性を感じておらず、自ら能動的に期待を否定するという点で意外的逆接と区別できるのである。

このうち、上代でコソの係り結びが表せるのは「相手の短絡への非難」のみである。コソの係り結びがなぜこのタイプを表し、残るタイプは表さないかについては、3.6 節で考える。

#### 2.4.3. 対比的逆接

述語が何らかの意味で対立することによって逆接性が明らかになっているものである。述語の対立の様の代表的なものとして、次の(a)(b)(c)の3つがある。

(a) 肯否対立によるもの。助動詞ズの有無によるものが典型である。

(93) 風雲は 二つの岸に 通へども 我が遠妻の言そ通はぬ

万葉 1521

(94) 我が門の 榎の実もり食む 百千鳥 千鳥は来れど 君そ来まさぬ

万葉 3872

(b) 語彙的な意味の対立によるもの。対概念を成している場合が多い。

常磐なす 岩屋は今も ありけれど 住みける人そ 常なかりける

万葉 308

(95) あをによし 奈良の大路は 行き良けど この山道は 行き悪しかりけり



((あをによし) 奈良の大路は 行きやすいが この山道は 行きにくいことだ)

万葉 3728

(96) 冬過ぎて 春し来れば 年月は 新たなれども 人は古りゆく

万葉 1884

(c) 内容上の対立が認められるもの。

(97) 夏麻引く 海上潟の 沖つ渚に 鳥はすだけど 君は音もせず

((夏麻引く) 海上潟の 沖の州に 鳥は騒いでいるが あなたからは音沙汰がない)

万葉 1176

(98) 去年見てし 秋の月夜は 照らせども 相見し妹は いや年離る

(去年見た 秋の月は 今も同じように照っているが 一緒にこの月を見た妻の方は ま  
すます年月が隔たってゆく)

万葉 211

(99) ひぐらしは 時と鳴けども 恋しくに たわやめ我は 定まらず泣く

(ひぐらしは 今がその時といって鳴くけれども 恋しさに 弱い私は 時を  
定めずに泣いている)

万葉 1982

対比的逆接は、前件と後件の間に因果関係が想定されないのはもちろんのこと、期待性も認められないものである。例えば(95)は奈良の大路とこの山道という空間的に離れた二つに言及するのであり、それらの間に因果関係を期待するのは無理である。また、(97)では、鳥の騒ぎから恋人の連絡を期待しているわけではない。

上代で対比的逆接と認められるコソの係り結びは存在しない。

(100) 昔こそ 難波あなかと 言はれけめ 今は都引き 都びにけり

万葉 312、(77)の再掲

は他者の期待を否定する反発的逆接と言えることについては 2.4.2.1 節で述べた。

コソの係り結びはなぜ対比的逆接を表さないのかについて、ここで本論文の考えを述べておきたい。本論文のいう対比的逆接とは、「x において p であるが、y において q である」という構図にそのまま乗っかるものであり、期待性が存在しないものであった。対比的逆接では、「x において p である」(前件)と「y において q である」(後件)は同等の比重を

持ち、前件と後件を交換してもその表す意味はほぼ変わらない(2.3.3節を参照)。もし仮にコソがこの構造で使われるとすると、前件もしくは後件の一方が強調されることとなり、「同等の比重を持つ」という対比の性質が破られてしまう。そうすると、前件と後件とが対等に引き比べられる「対比」構造とはもはや呼べなくなるのである。

#### 2.4.4. 先行研究で分類が困難な例

以上では、逆接の各三分類の詳細を見てきた。逆接の用例としては、万葉集の「〜ド」、「〜ドモ」の例を使用した。この分類は古代語のみならず現代語にも通用することを目指して考えたものである。そこで、現代語の先行研究の枠組みで分類が難しいとされていた例を本論文がどう扱うかについて述べ、本論文の分類法が実際に現代語にも妥当することを確かめる。

まず、2.2.4節で、渡部氏と石黒氏の分類ではカバーすることができないものとして挙げた例について。改めて示すと、次のものである。

(101) きょうも雨降りになりました。目に見えないような霧雨が降っているのです。毎日々々、外出もしないで御返事をお待ちしているのに、とうとうきょうまでおたよりがございませんでした。いったいあなたは、何をお考えになっているのでしょうか。(太宰治『斜陽』、(21)の再掲)

(102) 姉さん。／僕たちは、貧乏になってしまいました。生きて在るうちは、ひとにうちそうしたいと思っていたのに、もう、ひとのごちそうにならなければ生きて行けなくなりました。(太宰治『斜陽』、(22)の再掲)

これらを扱うのに「期待性」を考慮することが重要であることは2.2.5節でも触れた。(101)は、「返事を待っている」という意図的行為を逆接の「ノニ」が承けているが、その行為の裏に「相手からきつとたよりが来るはずだ」という、言語主体の期待が存する。この期待が後件の現実事態「今日までたよりがなかった」によって打ち消される。ここに逆接性が生じるのである。言語主体の期待が打ち消されるのだから「意外的逆接」であり、その下位分類としては2.4.1.3節の「意思・希望・予想を伴う行為」に当てはまる。(102)は前件が「〜したいと思っていた」の形であり、言語主体の希望(期待)が表示されていることが

わかりやすい。それが後件の現実事態によって否定されている<sup>32</sup>。これも「意外的逆接」であり、2.4.1.2 節の「言語主体の意思・希望・予想」に当たる。これら二つの例には論理的推論が関与しないが、期待性という概念を持ち込むことによって、逆接のノニが使用されるわけと、そこでの逆接の意味を説明できるのである。

次に、前田直子(2009)で挙げられた例を考える(本論文の 2.2.1.1 節参照)。次の例は逆接の文(各 a)に対して、順接の文(各 b)が意味的に対応せず、逆接と順接との対応を重視する立場の論者にとっては扱いに困るものであった。

(103) a. お金はあるのに、時間はない。(だから、旅行には行けない)

b. ?お金はあるので、時間はある。((2)の再掲)

(104) a. 駄目だと思っていたのに、合格した。

b. ?駄目だと思っていたので、合格しなかった。((3)の再掲)

(105) a. スキーに行ったのに、雪がなかった。

b. ?スキーに行ったので、雪があった。((4)の再掲)

前田氏は(103)を「非並列・対照」、(104)を「予想外」、(105)を「不本意な事態を生み出した状況」としていたが、氏の論理文の枠組みに収まらず、理論的な分類には困るものであった。本論文がこれらの逆接性をどう分析し、逆接の細分類のどれに当てはまるかを次に述べよう。

(103)では、お金があることと時間がないことの間には期待性が存在せず、前件の述語「ある」と、後件の述語「ない」とが意味的に対立している。これは本論文の 2.4.3 節で述べた「対比的逆接」に当たる。

一方、(104)と(105)には期待性があり、言語主体が期待を抱くという「意外的逆接」に当たる。(104)は、(102)と同じく、その前件で「～と思っていた」と不合格の見通しが直接表現されている。言語主体にとって「不合格」は嬉しくない事柄であるが、その実現を予想していることが示されている。そして、後件の現実事態によってそれが未達成に終わったことが言われる。これは「言語主体の意思・希望・予想」である。(105)の前件は「スキーに行く」という行為であるが、(101)と同様に、その行為の背後には「雪があるはずだ」と

---

<sup>32</sup> 「人にごちそうする」ではなく、逆に「人からごちそうされねばならない」ほど、貧しさが極まったのである。

いう期待が存する。この期待が、「雪がなかった」という現実事態によって打ち消されるのであり、「意思・希望・予想を伴う行為」の例と言える。

本節で見たように、本論文の逆接の意味分類の枠組みは現代語の例にも通用し、かつ、理論的に整然とした形で各用例の説明が可能となるのである。

## 2.5. コソの係り結びの逆接性の二極

前節で逆接句の意味分類を行い、用例を観察したが、意外的逆接と反発的逆接とにコソの逆接用法の例が現れていた。実際、コソの係り結びによる逆接句の例を集めてきて分類を試みると、意外的逆接か反発的逆接かに明瞭に区別できるのである。両者の差は、コソの係り結びの後続句に言語的特徴となつてしばしば現れるので、それを以下で見ていきたい。用例は万葉集を中心とするが、それに類する用法の三代集、源氏物語の例も挙げた。

### 2.5.1. 意外的逆接のコソの係り結びの後続句の特徴

万葉集には助詞コソが 149 例あるが、そのうち 10 例が意外的逆接の係り結びとなっている (444、629、1751、1843、2559、3327 (2 箇所)、3522、3531、3893) <sup>33</sup>。

コソ係り結びの後続句は、いかなる形で意外性が認められるかという点で、およそ

- ①意外性を表す副詞語句や終助詞を伴うもの
- ②疑問詞疑問文
- ③連体形終止

の 3 タイプにわかれる。以下、それぞれについて該当する例を並べ、説明を加える。

#### 2.5.1.1. 意外性を表す副詞語句や終助詞を伴うもの

(106)では意外であることを語彙的に表す副詞語句「思はぬに」が後続句内に生起している。(107)(108)の「はや」、「まだき」は、「事態の到来が予想よりも早く」ということであり、これも内容上、驚きや意外性と結びついている。

(106) 昨日こそ 君はありしか 思はぬに 浜松の上に 雲にたなびく

---

<sup>33</sup> 2925 歌「みどり子の ためこそ 乳母は 求むといへ 乳飲めや君が 乳母求むらむ」は意外的逆接か反発的逆接か判断が難しい。これを意外的逆接に入れると 11 例。

(つい昨日まで 君は生きて世にあったのに 思いがけなくも 浜松の上に 雲となって  
たなびいている)

万葉 444

- (107) 昨日こそ 年は果てしか 春霞 春日の山に はや立ちにけり

(つい昨日 年が暮れたばかりなのに 春霞が 春日山に 早くも立っている)

万葉 1843 類、拾遺 3

- (108) 恋すてふ我が名はまだき立ちにけり 人知れずこそ思ひそめしか

(恋をしているという私の浮き名ははやくも立ってしまったことだ。人知れずひそかにあなたのことを思いはじめたばかりだったのに。)

拾遺 621

(109)-(110)は後続句の述語に詠嘆の終助詞の「かも」や「も」が付いているものである。

- (109) 昨日こそ 舟出はせしか いさなとり 比治奇の灘を 今日見つるかも

(つい昨日 舟出をしたと思ったのに (いさなとり) 比治奇の灘を もう今日見たことよ)

万葉 3893

- (110) 昨日見て 今日こそ隔て 我妹子が ここたく継ぎて 見まく欲しきも

(昨日逢い 今日一日隔てているだけなのに (なぜ) 我妹子に こうも続けて 逢いたいことか)

万葉 2559

(110)は佐伯梅友(1938)『萬葉語研究』で、「何しかも」の略された形であるという (p.20、引用は 1963 年刊の有朋堂版による)。文法上「何しかも」が省略されていると考えるかはともかくとして、現在の通釈書でも『新全集』:「なぜあの娘にこうも続けて逢いたいのだろう」、『新大系』:「どうして我妹子にこうも続けて逢いたいのか」と、佐伯氏と同様の解釈がなされている。この歌は「我妹子が～見まく欲しきも」と、連体形に終助詞が付いており、そこに原因を問う気持ちが含まれることは 2.5.1.3 節で後述する「連体形終止であるタイプ」と同じ事情によるだろう。

このタイプでは、「A コソ B ナレ、C」の後続句 C に意外性をあらわす表現が使われているが、注意すべきは、C が現実起こったという確からしさは疑われていないということである。たとえば、(106) (107)では、それぞれ「雲となってたなびいている」、「春霞が立って

いる」ということは真であり、話し手にとって疑いの余地はない。後続句 C が、係り結び部分の「昨日まで生きていた」、「昨日年が暮れた」という他の事態と食い違っているところに驚きがあるのである。

#### 2.5.1.2. 疑問詞疑問文

(111)-(114)は原因・理由にかかわる疑問詞疑問文で、現在直面している事態がなぜ起こったのか、という不審・不明の気持ちが表されている。

(111) …草こそば 取りて飼へ 水こそば 汲みて飼へ なにか然 葦毛の馬の いなき立て  
つる

(草を 取って食べさせ 水を 汲んで飲ませているのに どうしてこう 葦毛の馬は し  
きりに嘶いているのか)

万葉 3327

(112) なにすとか 使ひの来つる 君をこそ かにもかくにも 待ちかてにすれ

(なんだって 使の人が来たのか あなただけを とにもかくにも 待ちかねていたのに)

万葉 629

(113) 別るればまづ涙こそ先に立ていかで遅るる袖の濡るらん

(別れるとまず涙が先立つのに、どうして残された人の袖が濡れるのだろう)

拾遺 324

(114) 「帝王の深き宮に養はれ給ひて、色色の楽しみに驕り給ひしかど、深き御うつく  
しみ<sup>おほやし</sup>大八洲にあまねく、沈めるともがらをこそ多く浮かべ給ひしか。いま何の報いにか、  
ここら横さまなる浪風にはおぼほれ給はむ。…」

(「(源氏の君は) 帝王の宮殿の奥深くに養われなさって、数々の楽しみに贅を尽くされましたが、深いいつくしみは日本国中にあまねくいきわたって、不遇の者たちを大勢お救いになったのです。それなのに、いま何の報いによって、これほどの非道な波風に沈んでおられるのでしょうか。…」)

源氏 2-54 明石

次は「いつ」という疑問詞が使われているが、(107)の「はや」のように時間の経過の速さに驚きが向けられている。

(115) 昨日こそ早苗とりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風のふく

(つい昨日早苗をとって田植えしたのに、いつのまに稲葉がそよいでこんなに秋風が  
ふくのか)

古今 172

このタイプでは後続句が疑問詞疑問文となっているが、「意外性を表す副詞語句や終助詞を伴うもの」と同様に、係り結びの後続句の真偽は疑いの対象となっていない。(111)や(112)の「葦毛の馬がいななっている」、「使いが来た」ということは、今ここで起こった明白な事実である。(113)は「遅るる袖の濡るらん」と、現在推量の助動詞ラムが付いているが、「残された人の袖が濡れている」ということ自体は疑われていない。その原因を疑問に思うからラムが現れているにすぎない。これらも後続句が、係り結び部分と齟齬しているために「なぜ」という不審・不明の気持ちが表されるのである。

#### 2.5.1.3. 連体形終止

(116) 妹をこそ 相見に来しか 眉引きの 横山辺ろの 鹿猪なす思へる

(愛する人に 逢いに来ただけなのに(眉引きの) 横山辺りの 猪のように思っている)

万葉 3531

(117) 梅の花見にこそ来つれうぐひすのひとくひとくと厭ひしもをる

(梅の花を見にやって来たのに、鶯が「人が来る、人が来る」と嫌がっている)

古今 1011

文というものは特別なことがないかぎり、終止形で終わる。(116)(117)は述語が連体形終止となっており、普通の文とは表現上の違いがあるはずである。

阪倉篤義氏は、『日本語表現の流れ』の中で、次のように述べている。

要するに喚体の句（引用者注：(116)(117)のような連体形終止の句）というのは、（中略）全体を一つの体言（相当のもの）にまとめて、感情をこめて、これを未結着のままに投げ出す言い方なのであるから、そこに表現されていない事情の説明を求めて、「どうして？」とか「本当か？」とかと疑う気持ちが底に含まれているのは当然なのである。(p.218)

連体形終止タイプでは、阪倉氏の言うように「どうして？」と事情の説明を求める気持ちが含まれると考えられる。つまり(116)(117)では原因を問う気持ちが暗に含まれている。

(116)(117)ともに、後続句で表される内容は眼前の事実であり、それが実際起こっているこ

とは疑われていない。疑問はその事態成立の事情・原因へと向かうのである。

尾上圭介(1982)、二・三節「文脈的条件による安定」では、上代の連体形終止の例は、ほぼ次の(A)(B)のような文型的・文脈的条件のもとにあるという指摘がなされている(pp.8-11)。

(A)連体形終止文が、係助詞を含む文に後置される場合

(B) 連体形終止句が逆接条件句に対する帰結になる場合、あるいは文中に何らかの逆接的表現がある場合

そこでは(A)の例として、

(118) 玉梓の妹は花かもあしひきのこの山陰に撒けば失せぬ (万葉 1416)

(119) 水を多み上田に種蒔き稗を多み選らえし業そ我がひとり寝 (万葉 2999)

そして(B)の例として、

(120) 夏草の露別け衣着けなくに我が衣手の乾る時もなき (万葉 19941)

(121) はだすすき穂には咲き出ぬ恋を我がする玉かざるただ一目のみ見し人故に (万葉 2311)

などがあげられている（これら引用例中の下線および波線は引用者による）。本論文で先に(116)(117)にあげた、意外的逆接のコソの係り結びに連体形終止句が後続するものは、ちょうど尾上氏のいう(B)のタイプに該当する。

尾上氏は、(B)のタイプについて、

(B)に属する諸例は典型的には「……なのに…だ」という形式であり、後句の事態が、それが意外だとされる環境の中に置かれる分だけ(A)類に比べると驚嘆の情意が濃いとも言えるが、それはあくまでアモーダルな事態描写が環境との関係で身に帯びる情意に過ぎないのであって、典型的な擬喚述法（中略）が、環境への顧慮なしに、というよりむしろ環境の中に自身を位置づける余裕もないままに心に浮かぶ事態を言語化することで結果的に得た強い詠嘆性とは質的に異なるものと見なければならない。(p.10)と述べる。「逆接句+連体形終止句」のタイプにおいて逆接句が意外的意味を帯びているという尾上氏の指摘は、本稿の(116)(117)の係り結びが意味的に意外的逆接であることを補強するものである。尾上氏は、この逆接句に後続する連体形終止句の「驚嘆の情意」は、「環境との関係で身に帯びる情意に過ぎない」と言っている。先の(116)(117)においても、連体形終止句は眼前の事実であり、それ自体に「驚嘆の情意」は無い。尾上氏の言うように、(B)



タイプ、そして本稿の(116)(117)の例における意外性は、意外的意味の逆接句の側からもたらされるのである。

ところで、(122)はヤによる係り結びとみられるものかもしれない。しかし、「この袖のところで鶯が鳴く」という波線部は疑問の対象となっていないことに注意されたい。「梅の花があると思ったのか、この袖のところで鶯が鳴くことだ」と、「～ヤ」部分が連体形終止部分に注釈的に係るように解するのがふさわしい。だとすれば波線部を連体形終止として(116)(117)と同じタイプと考えることができよう<sup>34</sup>。

(122) 折りつれば袖こそにはほへ梅の花ありとやここにうぐひすのなく

古今 32、(52)の再掲

#### 2.5.1.4. 3タイプのまとめ

3タイプに整理したコソ係り結びの後続句には、意外・驚き・不審などの気持ちが表されているという共通した特徴を認めることができる。重要なのは、係り結びの後続句の表す内容は疑いのような事実であるということである。

意外的逆接のコソ係り結びは、2.4.1.1.2 節で述べたように「ある事実を結果と見なして原因を推し量る」という、結果から原因への推論に関わるのであった。結果と見なされる事実（推論の出発点）は後続句で表される。後続句が疑いの対象となっていないという本節の観察は、後続句が判断の基礎であり推論の出発点であるということと符合するのである。意外・不審の念が向けられるのは、推論された原因と係り結び部分の内容との食い違いに対してなのである。

#### 2.5.2. 反発的逆接のコソの係り結びの後続句の特徴

万葉集の係助詞コソ 149 例のうち、50 例ほどが反発的逆接の係り結びに使われており、この用法は上代で盛んに使用されていた。ここでは反発的逆接のコソの係り結びに後続する句の特徴を述べ、意外的逆接との差にも言及する。

①反語表現

②ナクニ終止

---

<sup>34</sup>(122)を係り結びと見ても、「ここにうぐひすのなく」が疑問の対象ではなく、「梅の花ありと」が疑われていることは動かない。

③後続句が省略されているもの

の3タイプに分けて用例を見る。なお、②は用例数が少ないが、ド・ドモとの比較の上で、ここで取り上げる。

#### 2.5.2.1. 反語表現

形式的には疑問文であるが、内容的に事柄の否定に使われるものである。2.4.2.1 節の「相手の短絡への非難」で述べたとおり、相手の推論を間違っていると否定するために使用されている。逆接のコソ係り結びの後に反語表現が来るものは7例見られる（1990、2524、2647、3263、3397、3491、3792で全て「相手の短絡への非難」の例）。三代集では、古今集に3例（41、268、547）と後撰集に1例（604）が見られる。

(123) 横雲の 空ゆ引き越し 遠みこそ 目言離るらめ 絶ゆと隔てや

万葉 2647、(73)の再掲

(124) …ま玉なす 我が思ふ妹も 鏡なす 我が思ふ妹も ありと言はばこそ 国にも 家にも行かめ 誰が故か行かむ

（玉のように 私が愛しく思う娘が 鏡のように私が愛しく思う娘が いると言うのなら 故郷にも 家にも行くだろうが （もはや） 誰のために行くだろうか、いや行きはしない）

万葉 3263

(125) 常陸なる 浪逆の海の 玉藻こそ 引けば絶えすれ あどか絶えせむ

万葉 3397、(74)の再掲

(126) 秋の田のほにこそ人を恋ひざらめなどか心にわすれしもせむ

（秋の田の稲穂のように表立っては人を恋い慕いませんが、どうして心の中で思いが消えるでしょうか）

古今 547

どれも、係り結び部分では相手の主張を「まあそういうこともある」と譲歩的に認めるが、後続句でそれを他に拡張することは許されないと強く否定するものである。(124)「誰が故か行かむ」、(125)「あどか絶えせむ」などではその主張の強さが、言語主体の意志としても感じられる。

さて、(123)は形式的に肯否疑問文、(124)-(126)は形式的に疑問詞疑問文となっている。

ここで注意したいのは、後続句に疑問語が現れる場合の、意外的逆接と反発的逆接の違いである。

(127) …草こそば 取りて飼へ 水こそば 汲みて飼へ なにか然 葦毛の馬の いなき立て  
つる

万葉 3327、(111)の再掲

2.5.1.2 節で指摘したように、(127)のごとき意外的逆接では、疑問語が現れると言っても、後続句は事実であって疑いの対象となっておらず、疑いはその原因に向けられるのであった。それでは反発的逆接ではどうか。(124)-(126)では、文末に設想の助動詞ムが現れ、かつ、事態は未実現のもの（そしてこれからもずっと実現しないもの）として表されている。ここでは後続句の正しさが疑われるあまりに、否定へと向かっている。そして、疑問語が使われるといっても、それは原因を不審に疑っているわけではなく、事態が決して起こらないことを表しているにすぎない。たとえば(126)では「思いが消える」理由を「どうして？」と本当に疑っているのではない。これは、「眼前の事実を不審に思い、原因を疑う」という意外的逆接と決定的に異なる点である。同じく疑問語が現れても、意外的逆接と反発的逆接ではその表現意図は明確に区別できるのである。

#### 2.5.2.2. ナクニ終止

次に、後続句が「～ナクニ」のものについて。2.4.2.1 節で述べたように、詠嘆的に否定する表現である。

万葉集のド・ドモを見ると、493 例の内、後件がナクニ終止のものは 20 例ほどある。対して、コソ係り結びの後続句がナクニ終止のものは集中に次の 1 例である。

(128) 人目多み 目こそ忍ぶれ 少なくも 心の内に 我が思はなくに

万葉 2911、(71)の再掲

これは「～ドモ～ナクニ」の

(129) 韓衣 裾のうちかへ 逢はねども 異しき心を 我が思はなくに

万葉 3482 類、2399・3058・3482・3775

などと歌の発想としても近いが、例数としては稀少なのである（三代集には用例無し）。反発のコソ係り結びの場合には、反語表現のように相手を意識して問いかける表現の方が好まれるようである。

### 2.5.2.3. 後続句が省略されているもの

上代で係助詞コソが逆接句を構成する力は相当に強いと見え、後続句が無いにもかかわらず逆接的に解するのが適切な例がある。万葉集で 14 例、三代集で 11 例認められる。

(130) 天地の 神の理 なくはこそ 我が思ふ君に 逢はず死にせめ

(天地の 神の判断が ないのなら 私が愛するあなたに 逢わないまま死にましょうが)

万葉 605

これは一首がコソの係り結びからなっており、その後に逆接句が続いてはいない。しかしながら、解釈上、逆接的内容の文句を後に補って考えのがふさわしく、実際に注釈書類もそのように解している。『新全集』の頭注では「コソ…已然形は逆接的な場合に用いられることが多い。この歌も、神判の正しさを信じるからこそ心を継いでいるのだ、という余意を込めている」といい、『和歌文学大系』ではこの第四・五句について「恋しく思うあの方に逢わずに死ぬことでしょうに。コソと已然形の結びで逆接。神に道理があると信じる気持ちを詠む」と説く。つまりこれは、神の理がある以上必ず君に逢えるはずだ、という信念のもとに詠まれた歌であり、直接は言語化されていない後続句の方に強烈に主張が存する。

例を追加する。

(131) 薦枕 相まきし児も あらばこそ 夜のふくらくも 我が惜しみせめ

(薦枕を とともに枕にした妻が いるのなら 夜の更けるのが 惜しいことだろうが)

万葉 1414

(132) 商返し 許せとの御法 あらばこそ 我が下衣 返したまはめ

(売買契約の取り消しを 許せという法が あるのなら 私の贈った下衣を お返しになってもよいでしょうが)

万葉 3809

(131)は独り寝の寂しさを詠んだもので、「愛する人がいないのだから夜が更けることなどちっとも惜しくはない」のような内容が後に続く。(132)は左注に、「右、伝へて云はく、時に<sup>うつくし</sup>幸 びられし娘子あり姓名未詳なり。寵の薄れたる後に、寄物<sup>よ</sup>俗にかたみといふを還し賜ふ。こ

ここに娘子怨恨みて、聊かにこの歌を作りて献上る、といふ。」<sup>35</sup>とある。寵愛を受けていた女が、寵愛の薄れた後に形見（下衣）を男から返された。それを恨みに思った女が詠んだ歌ということである。係り結び部分で「私の贈った下衣を返す」という相手の行為を一面では認めている。しかし、それはあくまでも「商返し 許せとの御法」があるのなら、という条件付きである。その後には「売買契約の破棄は認められていないのだから、下衣を返すなんて許されませんよ」という主張が強く込められているのである。歌全体として、恋愛関係を解消した相手への非難である。

#### 2.5.2.4. 3タイプのまとめ

上代の反発的逆接のコソ係り結びの後続句には、「反語表現」と「後続句が省略されているもの」が多く使われており、これらで反発的コソの4割を占める。どちらも係り結び部分で相手や世間一般の言を譲歩して認めつつも、後続句でそれに強く反発するものである。「反語表現」の場合には強い否定としてその反発の氣息が認められた。当然後続句の方に主張の中心がある。「後続句が省略されているもの」の場合でも、省略された内容が強く主張されていると言えた。反発的逆接は、後件に当たる自分の主張を以て相手を否定するものであり、コソ係り結びの後続句に力点があるわけである。

## 2.6. おわりに

本章のまとめとして、「意外的」「反発的」「対比的」という逆接の三分類にどのような下位分類の逆接性があるかを以下に図で示す。

---

<sup>35</sup> 左注の訓読は『新全集』による。

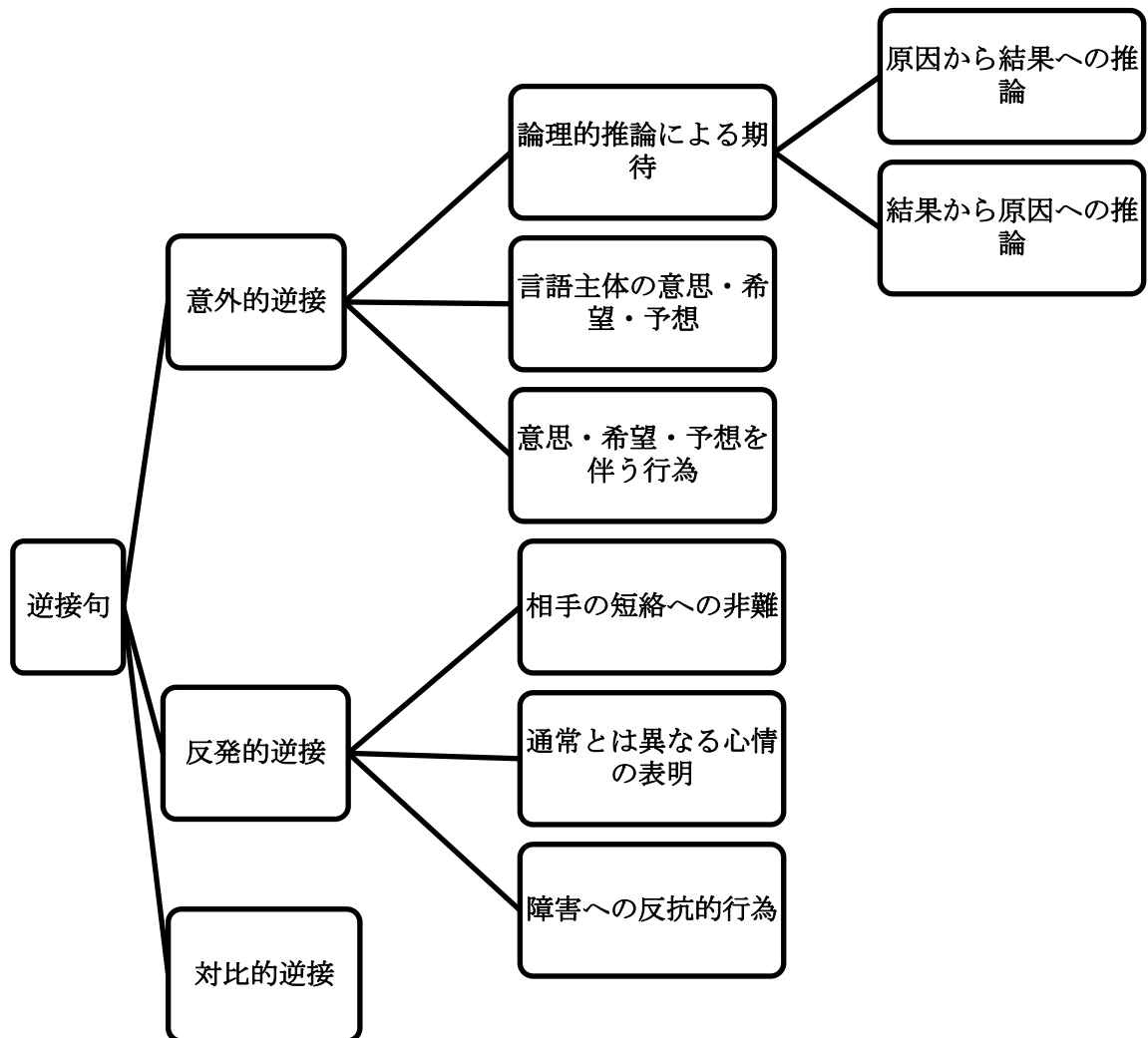


図 9 逆接句の下位分類のまとめ

下の表は、各逆接句の細分類について、コソの係り結びで表される例が上代で見られるか、また、ド・ドモによって表される例が上代で見られるかを、例文とともに示したものである。例文に添えた番号は万葉集の歌番号である。

表 4 逆接の細分類の表現形式

逆接大分類	逆接小分類		コソ係り 結びで表 されるか	コソ係り結びの例	ド・ドモ で表され るか	ド・ドモの例
意外的逆接	論理的推論 による期待	原因から 結果への 推論	×		○	霜置け <u>ども</u> その葉も 枯れず 4111
		結果から 原因への 推論	○	<u>昨日こそ</u> 年は果て <u>しか</u> 春霞…はや立 ちにけり 1843	○	あらしは吹かね <u>ども</u> 君なき夕はかねて寒 しも 2350
	言語主体の意思・希望・ 予想		×		○	去ななと思へ <u>ど</u> 此ら に障りぬ 899
	意思・希望・予想を伴う 行為		×		○	さもらへ <u>ど</u> …召す言 もなし 184
	反発的逆接	相手の短絡への非難		○	<u>目こそ</u> 忍ぶれ少な くも心の内に我が 思はなくに 2911	○
通常とは異なる心情の 表明		×		○	瀧の都は見れ <u>ど</u> 飽か ぬかも 36	
障害への反抗的行為		×		○	親は離くれ <u>ど</u> 我は離 るがへ 3420	
対比的逆接			×		○	千鳥は来れ <u>ど</u> 君そ来 まさぬ 3872

この表から分かるように、ド・ドモは逆接の接続助詞として汎用的に使われ、どの種の逆接の意味も表すことができる。それに対し、コソの係り結びの表せる逆接の意味は「結果から原因への論理的推論（意外的逆接）」、「相手の短絡への非難（反発的逆接）」の二つと、非常に狭い。次に章を改め、なぜコソの係り結びによってこれらの種類の逆接性がもたらされるのかを考えることとしたい。

### 3. 逆接のコソの係り結びの構成原理

#### 3.1. 先行研究

コソの係り結びの研究には、既に多くのものが存在する。そして、コソの係り結びがどう逆接と関わるかもまた、論者の関心を引く事柄であった。係り結びが逆接となるのは、ナムやゾといった他の係助詞とは異なる、コソに固有のことであり、また、接続助詞を使わずに構文的手段によって逆接を表すというのは注目すべき現象だからである。ここでは、石田春昭（1939）、大野晋（1993）、森野崇（2002）、半藤英明（2003b）、同（2005）、蔦清行（2006）、同（2007）がこの現象をどう扱ってきたのかを概観する。

##### 3.1.1. 石田春昭(1939)

石田氏の論は、コソの逆接用法を真っ向から研究した嚆矢である。石田氏以前の論者、山田孝雄、本居宣長、大槻文彦らは、「コソ～已然形」で文が終止する場合を本則、そのあとに逆接的に文が続く場合を特例としていた。石田氏はこれを不服とする。逆に、後者（逆接用法）を本則、前者をその転用・派生と見るのである。

石田氏の研究は已然形の用法の分類から始められる。「已然形は文を終止する力がない」（上、p.77）、「已然形は前提となる事を職分とする」（上、p.77）、「已然形は既定の事実を表はした」（上、p.77）、「已然形は前提としては順逆の中間であった」（上、p.78）という指摘がなされている。コソの機能は「その附着した方を揚げて他を抑へる作用」（下、p.80）であると言われ、その逆接的用法については次のように説明する。「コソは二命題の対立を激化せしめるために、自句の逆接前提たる立場を決定してしまふのであるが、逆接の『接』は已然形の受持つ所であり、之を『逆』に決定する事のみをコソが引受けて居るのである」（上、p.80）。已然形が文をつなぐ働きをし、コソによってそれが逆接と決定づけられたというこの見解は、現在の研究に大きな影響を及ぼした。

石田氏によると、コソによる対立は、結局「AコソB、非Aハ非B」の図式に帰着されるのであるが、このように処理できない物が少なからず存在するのが問題である。以降、コソの研究は多くのものが提出されてきたが、石田氏の問題点も引き継いでしまっている



(具体的な用例については以下でとりあげる)。

### 3.1.2. 大野晋(1993)

大野氏は、コソを題目提示の助詞と見て、「あれこれいろいろある物の中から一つを選抜して、『コレダ!』と選抜した結果を指示する助詞」(p.105)であるという。コソは光線に喩えられ、「コソという強い光線をあてると、あてられたものそのものがはっきりと姿を顕在化する。と同時に影（その反対の観念）もまたその背後に強く浮き上がってくる」(p.105)とされる。

(133) 昔こそ よそにも見しか 我妹子が 奥つ城と思へば 愛しき佐保山 (万葉 474)

の例では、「昔」が題目化、提示され、その対立概念である「今」が浮き出る。そして、この下の「よそにも見しか」の対立観念「愛しき」が浮き上がってくると説明される。

しかしながら、その後で大野氏が挙げる例はどうか。

(134) A 我こそば 憎くもあらめ B 我がやどの 花橘を 見には来じとや (万葉 1990)  
(p.109)

(135) A 昨日見て 今日こそ隔て B 我妹子が ここだく継ぎて 見まく欲しきも (万葉 2559) (p.111)

大野氏はこれらの例についてもAとBが「対立的関係」にあるとする。ごく広い意味で言えば「対立的関係」なのかもしれないが、少なくとも先の説明はこれらには通用しない。(133)の「昔」にあたるものは(134)では何か。「我」だとすると、その対立概念は何に当たるのか。(135)も「今日」の対立概念はBには現れていない。(134)・(135)は(133)と同列に論じえないと考えられるのである。

### 3.1.3. 森野崇(2002)

森野氏は、コソ（特に「コソー已然形」で言い切る用法）の語性は「言表中のあるモノ・コトを最上位・随一のものとして、他の対象を排してとりたてる」という、〈特立〉の特性であるとする。已然形句にコソが投入されて、コソの特性によって逆接性が生じたのだと見る。〈特立〉という用語を持ち出すこと以外は、およそ石田氏と同じ見解である。

森野氏は石田氏、大野氏の論を援用しているようである（森野氏は大野氏同様、「選抜」という用語も使う）。しかし森野氏が「最上位・随一のものとして」と「他の対象を排して」

とを、並べて述べているのは不可解である。「AコソB」とあるときに、「他の対象を排して」だと「A以外の対象はBではない」を意味するだろう。一方、「最上位・随一のものとして」だと「他の対象よりもAがまさっている」ということであり、必ずしも「A以外の対象がBではない」と述べているわけではない。これらは半藤英明(2003b)では明瞭に区別されている。

#### 3.1.4. 半藤英明(2003b)

半藤氏の係り結び研究は、係助詞を「『取り立て』機能を持つ助詞」(p.13)と規定するところに特色がある。その「取り立て」機能は、平行する事態が想定される「有限特定のものの中からの取り立て」と、そのような事態が想定されない「絶対的な取り立て」とに二分される。

半藤氏はコソの用法に、(イ) 結合排他、(ロ) 結合卓立、(ハ) 結合強調、の3つを認める。(イ)・(ロ)は「有限特定のものの中からの取り立て」のパターン、(ハ)は「絶対的な取り立て」のパターンにあたる。以下、これら3つを同書から簡単にまとめる(pp.22-27を参照)。

##### (イ) 結合排他

(136) A 昔こそ 難波みなかと 言はれけめ B 今は都引き 都びにけり (万葉 312)

このパターンでは、AとBとが対立の関係にある。半藤氏は「Aを際立たせることで、相反するBを示すもの」(p.23)という。いわゆる対比用法である。

##### (ロ) 結合卓立

(137) 我妹子が やどの秋萩 花よりは 実になりてこそ 恋増さりけれ (万葉 1365)

この例では、「花によって恋しさが増す」「実がなって恋しさが増す」という並行的事態から、後者が選抜されている。前者は排される対象でない、というところに(イ)との相違がある。

##### (ハ) 結合強調

他の結合を意識せず、そこには対比的含みもない。単に文の強調を行うものである。

(138) 天皇の 御代万代に かくしこそ 見し明らめめ 立つ年のはに (万葉 4267)

森野氏が〈特立〉へと一括した「他の対象を排して」は(イ)の結合排他に、「最上位・

随一のものとして」は（ロ）の結合卓立に、それぞれ当たると思われる。半藤氏は、（イ）のみが逆接の用法にかかわるとする。つまり、半藤氏は、森野氏の〈特立〉概念を二つに区別し、結合卓立の方は逆接につながらないと見る。

このように、半藤氏はコソの逆接性を「結合排他」のみに求める。コソを「取り立て」の助詞と見て、その用法を三つに分類した点は新見であるが、「逆接がいかに生じるのか」についての説明は大野氏と同じであると言って良い。大野氏と同様の弱点を抱えているとも言える。

### 3.1.5. 半藤英明(2005)

半藤英明(2005)では、半藤英明(2003b)と同じくコソの用法を三分類しており、理論的枠組みは前稿と同じである。半藤英明(2005)では、「結合排他」で説明できないようなコソ逆接句の存在が挙げられている。

(139) なかがきこそあれ、ひとついへのやうなれば…（土佐日記）

では、コソは「なかがき」を排除しているわけではない。だからコソは排他的関係を示すのではないと半藤氏は言う。しかも半藤氏は、『『こそ』の対比構文には、このようなものがかなりある。』と述べている。上代～中古の実例を見ればその通りであろう。

半藤氏はこのような例は「（結合排他とは）別に扱うべきもの」と述べ、「イディオムのな用法」としているが、結合排他で処理できない例がそれほどあるとすると、説明に根本的に不備があるのではないかと疑われる。

### 3.1.6. 蔦清行(2006)・同(2007)

蔦清行（2006）は終止用法のコソの分析であり、同（2007）は結びの品詞に着目したコソの係り結び論である。これらではコソの形成する逆接構造についても言及がなされる。石田春昭（1939）や大野晋（1955）の「対比」、半藤英明（1993）の「結合排他」という概念を援用しつつ、次のようなものを、コソを用いる構文の典型的な形とする。

(140) 昔こそ 難波あなかと 言はれけめ 今は都引き 都びにけり（万葉 312）

昔と今、田舎と都とが対立しており、

- AコソB、非Aハ非B

と図式化される。この図式は石田春昭（1939）に依るものである。蔦氏は、コソはこの構

成と堅固に結びついており、対立の関係を喚起する力が強いという。しかしながら、薦氏自身認めるように、対立関係を構成しない例もある。

(141) 妹をこそ 相見に来しか 眉引きの 横山辺ろの 鹿猪なす思へる (万葉 3531)

「妹に会いに来たのに、～獣のように思う」という意味で、対立関係ではない。薦氏はこれを「AコソBダガC」型と呼ぶ。

この対立関係を構成しない例についても、結局薦氏は「AコソB、非Aハ非B」の図式に押し込めてしまう。「コソ本来の対立の関係を提示するはたらきは希薄になっているが、その対立関係に由来する後に続く意識が強く残っているために、生じたものであろう」(薦(2006: 50)、下線は引用者による)と説明される。また、例は省くが、逆接ではなく順接で続いていくようなコソ係り結びの例についても、逆接の関係から派生したものとされる。

薦氏は、対立関係には無い例を、「対立関係に由来する」や「派生」と簡単に言ってしまうが、間を埋める説明が必要ではなかろうか。また、氏は逆接性を究極的に「AコソB、非Aハ非B」の「型」に求めるのであるが、それがコソという係助詞の性質とどう結びつくかが明らかにされていないように見える。「コソはこの構成と堅固に結びついており」とされるだけである。「型」としての整理は、石田春昭(1939)を受け継ぎ、それを深化させたものであるが、処理に難しい例が残っていると思われる。

### 3.1.7. 先行研究の問題点

先に上げた先行研究に共通する問題点を四つ挙げる。

第一点。先行研究では、コソの係り結びの逆接的意味をとりたてて議論の対象としていない。当然意味分類といったこともなされていなかった。先行研究でのコソの係り結びの逆接とは、「対立」乃至「対比」という単質なものであり、畢竟「AコソB、非Aハ非B」図式に当てはめられるのであった。しかしどうしてもこの図式に帰着されないものが、既に上代文献にも少なからず見られる。これは先行研究でも問題点として挙げられていたことである。

第二点。「A—B 非A—非B」という構造は、先行研究で対比的な逆接の関係を成すと、(前提のように)見られているが、必ずしもそうとは言えない。たとえば「A—B 非A—非B」の構造に当てはまる次について考えよう。

(142) こちらの箱は大きい。あちらの箱は小さい。どちらを開ける？

この二文を接続表現で結んだ時、

(143) こちらの箱は大きいが、あちらの箱は小さい。どちらを開ける？

と逆接的に表すことも可能であるが、

(144) こちらの箱は大きくて、あちらの箱は小さい。どちらを開ける？

(145) こちらの箱は大きくく、あちらの箱は小さい。どちらを開ける？

のように、テ形や連用形による並列的な接続も成り立つ。コソの係り結びが「AコソB、非Aハ非B」という構造に結びつくとしても、それが並列関係ではなく確かに逆接関係になるということは決して自明の事柄ではない。

第三点。上記研究では、コソの語性は「(結合) 排他」、「選抜」、「特立」などと言われ、それが「AコソB、非Aハ非B」に結びつくのであった。

実は同様の議論は、限定の助詞（現代語のダケ、古代語のノミやバカリなど）でも可能である。以下、現代語のダケで議論を進める。今、

(146) 社長だけがその会合に出席した。

という文を考える。これは取りも直さず

(147) 社長以外はその会合に出席しなかった。

を意味しよう。大野氏の「影がその背後に強く浮き上がってくる」、森野氏の「他の対象を排してとりたてる」など、コソで言われた議論は、このダケに関しても通用する。すなわち、「AダケB」は「非Aハ非B」に結びつくと言える。

注意すべきなのは、「AダケB」と「非Aハ非B」の関係である。「AダケB」と「非Aハ非B」は同じ事柄を述べており、論理的に言って両者の真理条件も同じである。だから、二つを並べた

(148) 社長だけがその会合に出席した。社長以外はその会合に出席しなかった。

という言い方は冗長であると感じられよう。この第二文は新たな情報を何ら付け加えていないわけではない。ましてこれらを逆接表現で結んで

(149) 社長だけがその会合に出席したが、社長以外はその会合に出席しなかった。

(150) 社長だけがその会合に出席した。しかし、社長以外はその会合に出席しなかった。

というのは不自然である。せいぜい、

(151) 社長だけがその会合に出席した。つまり、社長以外はその会合に出席しなかった。  
のように、「言い換え」の接続表現を使うくらいであろう。

つまり、ダケの限定性から「AダケB」は「非Aハ非B」に結びつくとは言えるものの、  
ダケは逆接句を構成しないのである。

以上の議論と同様に考えると、コソの排他性から「AコソB」が「非Aハ非B」に結び  
つくと仮に言えたとしても、そこからコソが逆接句を構成するとは結論できないのである。

「排他」を「選抜」や「特立」と言い換えてみたところでその実質は同じである。細かい  
用語の問題ではなく、コソの性質の根本を見直す必要があると思われる。

第四点。これは最も重大と考えられる問題点である。

石田氏はコソの機能を「その附着した方を揚げて他を抑へる作用」といい、大野氏は「コ  
ソという強い光線をあてると、あてられたものそのものがはっきりと姿を顕在化する。と  
同時に影（その反対の観念）もまたその背後に強く浮き上がってくる」と述べていた。

一方で、本論文で反発的逆接と呼ぶものの用例を観察すると、後続句が相手への反発を  
なしており、後続句にこそ自らの主張の中心があるのだった(2.4.2.1節や2.5.2.4節を参照)。  
実は大野氏も、用例の検討の段となると、係り結びの後続句の方が中心的叙述を成すこと  
を認めている。以下に引用しよう。

コソを含む条件句は、最終的には「ソナコト本当ジャナイ」、「ソナコトドウデモ  
ヨクテ」と否定的な取扱いをうけ、その下に来る別の終結の句の方を中心的な叙述と  
するわけである。(大野晋 1993 : 107)

結局「A コソ……ダ」の部分の価値としては「ソナコトドウデモヨイ」と否定されて  
しまい、「B ダ」の部分(引用者注:係り結びの下に来る部分)が主要な内容となる。(大  
野晋 1993 : 109)

これでは石田氏のいう「抑えられた他」や大野氏のいう「影」にあたる後続句の方に、  
主張の中心があることになってしまい、大変に奇妙である。また、彼らの論でこの齟齬を  
解消する説明はなされていない。

以上の四点から、先行研究ではコソの性質を本質的に捉えられていないと考えられるの  
である。

### 3.2. 已然形

ゾ・ナム・ヤ・カといった係助詞が連体形の結びを取る中で、唯一、係助詞のコソはその結びが已然形であるという特徴を持つ。今、已然形という活用形、特に上代の単独用法<sup>36</sup>のそれについて少しく言及する。

述語がある活用形を取るとき、普通は、活用形ごとにそこで文が終止するかそれとも後句に連続するかが判然としている。例えば終止形や命令形は典型的にそこで文を終止する形式である。連体形は、ゾなどの係り結びの結びにせよ、連体形終止（山田孝雄のいう擬喚述法）にせよ、そこで文が終わる。一方、連用形は（ごく修辭的な場合を除いては）そこで文が終わることなく、後句に連続する形式である。

ところが上代で已然形の単独用法を見たとき、そこで文が終止する場合も、後句に連続する場合も両方が認められるのである。

文終止となるものは数が少ないと思われるけれども、次がはっきりとした例である。

- (152) 行き変はる 年のはごとに 天の原 振り放け見つつ 言ひ継ぎにすれ（語り伝えるのだ）

万葉 4125

順接の関係で後句に続いていく例は(153)ほか、万集中に計14例前後ある。

- (153) …隠らひ来れば 天伝ふ 入り日さしぬれ ますらをと 思へる我も しきたへの 衣の袖は 通りて濡れぬ

…（妻の姿が）見えなくなったちょうどその時（天伝ふ）夕日も落ちてきたので ますらおと 思っている私も（しきたへの）衣の袖は 表から裏まで涙で濡れてしまった

万葉 135

一方逆接の例は次の2例くらいで少ない。(154)の「や舟たけ」は語義がよく分からないが、「ますます舟を漕いだが」の意に取っておく<sup>37</sup>。

<sup>36</sup> コソの結びにならず、ドやバのような接続助詞が後接しないもの。この用法については石田春昭(1939)、京極興一(1960)、佐伯梅友(1966)の『『ば』—已然形につくもの—』、佐佐木隆(2001)が参考になる。

<sup>37</sup> 『新全集』は「や舟」の「や」を、いよいよますますの意としている。

(154) 大舟を 荒海に漕ぎ出で や舟たけ 我が見し児らが まみは著しも

(大船を 荒海に漕ぎ出し 漕ぎに漕いだが 私が見た娘の まなざしははっきりと見える)

万葉 1266

(155) …三島野を そがひに見つつ 二上の 山飛び越えて 雲隠り 翔り去にきと 帰り来て しはぶれ告ぐれ 招くよしの そこになければ 言ふすべの たどきを知らに…

(…「(鷹は) 三島野を 後ろに見つつ 二上の 山を飛び越えて 雲に隠れ 飛んで行きました」と 帰って来て (翁が私に) 咳き込んで告げたが (鷹を) 呼び返すすべが さであるわけでもないのだから と言ったらよいのか分からず…)

万葉 4011

文が終止するか否か判断に迷う例もある。

(156) 家離り います我妹を 留めかね 山隠しつれ 心利もなし

万葉 471

この已然形は「妻を留めきれず、山に葬ってしまったので、氣力もなくなった」のように順接で続く解釈が可能であるが、佐伯梅友(1966: 68)は「続く言い方と見るよりも、『山隠しつれ』で一旦言い放つたものとして味わう方が、ずっと力強く感じられて、よくなるように思われる。」としている。文法的にはどちらの解釈も可能であり、この解釈の曖昧性こそが、却って上代の已然形の持つ本来の性質と思われる。すなわち、已然形とは元々はそこで文が切れるか否か未分化な形式であって、時代が下るにつれて徐々に分化していったのではないだろうか<sup>38</sup>。

後句に連続する已然形の用例を見ると、已然形は順接であるか逆接であるかを積極的に示すのではなく、中立的に句と句を結んでいるようである<sup>39</sup>。ここで已然形単独用法と比較して、「コソ～已然形」の係り結びに目を向けよう。「コソ～已然形」は、已然形単独用法と振る舞いが異なり、後に句が続く場合は順接ではなく逆接となる。両者の違いはコソの有無である。とすればこの逆接性は、助詞のコソに固有の性質によってもたらされたとい

<sup>38</sup> 後句に連続することを明瞭に表わすために「已然形+バ」、「已然形+ド(モ)」のような形が生まれたのだろう。

<sup>39</sup> 順接の例が多いのは、二つの句を自然につないだら通常は(＝特別なことがないかぎり)順接となるためと考えられる。



うことになる。それではかかるコソの性質とは一体どのようなものであろうか。次節で本稿の持つ考えを述べたい。

### 3.3. コソの語性・その強調の性質

本論文は、コソ（特に逆接用法のそれ）の使用にあたっては、言語主体の内で、或る事物が前もって基準として設けられていると考える。そして、コソが指す対象は、その基準とはかけ離れた特別なもの、基準から逸脱する特殊なものとして区別される。本論文はコソの強調の質を、基準とひときわ異なるものとして扱う「特異的強調」と見て、ここからコソの係り結びの逆接性を説明したいのである。

逆接の係り結びの「A コソ B ナレ、C」で言えば、基準となるのは後続句にあたる C の部分に関係する。C から推論される事柄、もしくは C そのものが基準となる（詳しくは後述）。コソの係り結び部分（A コソ B ナレ）がそれとは別の、特異な事物として示されるのだと、本論文は考える。

さて、コソの逆接性には意外的逆接と反発的逆接の二種類が認められた。コソの「特異的強調」の本質はどちらにおいても変わらないが、コソがどのような事柄を基準にするかに差があると本論文は見る。

本章の次節以降では、本論文で考えるコソの性質（特異性）が《どの対象に》《何を基準として》《いかにして》働くと逆接性がもたらされるかを、例とともに説明する。3.4 節でコソの区別が働く範囲、すなわちコソが働く対象について触れる。その後、3.5 節で、何が基準となり、どのようにコソの性質が発揮された結果、その係り結びが意外的逆接となるのかについて説明する。意外的逆接の中には「～ド」によって表されるが「～コソ～已然形」によっては表されないタイプもあった。なぜコソがそれらのタイプを表示しないかを考える。3.6 節では反発的逆接について説明した後、さらに複雑な逆接の様相を観察する。最後にコソの係り結びによっては示されないタイプの反発的逆接について考える。

### 3.4. コソの区別が働く範囲

係助詞や副助詞は、(157)のように直前の要素に関わる場合があるが、(158)のように文事

態全体に関わる場合もある。

(157) 君が代も 我が代も知るや 岩代の 岡の草根を いざ結びてな

(あなたの命も 我が命も支配する 岩代の 岡の草を さあ結びましょう)

万葉 10

(158) 雨も降る 夜もふけにけり 今更に 君去なめやも 紐解き<sup>き</sup>設けな

(雨も降るし、また夜もふけました 今更に あなたは帰らないでしょうね 紐を解いて  
寝る支度をしましょう)

万葉 3124

(157)ではその合説性が「君が代」と「我が代」の二者に関わり、「(岡の草根が)知る」の目的語として列挙している。(158)は「雨降る」「夜ふけにけり」という二つの事態全体に関わり、両者を併せて「あなたが帰らないであろう」という理由と見なしている。

松尾捨次郎は、助詞ハに「相類した二つの事物を区別する意がある」<sup>40</sup>とし、その区別には二種があると主張している。

松尾氏が(甲)の場合とするものは、「はの附いた上の語が表す物と其に類似した物とを区別する場合」(p.421)であって、たとえば「夏の夜は(短し)」と「秋の夜は(短からず)」は、「二つの物を区別したのであって、其の下述語は、同一の語の 肯定 否定 を充当することが出来る」(p. 421)。他方の(乙)の場合は「其のはの係結をして居る全文(又ははを含んだ全句)と之に類した事柄を表す全文(又は全句)とを区別する場合」である。松尾は例として「花は咲きたり。」「鳥は未だ鳴かず。」を挙げ、「其の述語は、同一の語の 肯定 否定 を充当して、之を区別することは出来ない。即ちはの上下共全然異種の語を要する。」(p. 421)という。

富士谷成章『あゆひ抄』では、

(159) 一人のみながむるよりは、をみなへし、わが住む宿に植ゑて見ましを。(古今 236)  
のノミをバカリと訳し、さらに、「この[のみ]をめぐらして、『ひとりながめてばかり』(中略)と心得れば、いよいよやすし。」と述べている(《のみ家》、下線は引用者による)。ここでの副助詞のノミを文事態全体に関わるとみて、下の方にノミを移して解釈するとうまく訳せるということである。

<sup>40</sup>松尾捨次郎(1936)『国語法論攷』文学社。本論文での引用は1961年、白帝社刊の追補版による。この引用箇所は第四章、第六節(一)、p.420である。

このように、係助詞・副助詞は、直前の語に関わる場合のほかに、文全体に関わると見た方がよい場合もある。文法現象としてこのようなことがあることは、成章のみならず現代の研究者も認めるところだが、一体どういうわけでこのように二様の働き方が生じるのかは、先行研究によって未だ説明されていないように思われる。本論文の筆者もその仕組みについては意見を持ち合わせていないが、解釈上の違いがあることを認め、係助詞・副助詞の働く範囲を二つに区別して考えるのである。

本論文は 3.3 節で述べた通り、コソを、基準とひときわ異なるものとして区別する助詞と見るのであるが、その区別の働く範囲にはやはり直前の語に関わる場合と係り結び句全体（文事態全体）に関わる場合とがあると考えられる。

### 3.5. コソにより意外的逆接が生じる原理

2.4.1.1.2 節で述べたように、上代で意外的逆接となるコソの係り結びは「結果から原因への推論」に関わるものであった。本節ではこの種の係り結びでコソが何を基準とし、どのようにコソの特異性が発揮されているかを見たい。前に引用した例を再び取り上げ、「コソが直前の語に働く場合」、「コソが係り結び句全体に働く場合」に分けて分析する。

#### 3.5.1. コソが直前の語に働く場合

(160) 島山を い行き巡れる 川沿ひの 岡辺の道ゆ 昨日こそ 我が越え来しか 一夜のみ  
寝たりしからに 峰の上の 桜の花は 瀧の瀬ゆ 散り落ちて流る

（島山を 行き巡る 川沿の 岡辺の道を 昨日 わたしは越えて来たばかりなのに た  
だ一泊 していただけなのに 尾根の 桜の花は 瀧の瀬を 散り落ちては流れている）

万葉 1751、(47)の一部を再掲

ここでは係り結びの後続句（波線部）が推論の出発点であった。波線部の事態 **Q** は、今まさに言語主体の眼前に拡がる動かしがたい事柄であり、その意味で、ここでの一連の判断を支える基礎として捉えられる。ここから「ずっと前に岡辺の道を越えて来たはずだ」(=**P**)と、その原因が推論される。判断の基礎となる結果 **Q** から導かれる原因 **P** が、コソの使用に先立って、基準として捉えられている事柄である。

ここでコソは直前の語「昨日」に関わる。そして、それを基準 **P** の「ずっと前」とひと

きわ異なるものとして区別する。特異性を持つコソによって両者の区別が明示され、実際には「ずっと前」ではなかったのだ、と否定されるのである。ここから時間の推移を思いがけなく早く感じるという意外性が生じ、意外的逆接につながるわけである。

ここでの基準となる事柄とコソの特異性の働きを、2.4.1.1.2 節で提示した図 7 と併せて、図 10 として下に示した。

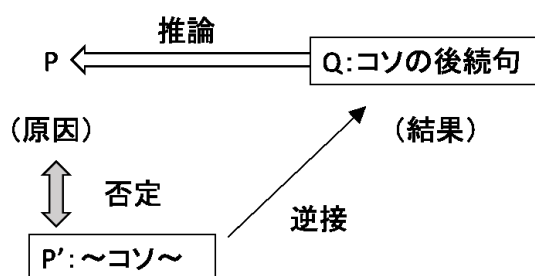


図 7 (再掲) 意外的逆接のコソの係り結びの構図

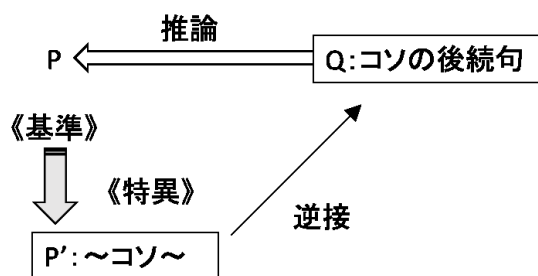


図 10 意外的逆接のコソの係り結びの原理

他の例でも全く同じ説明が可能である。

(161) 折りつれば袖こそにはほへ梅の花ありとやここにうぐひすのなく

(梅の花を手折ったので私の袖が匂っている。それなのに、梅の花があると思ったのか、ここで鶯が鳴いているよ)

古今 32、(52)の再掲

先と同様に、「ここにうぐひすのなく」という眼前事実から、「梅の花がここで匂っているはずだ」という原因事態が導かれ、それが基準となる。コソは直前の語「袖」に関わり、「花」から特に異なったものとして区別する。移り香は、本物の花の香とはまるで異質であると

いうのである。それにも関わらず本物の梅の花があるかのごとく事態が進行している、というところにこの歌の意外性がある。

### 3.5.2. コソが係り結び句全体に働く場合

以上は、コソの区別性が直前の語に関わる例であった。次はコソが係り結び句全体を区別していると思われるものである。

#### (162) 妹をこそ 相見に来しか 眉引きの 横山辺りの 鹿猪なす思へる

(あの子に 逢いに来ただけなのに (眉引きの) 横山辺りの 猪のように思っている)

万葉 3531、(51) の再掲

この歌でもやはり波線部の現在の事実が判断の基礎である。言語主体の推論はその原因へと向かい、「田畑を荒らす猪のごとき、害をなす行為をしたのか」と思う。ここでは「害を与える行為」が基準となっている。コソは、「愛する人に逢いに来た」という行為全体に働き、それを「害を与える行為」とは全く異なるものとして明瞭に区別する。言語主体はコソによって、自らの行動を、迷惑な行為にはまるで当たらないと位置づけているのである。「愛する人に逢いに来た」という行為を相手の親は猪の悪さのように思い、一方、詠み手は何も悪く感じていないというすれ違いがこの歌にある。

次も同種の歌である。

#### (163) 梅の花見にこそ来つれうぐひすのひとくひとくと厭ひしもをる

(梅の花を見にやって来たのに、鶯が「人が来る、人が来る」と嫌がっている)

古今 1011、(117)の再掲

鶯の鳴き声を「人来」、すなわち私が来るのを嫌がっていると聞き做したものである。この鶯の様子から推論が発して、「果たして私は何か鶯の嫌がる行為を行ったか」と、その原因を探す。「鶯の嫌がる行為」がコソの使用にあたっての基準となっている。そして、コソが「梅の花を見に来た」という行為全体を、その基準から別のものとして区別するのである。自らの行動に何ら思い当たる節が無いのに、鶯が私のことを嫌がっているというところに意外性がある。

『新大系』は(162)を「妹に逢いに来た、それだけなのに、(眉引きの) 横山あたりの獣のように思っているのだなあ。」(下線部引用者)と、『新全集』は(163)を「私は梅の花が見たくて、来ただけなのに、鶯が「ヒトク、ヒトク」と私を嫌って枝に止まってがんばってい

るのはなぜだろう。」(下線部引用者)とそれぞれ訳している。この「～だけ」というところに、他意は無い、相手に対する悪意は無いのだという雰囲気がよく出ていよう。

### 3.5.3. コソの係り結びによっては示されない意外的逆接

上代では、「結果から原因への推論」以外の意外的逆接は、コソの係り結びで表されないものであった。なぜコソはそれらの意味を表わし得ないのかについて、本節で詳しく見てみたい。

2.6 節でまとめたように、ド・ドモはどの種の逆接の意味も表すことができるが、対して、コソの係り結びの表せる逆接の意味は「結果から原因への論理的推論(意外的逆接)」、「相手の短絡への非難(反発的逆接)」の二つに限定されているのであった。そこで、ド(モ)による逆接句とコソの係り結びとの対応付け(置き換え)という観点からこれまでの例を見直してみる。

コソの係り結びで表されない場合の逆接句を見る前に、コソで表せる「結果から原因への推論」について分析する。

(164) 岡辺の道ゆ 昨日 こそ 我が越え来しか …桜の花は 瀧の瀬ゆ 散り落ちて流る

(岡辺の道を 昨日 わたしは越えて来たばかりなのに …桜の花は 瀧の瀬を 散り落ちては流れている)

万葉 1751、(160)の一部を再掲

この係り結びの例に対応すると思われる「～ド」の逆接句は、作例となるが次である。

(165) 岡辺の道ゆ昨日 我が越え来しかど …桜の花は 瀧の瀬ゆ 散り落ちて流る

今、仮に(165)が与えられたとして、それに対応するコソの係り結びを作り出すことを考えてみる。(165)の推論は、結果である後句「桜の花が散って流れている」を出発点とする。そこから「ずっと以前に (A) 私が岡辺の道を越えてきたはずだ」という原因が導かれ、これが言語主体の抱く期待となる。しかし実際にはそれとは異なって「昨日 (A') 私が山道を越えてきた」のである。A は言語主体の期待(思い込み)であり、彼にとって基準として扱われているだろう。

基準たる事物の A と、それとは異なる事実 A' の差は、「基準とひととき異なるものとして扱う」という特異的強調のコソによって表わすことができる。すなわち、コソを「昨日」に付けて「昨日こそ我が越え来しか」とすれば、「昨日」が基準とは異なるものであると表

現されるのである。こうして、(165)の「昨日我が越え来しかど」は(164)の「昨日こそ我が越え来しか」に置き換えが可能となり、ドによる逆接句とコソによる逆接句とがうまく対応付けられる。

それでは次に、「原因から結果への推論」に関する意外的逆接句について見よう。下はドモの逆接句の例であるが、これがコソの係り結びに置き換え可能かということを先ほどと同様に考えるのである。

(166) 我が背子が やどのなでしこ 日並べて 雨は降れども 色も変はらず

(あなたの 家のなでしこは 幾日も続いて 雨が降っているが 色も変わらない)

万葉 4442、(35)の再掲

言語主体の推論は「雨が降っている」という原因を出発点として、「なでしこの色が変わるはずだ (A)」という結果を導く。この期待される結果が、言語主体にとって基準として認識されていよう。ところが実際には「色は変わらない (A')」のである。基準 A と事実 A' との差をコソによって表わしてみよう。A'の方にコソを付けて「色こそ変はらね」とすれば、事実 A'が基準 A と異なるということ自体は一応表現される。ところが、(166)で「色も変はらず」を「色こそ変はらね」に置き換えてみると、

(167) ?我が背子が やどのなでしこ 日並べて 雨は降れども 色こそ変はらね

という文が出来上がる。「～コソ～已然形」が後句に現われており、「～ドモ」が「～コソ～已然形」に置き換わらない、奇妙な文となる。つまり(166)は逆接のコソの係り結びと対応づけることができないのである。こうして「原因から結果への推論」がコソの係り結びによって表わされないことが説明されるわけである。

次は 2.4.1.2 節の「言語主体の意志・希望・予想」の、ドによる逆接句の例である。

(168) 恋ひつつも 居らむとすれど 木綿間山 隠れし君を 思ひかねつも

(恋いながらも じっと待っていようとするが 木綿間山に 消えた人を 思うところえきれない)

万葉 3475、(54) の再掲

前句「～ド」が言語主体の期待であり、後句がそれに反する事実である。今までと同じように考えれば、言語主体の期待である前句が、彼にとっての「基準」となろう。コソは基

準からの区別を表わすので、基準とは異なる後句「隠れし君を思ひかねつも」の方にコソが付くはずである。すると

(169) ?恋ひつつも 居らむとすれど 木綿間山 隠れし君をこそ 思ひかねつれ

というおかしな文が出来上がり、「言語主体の意志・希望・予想」でもやはりドによる逆接句がコソの係り結びと対応を持たないことが示される。全く同様の議論により、コソの係り結びが「意志・希望・予想を伴う行為」のタイプの逆接句を表せないことが言える。

本節では、「結果から原因への推論」以外の意外的逆接は、なぜコソの係り結びで表されないのかについて考えた。ド（モ）の逆接句の文（適格な文）を用意して、これをコソの係り結びで表現してみると不適格な文が出来るということを示した。こうして、「結果から原因への推論」以外では、ド（モ）の逆接句をコソによる逆接句に置き換えることができないことを見たのである。

それでは節を変え、反発的逆接のコソの係り結びに移ろう。

### 3.6. コソにより反発的逆接が生じる原理

2.4.2 節で見たように、コソの係り結びの表す反発的逆接とは、他者の行うであろう推論を想定し、それを間違っていると否定するものであった。具体的には次のものである。

- 「ある事実を元にして、無根拠にそれを拡張し他の事柄に結びつける」ことを否定するもの
- 「ある一局面で認められる事柄を、無根拠に他に通用させる」ことを否定するもの

本節では、コソの使用に先立って何が基準となっており、そしてコソの性質がいかに働くのかに着目して、反発的逆接がもたらされる原理を考察する。コソの働く対象（語句）についてやや細かく分類しながら論を進めたい。

#### 3.6.1. コソが直前の語に働く場合

次の表は万葉集中 52 例の反発的逆接のコソ係り結びについて、コソの前接語の種類ごとに例数・割合を示したものである。

表 5 万葉集の反発的逆接のコソ係り結びにおけるコソの前接語



コソの前接語	例数	割合
無助詞名詞(主格相当)	22	42.3%
未然形+バ <sup>41</sup>	17	32.7%
無助詞名詞(時)	5	9.6%
格助詞ニ	4	7.7%
ミ語法	1	1.9%
ク語法+ハ	1	1.9%
他	2	3.8%
総計	52	100.0%

「主格相当の無助詞名詞」、「未然形+バ」の比率が特に高く、これらで全体の 75%を占めている。主格相当の名詞は述語の結び句と大きく対立する。また、「未然形+バコソ」は条件句として働き、帰結句たる結び句と対立する。これらの係り句と結び句との間には、文構成上大きな切れ目が認められると言えよう。万葉集の例を観察すると、結び句の述語と大きく対立する箇所でコソが直前の語に働き、反発的逆接を生じる場合が多いのである。

万葉集でコソが働く直前の語句を内容的に分類すると、次の3タイプが代表的なものとして挙げられる。

- ①仮定条件
- ②比喩的对象
- ③対概念を成す事物

以下では、これらのタイプごとにコソの働き方、そして逆接性がいかに生まれるのかを見ていくこととする。

### 3.6.1.1. 仮定条件

まず、仮定条件となる句にコソが付く場合を見る。万葉集では、「未然形+バ(ノミ)コソ」の17例、「ク語法+ハ+コソ」の1例がこれに該当する。

(170) …ま玉なす 我が思ふ妹も 鏡なす 我が思ふ妹も ありと言はばこそ 国にも 家に

---

<sup>41</sup>「未然形+バ+ノミ」(3例) もここに含めた。

も行かめ 誰が故か行かむ

（玉のように 私が愛しく思う娘が 鏡のように私が愛しく思う娘が いると言うのなら 故郷にも 家にも行くだろうが （もはや） 誰のために行くだろうか）

万葉 3263、(124)の再掲

『新大系』で「妻衣通姫のいない故郷には帰る望みもないという挽歌色の濃い歌である」という。詠み手の主張は「誰のためにももう故郷には帰るまい」と後続句の方に込められている。

今、コソの性質がどのように仮定条件句（「～と言はば」）に作用するのを見よう。3.3節で述べたように、コソの使用の際には言語主体の内で、或る事物が基準として設けられている。(170)では「誰が故か行かむ」という係り結びの後続句が詠み手の主張の中心であり、かつ、「基準」に当たると考えられる。

さて、係り結び部分は「故郷に行く」場合について条件付きで言及されている。その条件句に特異的強調を示すコソが付くことによって、基準とされる状況とは際だって異なる、特別で例外的な条件として示される。実際、深く愛する妻というのは、言語主体にとって、誰とも異なる特別な存在である。

故郷に帰るということはあくまで例外的な一局面で成り立つことであり、詠み手が置かれた状況（妻がいない状況）には、もはや「故郷に帰る」ということが通用しない。すなわち例外的事柄は退けられる。結果として、「誰が故か行かむ」という後続句が反発的に、そして強烈に主張されることとなる。

次は源氏物語の例だが、上述の上代の例と同様に逆接の仕組みを説くことができる。

(171) （斎宮）いと重りかにて、ゆめにもいはけたる御ふるまひなどのあらばこそ、おのづからほの見たまふついであらめ、心にくき御けはひのみ深さまされば、見たてまつりたまふまに、いとあらまほしと思ひきこえたまへり。

（（前斎宮は）たいそう慎重な方で、万が一にも不用意な御振る舞いがあるのなら、ひょっとしたらちらとでもお見えになる機会もあろうが、奥ゆかしいご様子が深くなる一方なので、（源氏はそのような前斎宮の上品なご様子を）拝するにつれて、（前斎宮のことを）まことに申し分のない方だと思い申し上げている。）

源氏 2-172 絵合

この箇所は、「源氏の君が、斎宮の容貌をどれくらい美しいのか知りたいものと思っている

が、拝見することが叶わずしゃくだと感じている」という文脈から続いてくるところである。下線部の係り結び部分が挿入句的に差し込まれている。

ここでは、係り結びの使用にあたり、「斎宮の美しさを見ることが叶わない」という一般的状況が基準として主張されている。「その姿を見る機会もあろう」と、主張と外れる事柄が結び句で述べられるが、それは「万が一にも不用意な御振る舞いがあるのなら」という条件付きである。しかもこの条件はコソによって、特殊な、例外的条件として示されている<sup>42</sup>。係り結び部分は一般に考えられる状況とは無関係であるとして退けられ、また、実際に奥ゆかしいご様子が深くなる一方（で拝することが叶わない）、と後続句で言われるのである。

以上の例では、係り結びの後続句が中心的主張に当たり、基準としてあらかじめ言語主体に捉えられている。特異的強調のコソは、仮定条件に付き、基準とされる状況とは異なる特殊で例外的な条件として示す。例外的事柄は、中心的主張に通用しないがゆえに結局は退けられ、それに反発する形で中心的主張が述べられることとなる。このようにして、コソの特異性が反発的逆接につながるということが説明されるわけである。

2.5.2.3 節でも例に挙げたが、反発的逆接では後続句が省略されるものがある。今のタイプでいうと、仮定条件句にコソが付き、結びが帰結句となって、その後に句が続かないものである。

(172) 天地の 神の理 なくはこそ 我が思ふ君に 逢はず死にせめ

(天地の 神の判断が ないのなら 私が愛するあなたに 逢わないまま死にましょうが)

万葉 605、(130)の再掲

(173) 薦枕 相まきし児も あらばこそ 夜のふくらくも 我が惜しみせめ

(薦枕を とともに枕にした妻が いるのなら 夜の更けるのが 惜しいことだろうが)

万葉 1414、(131)の再掲

2.5.2.3 節で述べたように、主張の中心は表面的に述べられていることにはなく、それぞれ「必ず君に逢えるはずだ」、「夜の更けることなど惜しくもない」ということにある。言語

---

<sup>42</sup>「ゆめにも…あらば」という言い方にも、これが特殊な条件であることが表われている。

化はされていないものの、言語主体の内ではこれらの主張したい事柄が「基準」として設けられていると考えられる。

(172)(173)の後続句無しのタイプも、コソの働きについては(170)(171)の後続句有りのタイプと全く同様である。

(172)では、コソが「天地の神の理なくは」という条件句に付き、特異で例外的なものとして扱う。「逢はず死にせめ」という事柄はあくまでも例外的な一局面で認められるのであって、神の判断があるという詠み手の信ずる状況にはもはや通用しない。詠み手の信念・主張は例外を退ける方へと向かい、「必ず君に逢えるはずだ」というのである。

後続句が言語化されていなくとも、コソの係り結びによって条件が「例外」と表現されることで、裏で用意されている言語主体の主張を、我々は鋭敏に感じ取るわけである。

これら後続句無しのタイプは、仮にコソが無かったら単なる条件文であり、逆接句と受け取ることはできない。コソは（既に出来上がった）逆接句内に入り込むのではない。コソ自身に逆接性を喚起する力が備わっている、ということがここから分かる。

以上のように、仮定条件を例外として示し、「それは自分の考える当の話題の状況には通用しない」と退けることで自らの主張を強めるという表現は、発想としては現代語にも認められる。次の現代語の例は、コソを使っておらず、接続表現によって逆接を示すものであるが、本節の反発的なコソの係り結びと同じ表現意図に基づくと言えよう。

(174) 謙作の心に受けた傷は案外に深かった。それは失恋よりも、人生に対する或る失望を強いられる点でこたえた。(中略)(引用者補足：結婚を)断られるまでも何か好意らしいものを見せられたら彼はまだ満足できた。ところが、それらしいものもまるで見せられずに彼は突き放された。

志賀直哉『暗夜行路』第一 5 (引用は岩波文庫)

(175) 蛾の趨光性のほうには、一体どんな説明をつけるつもりなのだ？(中略) これがもし、ただ一種類だけの蛾の習性だというなら、まだ合点もいく。しかし、約一万種にもおよぶ蛾の、共通した習性だとなると、これはもはや厳然たる一つの法則だと考えるしかない。

安部公房『砂の女』(引用は新潮文庫)

### 3.6.1.2. 比喩的对象

係助詞のコソが比喩的对象を指し、係り結びによって逆接句を構成するという表現が上代に見られることは、木下正俊氏が「逆接の比喩」として指摘したところである（『万葉集語法の研究』 pp.368-376）。以下引用する。

「仁徳紀」の二十二年正月、天皇は庶妹の八田皇女を妃にすることについて磐媛皇后に承諾を乞うた。その天皇の申し出に答えた皇后歌

『衣こそ二重も良き』さ夜床を並べむ君は恐きろかも（紀・四七）

この『 』で囲んだ部分がその比喩に当たる。衣のツマカサネは許されようが、人のツマカサネは許されない、というのである。比喩の内容と中心主題の間に逆接関係が認められる。このようなものを仮に「逆接の比喩」と呼ぼう。（p.369）

氏は続いてこの例について、「AはCだが、BはCでない」という「背向的単純性」の逆接といているが、本論文では反発的逆接の例と考えたい。歌の詠まれた背景からしても、磐媛皇后が天皇に対して、夜床を並べることは許されないと反発していることは明らかである。

この歌では本論文の考えるコソの性質がどのように発揮されているだろうか。

歌の詠み手（皇后）の主張の中心は、係り結びの後続句部分「さ夜床を並べむ君は恐きろかも」（＝女の夜床を二つ並べるというあなたは恐ろしい方よ）にある。これは八田皇女を妃にすることへの非難を表しており、これがコソの使用に先だって、「基準」として詠み手に捉えられている。詠み手はこの主張をいきなり提示するのではなく、まず「衣」を持ち出し、それについて「二重にするのも良い」と一旦認める。しかし、ここで係助詞のコソが使われ、「衣」は、基準とされる事とはまるで別の特異な事物であるとして扱われることとなる。そして、係り結び部分は、中心的话题「女の夜床を二つ並べる」とは全く別問題である、無関係な事柄であるとして退けられる。「二重にする」ということは衣については言えても、夜床については全く通用しないということがコソの特異性によって反発的に主張されている。

下に類例を挙げる。

(176) 常陸なる 浪逆の海の 玉藻こそ 引けば絶えすれ あどか絶えせむ

（常陸の 浪逆の海の 玉藻なら 引けば絶えようが どうして（私たちの仲は）絶えるだろうか）

(177) 柳こそ 伐れば生えすれ<sup>43</sup> 世の人の 恋に死なむを いかにせよとそ

(柳なら 伐れば生えるが この世の人間のわたしが 恋に死にそうなのに どうしろと  
いうのか)

万葉 3491

これらの後続句部分（波線部）は反語表現であり、2.5.2.1 節で述べた反発的逆接の特徴を備えている。後続句で、現実世界で言語主体が巻き込まれる、または深く関わる事態（(176)は二人の仲の不滅、(177)は恋の苦しみ）が詠まれており、それが歌で伝えたいことの核心（コソの使用に先立つ「基準」）である。係り結び部分で別の事柄（二人の仲に対する玉藻、私に対する柳）を引き合いに出した上で、特異的強調のコソによって、核心の事態とはまるで別の問題であり、同様に考えることは許されないと言うのである。

これらの例で引き合いに出される比喩的対象は、その内容からしていかにも突飛であり、「なぞらえられる事物（話題の中心とされる事物）とは別物だ」という方に傾きやすい。内容的に、比喩的対象はもともと特異性のコソの力が発揮されやすいところなのである。上述の例では、内容面に加えて、コソを付けるという文法的手段によって、「基準とはまるで別だ」ということが強調されているのだと考えられる。

このような比喩的対象をコソが承ける例は上代の歌に特有のようである。例を追加するが、どれもこれまでのものと全く同様にしてコソの働きが説明される。

(178) 雪こそは 春日消ゆらめ 心さへ 消え失せたれや 言も通はぬ

(雪ならば 春の日に解けて消えるでしょうが 心までも 消え失せたのですか 音沙汰  
ありません)

万葉 1782

「心さへ 消え失せたれや」は反語で、「心までも（雪と同様に）消えるはずはない」というのである。

(179) …衣こそば それ破れぬれば 継ぎつつも またも逢ふといへ 玉こそば 緒の絶え  
ぬれば くくりつつ またも逢ふといへ またも逢はぬものは 妻にしありけり

---

<sup>43</sup>柳は生命力が強いことを言う。続く 3492 歌では柳の挿し木が容易であることが詠まれている。

(…衣ならば 破れたら 継げば また合うが 玉ならば 緒が切れたら くくっておくと  
また合うが またと逢わないものは 妻であったよ)

万葉 3330

(180) み吉野の 吉野の鮎 鮎こそは 島傍も良き え苦しゑ 水葱の本 芹の本 吾は苦し  
ゑ

((み吉野の) 吉野の鮎 その鮎ならば 島邊も良からうが (私は) 苦しい 水葱の  
本や 芹の本で 私は苦しい)

日本書紀歌謠 126

### 3.6.1.3. 対概念を成す事物

本節では、典型的には「A コソ P、B ハ Q」の形をとり、A と B とが対概念を成し、述  
語の P と Q が対立している場合について見る。

(181) 昔こそ 難波みなかと 言はれけめ 今は都引き 都びにけり

(昔は 難波田舎と 言われたろうが 今は都を引き移して 都会らしくなった)

万葉 312、(77)の再掲

この歌は、全体の構造としては「昔」は「今」の対概念であり、「田舎と言われた」「都ら  
しくなった」という述語の内容上の対立が見られる。これが対比ではなく反発的逆接であ  
ることは既に述べた(2.4.2.1 節)。この主張の中心は後続句「今は都引き都びにけり」に  
あり、「基準」となっている。「昔」のことを話題に出しつつも、特異的強調のコソによって  
基準とは別の事柄とされる。この例でも、係り結び部分は退けられ、「昔」に成り立ってい  
たこと(田舎であったこと)は、もはや今とは無関係なのだといわれるのである。

対概念は、意味的に対照性を持つ組であるから、一方を基準とすれば、その対に当たる  
方はコソによって「基準とまるで異なっている事物」として示されやすい。比喩的対象と  
同じく、ここにはコソが好んで後接するのである。

次の例も上と同様に説明される。

(182) 梓弓 末は寄り寝む まさかこそ 人目を多み 汝を端に置けれ

((梓弓) 将来は寄りそって寝よう この今は 人目が多いので あなたにそっけなくし  
ているが)

万葉 3490

- (183) 我が身こそ 関山越えて ここにあらめ 心は妹に 寄りにしものを  
(私の身は 関山を越えて ここにあらうが 心はあなたに 寄ってしまった)

万葉 3757

中古でも類似の例が見られる。

- (184) 今こそあれ我も 萱はおとこ山さかゆく時もありこしものを  
(今でこそこんだ (老い衰えている) が、私も昔は「男山の坂ゆく」ように、男として栄えてゆく時があったものだったがなあ)

古今 889

- (185) 葦根はふうきは上こそつれなけれ下はえならず思ふ心を  
(葦の根が這い広がる泥地は、上は何も見えない—そのように私は見かけはそっけないですが、下一心では並々ならず思っていることですよ)

拾遺 893

### 3.6.2. コソが係り結び句全体に働く場合

これまでは、コソの区別性が直前の語に働く場合を扱ってきた。上代の例はほとんどこれに当たるが、次は万葉集でコソが係り結び句全体に働いていると思われる例である。

- (186) 人目多み 目こそ 忍ぶれ 少なくも 心の内に 我が思はなくに  
(人目が多いので 逢うことはこらえていますが 並々ならず 心の内に 私は思っています)

万葉 2911、(71)の再掲

係り結び部分で、「愛する人と逢うのを我慢していること」、後続句で「心の中ではずっとその人のことを思っていること」が述べられている。コソが係り結び句全体に働く場合でも、やはり主張の中心たる後続句が「基準」となる。「愛する人と逢ってはいない」と譲歩して認めるものの、コソによって、それは中心的主張からすればたかだか例外的事象に過ぎないと扱われる。「逢っていないこと」を例外として退けることによって、「心の中でも愛が薄れているのでは？」という相手の短絡を否定するのである。

このようにコソが係り結び句全体に働くものは、平安期に入って散見する。

- (187) 中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みてあづかれるなり。  
(中垣こそあるものの、一つの家のようであったので、(隣人は) 自ら望んで (筆者の



家を) 預かったのである。)

土佐日記 55

「一つ家のやうなれば」が基準であり、コソはそこから「中垣あり」を区別している。「中垣がある(家を隔てる物がある)」と認めるが、特異的強調のコソによって、あくまでも基準から逸脱する例外として扱われ、中心的主張を揺るがすに当たらないと退けられるのである。

古今集・源氏物語からさらに例を挙げる。

(188) 山里は物のわびしき事こそあれ世の憂きよりは住みよかりけり

(山里は確かに何かとわびしいことがあるけれど、世の中というもののつらさよりは住みやすいものだよ)

古今 944

「山里は(世の辛さに比べれば)住みやすいものだ」というのが詠み手の中心的主張である。「わびしいことがある」ものの、それはコソによって周辺の例外として扱われ、結論としては「やはり住みやすい」と落ち着くのである。

(189) かの花散里にも、(源氏が) おはし通ふことこそまれなれ、心ぼそくあはれなる御ありさまを、この御陰に隠れてものし給へば、おぼし嘆きたるさまもいとことわりなり。

(あの花散里のお邸でも、(源氏の君が) 通っていらっしゃることはめったにないものの、心細く気の毒な日々をこの(源氏の君の) 御援助によって過ごしていらっしゃるのだから、(源氏の離京を) 嘆いていらっしゃる様子もまったく当然のことである)

源氏 2-5 須磨

源氏自身が花散里の元を訪れることは稀であるが、それでも源氏の力に頼っていることには変わりはない、との文脈である。

### 3.6.3. コソの係り結びによっては示されない反発的逆接

これまで述べてきた、コソによって反発的逆接が生じる原理をまとめよう。

反発的逆接では後続句が中心的主張であり、かつ基準とされる事柄であった。コソは直前の語または係り結び句全体に働き、この基準とまるで別の例外的事柄、無関係な事柄として示し、中心から退ける。ここに逆接の意味が生じるのであった。

反発的逆接のうち、「通常とは異なる心情の表明」、「障害への反抗的行為」はコソの係り結びによっては示されないものであった。それがいかなる事情によるものか、考えてみたい。

まず(190)の例で代表される「通常とは異なる心情の表明」について。2.4.2.2 節でも述べたが、コソを使った「見こそすれ飽かず」という表現は存在しないのであった。

(190) …この川の 絶ゆることなく この山の いや高知らず 水そそく 瀧の都は 見れど  
飽かぬかも

万葉 36、(84)の再掲

ここでは「(瀧の都を) 見る」は言語主体の心情が出来した状況であるが、例外的条件というわけではないし、言語主体にとって退けるべきことでもない。よってコソが「見る」に働く余地は無いと考えられる。

次に(191)のような「障害への反抗的行為」の例について。

(191) 風高く 辺には吹けども 妹がため 袖さへ濡れて 刈れる玉藻そ

(風が空高くから 岸には吹いていましたが あなたのために 袖までも濡れて 刈った玉藻ですよ)

万葉 782、(89)の再掲

仮にコソが「風高く辺には吹く」に働くとすると、この部分が中心的主張とは無関係の、退けられる事柄となる。しかし、これは言語主体にとって障害ではあるものの、無関係な事柄ではない。よってコソが「風高く辺には吹く」を強調して逆接となることはない。

### 3.7. おわりに

本章は、コソの使用に先だって、言語主体の内、或る事物が「基準」として設けられていると考えた。そして、コソの強調性を、基準とひととき異なるものとして扱う「特異的強調」と見た。このコソの働きによって逆接性がもたらされる仕組みを考えてきたのである。

まず意外的逆接が生じる原理について。これは、後続句の眼前事実が推論の出発点であり、そこから言語主体によって推論される原因が「基準」となっている。実際の原因はコ

ソによって、その推論される原因とはまるで異なるものとして提示される。自らの推論が失敗することによって言語主体は意外と感じるわけである。

次に反発的逆接が生じる原理について。これは後続句によって表される中心的主張が基準となっていた。この中心から外れる内容を、譲歩して一応認めるも、コソによって、それは特異で全く別の事柄であるという。コソの係り結び部分を、中心的主張とは無関係な事柄として示し、退けるのである。結果として、自らの中心的主張は揺るぎないものとして強く示されるわけである。

本論文は《どの対象に》《何を基準として》《いかにして》コソの特異的強調が働くかを考え、コソの係り結びが二つの異なる種類の逆接性に結びつく原理を説明した。

最後に 3.1 節で指摘した先行研究の四つの難点について、本論文がいかに答えるかについて述べ、本章を締めくくることとしたい。

第一点。先行研究で、コソの係り結びの逆接的意味の分類をせず、「対立」や「対比」という単質なものと捉えていた点について。本論文では、コソの係り結びの表す逆接的意味を意外的逆接と反発的逆接に大きく二分した。これらは 2.5 節で指摘したように言語的特徴によって明確に区別できるものであり、この分類は妥当性を持つと考えられる。本論文の考える逆接的意味は、当然「AコソB、非Aハ非B」といった単一の図式の枠組みに収まらない。

第二点。「A—B 非A—非B」という構造は、テ形や連用形による並列的な接続としても表されるのだから、先行研究の考える「AコソB、非Aハ非B」という構造が逆接関係になるというのは自明ではなかったのであった。

本論文は先行研究とは異なり、コソの係り結びは対比的構造を表さないと考える。意外的逆接と反発的逆接とは、「期待に反する」という点で逆接関係となるのであって、並列的な接続と紛れる余地はない。

第三点。コソの語性を、先行研究のように「(結合) 排他」、「選抜」、「特立」と考えるとすると、限定の助詞でも同様の議論が可能であった。「AダケB」は、その限定性から「非Aハ非B」に結びつくとは言えるものの、逆接句を構成するわけではない。同様に考える

と、コソの排他性からは、その係り結びの逆接性が導かれないのだった。

本論文では、コソの使用に先立って、ある基準が言語主体の内では設けられていると考える。コソはそれが付く対象を、この基準から特異に区別するのである。一方、現代語のダケ、古代語のノミ・バカリといった限定の助詞は、コソとは違い、基準が設けられているわけではない。本論文のように考えることで、係助詞のコソの強調性は、限定の助詞の性質と明瞭に区別されるのである。

第四点。石田氏はコソの機能を「その附着した方を揚げて他を抑へる作用」といい、大野氏は「コソという強い光線をあてると、あてられたものそのものがはっきりと姿を顕在化する。と同時に影（その反対の観念）もまたその背後に強く浮き上がってくる」と述べ、そこから逆接性を説く。一方、反発的逆接の用例を見ると、「抑えられた他」や大野氏のいう「影」にあたる後続句の方に、むしろ主張の中心があるのであった。彼らの論ではこれはなぜかが全く説明できない。

本論文では、コソの使用に先立って設けられる「基準」は、後続句に関わると考えた。そして反発的逆接では後続句の中心的主張が基準となるのだった。コソの係り結びの内容は、特異な事としてこの基準から退けられるのである。本論文はどこに「基準」が存するかに着目しつつ、コソの係り結びの逆接性の実態を説明したのである。

次章では、逆接句を形成する働きを持つコソと比較して、助詞シの語性について考えることとする。コソとシとが対をなす助詞であるという見方を取るものとして、大野晋(1993)がある。大野氏は

さきに掲げた係助詞の表を見ると、コソだけが一對をなす相手を欠いている。コソの特性は、最も古くは選抜したものを題目語に立て、文末には多く逆接の条件句を形成することにあった。したがって、もしコソに相手があるとすれば、それは順接の条件句を導くことを役目とする助詞だろうと推測される。(p.164、下線部は引用者による)という動機のもと、逆接を導くコソと、順接を導くシを対照させて論じた。大野氏のいう係助詞の表は次の図 6 であり(p.42)、氏は丸印の箇所に、「(シ)」を加えている(p.170)。

表 6 大野晋(1993)の係助詞の区分

	疑問詞を承ける	疑問詞を承けない	
終止は自由	モ	ハ	題目の提示
已然形終止	○	コソ	
連体形終止	ゾ	ナム	陳述の変容
	カ	ヤ	

本論文は、係助詞の全体の区分について<sup>44</sup>大野氏の考えには問題があると考え、シとコソが対照的な性質を持つ助詞であることを—大野氏とは異なった見方によって—示したいと思う。

---

<sup>44</sup> 大野氏の提示した係り結びの体系の主要な問題点として、①「疑問詞を承ける」、「新情報を承ける」、「未知な事物を承ける」といったカテゴリーの異なるものを同一視していること、②新情報の題目といった矛盾した概念を認めること、などがある。野村剛史(2001)、金水敏(1994)、青木伶子(1994)も参照のこと。

## 4. シの語性

### 4.1. はじめに

本章の考察対象は、主に上代から中古にかけて見られる助詞シである。これは上代では盛んに使用され、その単独用法<sup>45</sup>は万葉集中に 419 例存在する。しかし、従来この語は文の文法的意味にあまり寄与してないと見られていた。歌学ではシは休め辞などと言われ、所詮調子を整える程度の語と見なされていたようである。江戸期、本居宣長も「やすめ辞のし」と呼んでいる。宣長の影響を受けたと思われる山田孝雄は、シを間投助詞に入れ、「これは頗強力なる調子を文句に与ふるものなり。」(『日本文法論』p.687) と言うが、これは文法的規定としては希薄に過ぎるものである。シは現在の文法論では副助詞に入れられることが多いと思うが、実質的にはこれらと相違ない見方がとられているように思われる。すなわち、シの品詞分類がなんであれ、その実態は「休め辞」的把握なのではないだろうか。

シと同じく強意・指定強調とされる係助詞のゾやコソは、係り結びという構造上の際立った変化を引き起こす。係り結びとは「大がかりな文法装置」(野村剛史 2001 : 27) であり、中でも助詞コソは、逆接句を形成するという際だった特徴を有し、ここからその性質を考えることができた。対してシは係り結びを形成するわけではなく、述語活用形との形態的な呼応は見られない。本論文は、助詞シについて強調の仕方・語の性質を求め、コソと比較・対照したいのであるが、その性質がいかにして求められるのか、まずはその方法について述べねばならない。

### 4.2. 方法

シは種々の語に付くというものの、現代語の間投助詞ネ・ヨ・サなどと異なり、文中に全く自由に現れるわけではない。『時代別国語大辞典 上代編』で、

「用法上からみても、かなり明瞭な固定化が見られ、単文ならば形容詞や、オモホユ・シノハユなどの自発や推量ラシで結ばれる文中にあらわれることが多く、従属節中に

---

<sup>45</sup> シモ・シコソのように係助詞と複合しないもの。

用いられたものは、そのほとんどが順接条件の場合に限られるようである。」(助詞「し」の項)

と記述されるように、シの生起位置は上代で既に偏りがあった。万葉集を見ると、シの用例 419 例中、4 割強の 182 例が「…シ…ナラバ」、「…シ…ナレバ」の条件句<sup>46</sup>中に現れている。

これは時代が下ると一層顕著になり、中古期ではシの単独用法は順接条件句中にはほぼ限られる。これは夙に江戸期の文法家が注目していた事実であり、例えば富士谷成章は『あゆひ抄』《し家》で「中昔より後はかならず〔ぞ〕〔は〕〔こそ〕〔か〕〔も〕などの脚結を継ぎ、さらぬは下に〔何ば〕と受けたり」<sup>47</sup>と述べている。本居宣長も『詞の玉緒』で古今集から多数の和歌を引き、「大方やすめ辞のしは。右の歌どものごとく。いづれも皆下にばと受たり。」<sup>48</sup>と指摘している。

古代語のシに本当に語調を整える程度の働きしかないのならば、現代語の間投助詞ネ・ヨ・サのように際限無く（無制限に）使われてもよさそうなものであるが、実際にはその使用環境は固定の一途をたどったのである。

表 7 は万葉集中 419 例のシの分布（出現の仕方）を、単文中／複文中ごとに、割合とともに示したものである。

表 7 万葉集におけるシの分布

単文中	述語の形式	例数	単文中に 占める割合
	ユ	61	27.23%
	形容詞	43	19.20%
	ラシ	42	18.75%
	ム	28	12.50%

<sup>46</sup> 「条件句」という用語を「P ならば」「P なれば」のような条件表現を指すのに使用する。「条件文」は「P ならば Q」「P なれば Q」全体を指す。

<sup>47</sup> 『あゆひ抄新注』（風間書房）、p.213。

<sup>48</sup> 『本居宣長全集』（筑摩書房）、第五巻、p.211-2。

ケリ	13	5.80%
裸の動詞	10	4.46%
モガモ	5	2.23%
ズ	3	1.34%
ツ	3	1.34%
ヌ	3	1.34%
ベシ	3	1.34%
ラム	2	0.89%
ケム	2	0.89%
禁止ナ	2	0.89%
その他	4	1.79%
単文合計	224	100.00%

複文中	複文の形式	例数	複文中に 占める割 合
	已然形＋バ	112	57.43%
	未然形＋バ	70	35.90%
	ズハ	5	2.56%
	形容詞連用 形＋ハ	4	2.05%
	連用形＋テ	2	1.03%
	ツツ	1	0.51%
	連体句	1	0.51%
	複文合計	195	100.00%

単文での述語の種類への偏り、そして、順接条件句でよく使われる、というシの分布の特徴



は、シの性質に何らかの関係があり、だからこそそれを調べる上で有効な手がかりとなると考えられる。本論文は、シがいかなる性質の助詞であるかを次節で措定する。そして、単文で用例数の多い「…シ…形容詞」、「…シ…ユ」、「…シ…ラシ」の形、また、条件文の「…シ…ナラバ」、「…シ…ナレバ」の形をとりあげ、そこにおいて本論文の提示したシの性質を確かめていく。さらに、これらの述語形式は特有の構文を形成することがあり、そこではシの行っていることが一層明らかに窺える。具体的には「…ハアレド…シ…形容詞」構文、「A（ヲ）見レバ B シ思ホユ」構文、「A シ B ナラバ A’ ハ B ナラズトモヨシ」構文などであり、これらも併せて観察の対象としたい。本章では資料として主に万葉集を用いる。

#### 4.3. シの語性の措定

富士谷成章は『あゆひ抄』《し家》で

「おほよそ、〔し〕といふ脚結は、皆、然の心あり。上つ代に、汝を「し」と言へるも、その物を正面に見て言ふ心あり。脚結となりてもこの心を得て「ソノ方ニシテ」と言ふ心をもちて見るべし。」<sup>49</sup>

と説く。成章は助詞シの性質を、対称の代名詞のシに通うものと見なし、あたかも相手を目の前にして見るがごときものと捉えている。これは助詞の性質を空間的比喻で巧みにあらわした、成章ならではの説明である。

本論文では、この成章の記述を参考にし、シの語性を、「一つの対象を重大なこととして受けとめ、専らそのものに目を向ける」ものとする。このようにシは唯一つを関心の的として指すが、その一方で、他の事物についてはどうでもいい、取るに足らないものとして扱う。他を排斥・否定するのではなく、ただ素通りする。言うなれば、他へは等閑視の態度が取られるのである。

このような等閑視に関して、他への意識の差に応じて二つのレベルを区別することができる。第一のレベルは、他の事物が意識すらされず、言語主体は単にそして端的に、或る一つのものを見ている状態である。これはちょうど、無地の背景の中で対象が浮かび上が

---

<sup>49</sup> 『あゆひ抄新注』（風間書房）、p.212-3。

っているようなものである。第二のレベルは、他が言語化される程度には意識にのぼっているが、それには格別関心が払われない状態である。他に言及することがあるとしても、それは所詮言語主体の注目に値しない。言語主体の注目するそのものと他との間には、「見え」の強弱の差とでも言うべきグラデーションが存するのである。

本論文では以上のようにシの持つ性質を「そのものへの重大視、他への等閑視」と見る。次節以降でこのシの語性を実際に確かめることとしたい。

#### 4.4. 単文中のシ

##### 4.4.1. …シ…形容詞

##### 4.4.1.1. 「…シ…形容詞」における等閑視の第一のレベル

単文の形容詞文（述語が形容詞であるもの）に現れるシは万葉集中43例と多く、形容詞とシとのつながりの深さが窺える。

初めに、形容詞を性質によって①情意形容詞、②情態形容詞、③評価・価値付けの形容詞、の三つに大きく分け、各々における助詞シの出現の仕方、さらにシの性質について見ることとする。

まず、情意形容詞について。明らかに情意を表すと認められる形容詞は万葉集に26例あり、「…シ…形容詞」のうち約6割を占める。語彙別の内訳は次のようになっている。

表 8 情意形容詞の内訳

情意形容 詞の語彙	例数
悲し	8
恨めし	5
悔し	4
惜し	3
欲し	3
ともし	2

この種のものは以下のように、言語主体（歌の詠み手）の情意・心情を表す。

- (192) 朝には 海辺にあさりし 夕されば 大和へ越ゆる 雁しとししも（雁が羨ましい）

万葉 954

- (193) さ雄鹿の 心相思ふ 秋萩の しぐれの降るに 散らくし惜しも（しぐれが降るせいで 散るのが惜しい）

万葉 2094

- (194) …梓弓 弓腹振り起こし しのぎ羽を 二つ手挟み 放ちけむ 人し悔しも（その人が 憎らしい） 恋ふらく思へば

万葉 3302

- (195) 浦ぶちに 伏したる君を 今日今日と 来むと待つらむ 妻し悲しも（妻が哀れだ）

万葉 3342

- (196) くへ越しに 麦食む小馬の はつはつに 相見し児らし あやにかなしも（ちょっと だけ 逢った娘が 無性に愛しい）

万葉 3537

- (197) 耳無の 池し恨めし（耳無の 池は恨めしい） 我妹子が 来つつ潜かば 水は涸れ なむ

万葉 3788

シの承ける語句を文法的に見ると、(192)-(197)のように主語であることがほとんどである。それ以外は

- (198) 我が背子を いづち行かめと さき竹の そがひに寝しく 今し悔しも（今では残念だ）

万葉 1412

- (199) 橘は 花にも実にも 見つれども いや時じくに なほし見が欲し（ますます見たい）

万葉 4112

のように副詞を承けるものが若干見られるだけである。

(192)-(197)においてシの指す主語は、主体の情意が向かう対象を示している。(192)をそのまま訳すと「雁がうらやましい」となるが、それを「(私は) 雁をうらやましく思う」と

パラフレーズするならば、情意形容詞文の主語が情意の対象であることが見えやすいだろう。またこのことは、

(200) …明日香の 古き都は 山高み 川とほしろし 春の日は 山し見が欲し…

万葉 324

の例で一層明らかである。この「山」はいわゆる対象語で、「山が見たい」と主格を用いても「山を見たい」と目的格を用いても訳されるのである。

このように、情意の対象をシが標示することで、「言語主体の情意が、専ら其の対象に収斂する」ということが表される。これは「一つの対象を重大なこととして受けとめ、専らそのものに目を向ける」というシの語性と符合する。(192)-(197)のような例は、「他の事物が意識すらされず、言語主体は単にそして端的に、或る一つのものを見ている」という、前述の第一のレベルに属する。たとえば(192)では「雁がうらやましい」というが、別段他の物が意識にのぼっているわけではなかろう。まして「(雁以外の) 他はうらやましくない」と、他を否定・排除しているわけではない。これは唯、雁に関しての言及である。(193)も、「秋萩がしぐれで散るのが惜しい」というが、「他のものは惜しくない」「散った方がよい」などと述べているわけではない。言語主体の情意に対し、唯ひとつの対象物が結びついていだけで、他は念頭に上がっていないのである。

次に情態形容詞が述語をなすものに移ろう。以下はその全例（7例）である。情意か情態かやや不明瞭なものもここに挙げてある。

(201) …秋の夜は 川しさやけし（川音がすがすがしい） 朝雲に 鶴は乱れ 夕霧に かはづは騒く…

万葉 324

(202) 蒸し衾 なごやが下に 伏せれども 妹とし寝ねば 肌し寒しも（あなたと寝ないから肌が冷たい）

万葉 524

(203) つぎねふ 山背道を 他夫の 馬より行くに 己夫し 徒歩より行けば 見るごとに 音のみし泣かゆ そこ思ふに 心し痛し たらちねの 母が形見と 我が持てる まそみ鏡に 蜻蛉巾 負ひ並め持ちて 馬買へ我が背

万葉 3314

(204) …玉梓の 道行く我は 白雲の たなびく山を 岩根踏み 越え隔りなば 恋しけく

日の長けむそ そこ思へば 心し痛し ほととぎす 声にあへ貫く 玉にもが 手に巻き持ちて 朝夕に 見つつ行かむを 置きて行かば惜し…

万葉 4006

(205) …語り放け 見放くる人目 ともしみと 思ひし繁し…

(語り合い 慰め合う人が 少ないので 物思いをすることが絶えない)

万葉 4154

(206) うつせみは 恋を繁みと 春まけて 思ひ繁けば 引き攀ぢて 折りも折らずも 見るごとに 心和ぎむと 繁山の 谷辺に生ふる 山吹を やどに引き植ゑて 朝露に にほへる花を 見るごとに 思ひは止まず 恋し繁しも

万葉 4185

(207) いつはなも 恋ひずありとは あらねども うたてこのころ 恋し繁しも (恋しく思うことが絶えない)

万葉 2877

個々の検討を行う。

(202)は肌の冷たさを述べるが、その原因には愛する者の欠如があり、「寒し」とは知覚と情意とが緬い交ぜになった有り様だろう。

(203)・(204)は「～を思うと心が痛い」と、明らかに言語主体の内面心理に関わる。「心し痛し」全体で情意的表現を成すと考えれば、その情意が向かう対象は「…見るごとに 音のみし泣かゆ」((203)の場合)や「…恋しけく 日の長けむそ」((204)の場合)という事柄となろう。とすればこれらは先の情意形容詞の場合と同様に扱われるわけである。

(205)-(207)では、「繁し」の主語は「心」や「恋」であり、やはり「{心・恋} し繁し」全体が言語主体の心情の様子を表している。(203)-(207)は、情意表現が「主語+シ+形容詞」という文全体で具現され、そのためシは統語上情意の対象を指さないのだが、内容的には先の情意形容詞の場合に準じるものと考えられる。

続いて評価・価値付けの形容詞である。「良(よ)し」及びその古形の「えし」がこれに該当する。この「…し…良し」の類は万葉集中に10例見られる。いくつかを示す。

(208) 梓弓 爪弾く夜音の 遠音にも 君の御幸を 聞かくし良しも

万葉 531

(209) 玉津島 見てし良けくも 我はなし (玉津島を見てもいい気分には私はならない) 都

に行きて 恋ひまく思へば

万葉 1217

(210) 春山の 咲きのををりに 春菜摘む 妹が白紐 見らくし良しも

万葉 1421

(211) さ雄鹿の 伏すや草むら 見え<sup>え</sup>ずとも 児ろが金門よ 行かくし良しも

万葉 3530

(209)に挙げた1例を除き、9例が「ク語法+シ…良しも」の形を取っており、「ク語法によって表された事柄に対して、言語主体の肯定的な評価・価値判断を行う」という表現形式として定型化している。

ここでの「良し」は客観的に価値を定めるというよりも、言語主体の快なる感情に連続するような、情意性を帯びたものである。今、(208)、(210)、(211)について、小学館新全集本と岩波新大系本の現代語訳を引いてみよう（下線は引用者による）。

(208)

新全集：梓弓を 爪弾き鳴らす夜中の弦音のように 遠くからでも 君のお出ましのお噂  
を 聞くのは嬉しゅうございます

新大系：梓弓を爪弾く夜中の弦音が遠く響いて来るように、遠くからでも大君のお出  
ましの御噂を聞くことは喜ばしいことです

(210)

新全集：春山の 咲き乱れている辺りで 春菜を摘んでいる 妻の白い紐を 見るのはい  
い気分だ

新大系：春山のいっばいに花開くあたりで春菜を摘んでいる、妻の白い紐を見るのは  
まことに快い。

(211)：

新全集：雄鹿の 伏す草群のように 姿は見えなくても あの娘の家の前を 行くのはう  
れしい

新大系：鹿が草むらに伏すように、姿は見えなくても、あの児の家の門の前を通るの  
は気分がいい。

(208)、(210)、(211)のような「良し」は、「嬉しい」「喜ばしい」「快い」といった、情意形容詞に相当接近している。そして「…し…良し」は、「言語主体にとって望ましきもの・価

値あるものとして唯一つの事柄が注視されている」ということを表す。他のものを無価値なものとして否定するわけではない。言語主体にとっては、あくまで一つのものしか（良いものとして）見えていないのである。

ここまで、①情意形容詞、②情態形容詞、③評価・価値付けの形容詞に分け、シの振る舞いを見てきた。これらの形容詞は概して情意性が強く、言語主体の内面に深く関わるものであった。「(山) 高し」のような典型的な情態形容詞がシの述語に来ることはほぼないと言ってよいのである。

「妻悲しも」のような情意形容詞述語の例では、その主語「妻」が言語主体の情意が向かう対象である。言語主体の情意が高まると、主体が「妻」に一心に目を向け、主体の内面がただそのことで占められる、ということが起こるだろう。主体と対象（妻）が一对一で直裁につながっていることを表現したい、という欲求に対して、シを用いた表現は適したものであったに違いない。これに対して「山高し」のような情態形容詞述語の例はどうか。「高し」は、「山」の数ある属性（例えば険し、近しなど）のうちの一つを述べたものに過ぎない。主語の「山」とそれに結びつく属性は、一对多の関係なのであり、しかも、情意形容詞とは違って対象（山）と言語主体の関わりは特に感じられない。この文が「主体が山に対して一心に目を向ける」ということを表すとは考えられない。このような事情から、専らそのものに目を向ける性質のシを使った、「山し高し」という文は非常に成り立ちにくいのだと考えられる。

#### 4.4.1.2. 「…ハアレド…シ…形容詞」構文にみる等閑視の第二のレベル

ここまで形容詞文中のシの現れ、及びその語性について見てきた。後者については「他の事物が意識すらされない」という、シの等閑視の第一のレベルに関わるものを取り上げた。次に「他が言語化される程度には意識にのぼっているが、それには格別関心が払われない」という第二のレベルが認められるものを取り上げよう。

第二のレベルは「他」が言語化されるわけであるから、構文・形式の上でそれと指摘しやすく、また、表現上定着し一種のパターンを成すこともあるのである。ここで注目した

いのは、「…はともかくとして」というように訳される「…ハアレド（アレドモ）」<sup>50</sup>の従属句を伴う文である。

万葉集に見いだされる「…ハアレド」は5例である。下に挙げる(212)・(213)はシが関与しない例。(214)・(216)の3例は「…シ…形容詞+モ」と共起する形であり、このような明確なパターンにおいては、シの働きが見えやすいのではないかと期待される。

(212) 妹とありし 時はあれども 別れては 衣手寒き ものにそありける

(妻と一緒に 時はそうでもなかったが 別れてみると 旅衣とは冷たいものであったよ)

万葉 3591

(213) …あやにともしみ しのひつつ 遊ぶ盛りを 天皇の 食す国なれば 命持ち 立ち別れなば 後れたる 君はあれども 玉梓の 道行く我は 白雲の たなびく山を 岩根踏み 越え隔りなば 恋しけく 日の長けむそ…

(留守番の君はともかくとして (玉梓の) 旅をするわたしは 白雲の たなびく山を 岩根を踏み 越えて離れたら 恋しく思うことが 幾日も続くことだろう)

万葉 4006

(214) 玉くしげ 覆ふをやすみ 明けていなば 君が名はあれど 我が名し惜しも

((玉くしげ) 覆い隠すのはたやすいと 明けてから帰ったら あなたの名はともかく わたしの名が惜しいことです)

万葉 93

(215) 故郷の 飛鳥はあれど あをによし 奈良の飛鳥を 見らくし良しも

(故郷の 飛鳥の本元興寺はともかくとして (あをによし) 奈良の飛鳥の新元興寺を 見るのはよいものだ)

万葉 992

(216) 筑波嶺の 新桑繭の 衣はあれど 君が御衣し あやに着欲しも

(筑波嶺の 新桑繭の 衣はともかくも あなたの御衣が 無性に着たいよ)

万葉 3350

---

<sup>50</sup> 以下、簡単のために「…アレドモ」の形も含めて「…アレド」と記すこととする。



これら「…ハアレド」は、事物の存在を述べるのではなく、現代語で「…はともかくとして」に当たるような、おおむね判断留保とでも言える表現である。たとえば(214)の「君が名はあれど」では、「君の名」は惜しいと言うわけではもちろんないが、かといって惜しくないと言うわけでもない。「君の名」がどうこうと、何ら積極的に述べてはいない。いわば「惜しい」「惜しくない」の両極の間で宙ぶらりんとなっている言明なのである。「あなたの名はともかく」（新全集訳）のように、判断を差し控える言い回しと考えられる。

「…ハアレド」構文の先行研究については、特に

(217) 陸奥はいつくはあれど塩釜の浦こぐ舟の綱手かなしも

古今 1088

の歌の解釈を巡って多くの論考があるが、山口堯二（2000）が「…ハアレド」構文を、それと関連した対比構文と共に論じており注目される。

山口論文は、古代語「あり」には具体的実質的な意味を臚化する用法があるとして、「…はあれど」型、「…しもあれ」型、「…こそあれ」型、「…だにあるを」型、「…さへあるに」型といった各複文構造における「あり」の用法を検討したものである。

山口論文では「A はあれど B」というような A と B の対比性について、

…複文両句の意味関係を探れば、前句の「あり」が暗示する意味と、後句の述語ないし述語相当である形容詞などが意味する状態や評価との間には、いずれも普通と高度と言えるような程度差において、両句の状態や評価が対比的であるという共通点が見出せよう。（山口堯二（2000：179）。下線強調は引用者による）

と言われる。たとえば

(218) 雁なきて菊の花さく秋はあれど春の海辺にすみよしの浜

伊勢物語 68 段

の例は、

…前句の「雁なきて菊の花さく秋はあれど」も、一般的な普通の状態・評価を担い、後句の「春の海辺にすみよしの浜」の住み良さこそ、取り立てて言うべき特殊な高度の状態であり、真に評価できるものとして対比されていると言えよう。（同、p.180）

と分析される。

そして、「…はあれど」型に見る「あり」の臚化用法の結論として、以下のように述べられるのである。

後句との類義性の範囲内で不定的でもある、「あり」の漠然とした暗示的用法は、後句の事態を際立たせるための手段として、前句の事柄はどちらかと言えば末梢的であり、問題外であることをも併せて暗示しようとする表現態度の所産と見てよい。…この種の「あり」の意味作用の特徴は、そのような表現態度のもとに、具体的実質的な意味の明示を避けてその述語としての表現を臙化している点にこそ見出せるのである。(同、p.183。下線強調は引用者による)

上記のような山口論文の主張を踏まえ、改めて(214)・(216)の「…ハアレド…シ…形容詞」という例を眺めるならば、「他が言語化される程度には意識にのぼっているが、それには格別関心が払われない」というシの等閑視の第二のレベルをそこに認めることができるだろう。

すなわち、(214)で主体の関心は専らシの指す「我が名」に向けられるのであり、他である「君が名」は一応意識にはのぼるものの、取り立てて関心の対象とはならない。山口氏の言葉を借りるならば、「我が名」に比べれば「君が名」は所詮「普通」の程度（平凡と言ってもいいだろう）に過ぎないからである。その「君が名」を「…はあれど」と臙化することで、それが「末梢的であり、問題外である」ということが暗示される。そして、この前句は、後句である「我が名し惜しも」を「際立たせるための手段」として働くのである。

このように、シの、他への等閑視の性質は、「…ハアレド」構文の判断保留・臙化的な表現性と丁度適合するものであった。万葉集の5例の「…ハアレド」構文のうち、3例が「…シ…形容詞」と続くのは、シと当該構文との親和性によるものと考えられる。

#### 4.4.2. …シ…ユ

##### 4.4.2.1. 「…シ…ユ」における等閑視の第一のレベル

まず「…シ…ユ」の述語別の例数を示す。

表 9 …ユ述語の内訳

…ユ述語の語彙	例数
思ほゆ	32
泣かゆ	13
見ゆ	13
偲はゆ	3

「泣かゆ」は全例が「音のみし泣かゆ」の形である。「見ゆ」は「夢にし見ゆる」が10例、「…し面影に見ゆ」が3例。「泣かゆ」「見ゆ」は固定的表現に限って使われていると言える。

本節では、「…し思ほゆ」「…し偲はゆ」の文において、シの承ける語句がいかなる類のものか、そしてシがいかなる働きをしているかを見ることとする。

これらが述語となると、「…シ+形容詞」の場合と同様、シの承ける語はほとんどが主語であり、全体として「(言語主体にとって) ある対象のことが自然と思われる、偲ばれる」ということが述べられている。以下に「…し思ほゆ」「…し偲はゆ」を1例ずつ挙げる。

- (219) 葦辺行く 鴨の羽がひに 霜降りて 寒き夕は 大和し思ほゆ (寒い晩には大和が思われる)

万葉 64

- (220) 大伴の 高師の浜の 松が根を 枕き寝れど 家し偲はゆ (家(の妻)のことが偲ばれる)

万葉 66

この例外と思われるものは以下の3例である。

- (221) 雲隠り 鳴くなる雁の 行きて居む 秋田の穂立 繁くし思ほゆ (秋田の穂立のようにしきりに思われる)

万葉 1567

- (222) 暁の 夢に見えつつ 梶島の 磯越す波の しきてし思ほゆ (磯を越す波のようにしきりに思われる)

万葉 1729

- (223) 春過ぎて 夏来向かへば あしひきの 山呼びとよめ さ夜中に 鳴くほととぎす 初  
声を 聞けばなつかし あやめ草 花橘を 貫き交へ かづらくまでに 里とよめ 鳴き渡  
れども なほし思ほゆ (里を響かせ鳴き渡っても やはり心惹かれる)

万葉 4180

これらのように、シが主語を承けていないものが僅かにあるものの、ほとんどは「主語＋シ＋思ほゆ（偲はゆ）」という形をとるのである。とすれば、「…シ＋情意形容詞」で「言語主体の情意が、専ら其の対象に収斂する」ということが表されたのと並行的に、「…シ＋思ほゆ（偲はゆ）」では「言語主体の思いが、自然と一つの対象に収斂する」ということが表されると言えるだろう。

実際、

- (224) 玉敷きて 待たましよりは たけそかに 来たる今夜し 楽しく思ほゆ (突然にやって来た今夜が楽しく思われる)

万葉 1015

- (225) 婦負の野の すすき押し並べ 降る雪に 宿借る今日し かなしく思ほゆ (雪の中で宿を借りる今日が悲しく思われる)

万葉 4016

などは、「今夜し楽し」、「今日しかなし」といった情意形容詞述語文とほぼ相違ない（情意の出来が自然的であるか否かを除いては）。

ただ、ほとんどの「…シ＋思ほゆ」においては、情意形容詞が共起することはない。

- (226) 葦辺行く 鴨の羽がひに 霜降りて 寒き夕は 大和し思ほゆ

万葉 64、(219)の再掲

- (227) 阿倍の島 鶺鴒の住む磯に 寄する波 間なくこのころ 大和し思ほゆ

万葉 359

- (228) 笠なみと 人には言ひて 雨障み 留まりし君が 姿し思ほゆ

万葉 2684

- (229) やすみしし 我が大君の 敷きませる 国の中には 都し思ほゆ

万葉 329

- (230) 香島より 熊来をさして 漕ぐ舟の 梶取る間なく 都し思ほゆ

万葉 4027

これらでは、「ある対象のことが思われる」と言われている。それが印象深いものであるから、自然と思ひ起こされるのであろうが、いかなる意味で印象深いかは、語られないことの方が多いのである。

心中が一つのことではいっばいである、自然とそのものに心が向くという、この心の有り様は、特定の情意に分化する以前の、原初的な意味での「関心」と言えるだろう。シはその関心がただ一つに向かう先を指し示すのである。

#### 4.4.2.2. 「A(ヲ) 見レバ B シ思ホユ」構文にみる等閑視の第二のレベル

先に、「…ハアレド…シ…形容詞」という構文パターンを観察することで、シの等閑視の第二のレベルをそこに確かめた。ユ述語と関わるものとしてここで取り上げるのは「A(ヲ) 見レバ B シ思ホユ」という構文である。

##### ● …(ヲ) 見レバ…シ思ホユ (5例)

(231) 大君の 遠の朝廷と あり通ふ 島門を見れば 神代し思ほゆ

(大君の 遠方の政庁として 常に行き通う 海峡を見ると 神代のことが思われる)

万葉 304

(232) 足柄の 箱根飛び越え 行く鶴の ともしき見れば 大和し思ほゆ

(足柄の 箱根の山を飛び越えて 行く鶴の 羨ましい姿を見ると 大和のことが思われる)

万葉 1175

(233) 伊香山 野辺に咲きたる 萩見れば 君が家なる 尾花し思ほゆ

(伊香山の 野辺に咲いている 萩を見ると あなたの家の尾花が思われる)

万葉 1533

(234) 勝鹿の 真間の井を見れば 立ち平し 水汲ましけむ 手児名し思ほゆ

(葛飾の真間の井を見ると、立ちならして水を汲んだという手児名のことが思われる)

万葉 1808

(235) 梅の花 取り持ちて見れば 我がやどの 柳の眉し 思ほゆるかも

(梅の花を手にとって見ると我が家の庭の柳眉が思われるよ)

万葉 1853

これに類するものとして、「A(ヲ) 見ルゴトニ B シ思ホユ」の形がある。

● A (ヲ) 見ルゴトニ B シ思ホユ (3例)

(236) 葦辺行く 雁の翼を 見るごとに 君が帯ばしし 投矢し思ほゆ

(葦辺を飛び行く 雁の翼を 見るたびに 君の挿しておられた 投矢が思い出される)

万葉 3345

(237) ぬばたまの 飛驒の大黒 見るごとに 巨勢の小黒し 思ほゆるかも

((ぬばたまの) 飛驒の大黒を 見るたびに 巨勢の小黒が 思い出される)

万葉 3844

(238) 移り行く 時見るごとに 心痛く 昔の人し 思ほゆるかも

(移り行く 時の流れを見るたびに 胸が痛く 昔の人のことが 思い出されるよ)

万葉 4483

これらの表現は、「Aは現在存在する事物であり、言語主体は現在もしくは日常的にそれを見ている。そのAが機縁となって、時間的あるいは空間的に遠く、今、眼の前に存在しないBへ自然と心が向く」という類型をなしている。

「Bシ思ホユ」という表現として直接述べられるように、主体の関心に上がっているのは、シの指すBそのものである。しかもBへの関心の注ぎ方は、今見えているAに比べても甚だしい。(233)は、題詞に「笠朝臣金村伊香山作歌二首」とあり、作歌時点で伊香山の萩を見ている。しかし当の関心は、今ここには無い「君が家なる尾花」へと向かう。自然とそちらに心が向くのである。(234)では「勝鹿の真間の井」それ自体が歌の詠み手にとって重要なのではない。そこから想起される今は亡き手児名が、思いの核を占めるのである。(236)は飛んでゆく雁の翼から、今は亡き愛する君のつけていた投矢を連想するというもの。連想される投矢の方に主眼があることは言うまでもない。

すなわち、言語主体はある対象Aを見るが、主体の主たる関心はそこにとどまらず、むしろBの方へと向かう。現実に見えるAを否定するわけでは決して無いが、より重大な、別のBに思いを馳せるのである<sup>51</sup>。このBを重大視し、同時に(Aを含む)他の物を等閑視的に扱う。シの性質はこのように発揮されているのである。

<sup>51</sup> 「思ほゆ」とユ述語であることにも改めて注意すべきであろう。どうしてもBへと心が向いてしまう、それほどBは主体にとって重大なものなのである。

#### 4.4.3. …シ…ラシ

以下では「…シ…ラシ」という形の中にシの性質を見るわけであるが、シを含む例に入る前に、助動詞ラシの意味記述について優れた見解を打ち出した大鹿薫久（1997）を引きたい。

大鹿氏は、根拠を伴う「～らし」文を整理し、「～らし」と把握された事態 A と根拠になる事態 B との間に「A が原因で、B が結果」という関係の成り立つことを見る。ここから、氏は『らし』は、眼前に立ち現れた事態の元となる事態を表しているのである（p.29）と主張する。さらに、「らし」が疑問文の中で使われることがないことから、「作者は理由となる事態を思いついたというより、眼前の個別の事態に、直裁にあるいは無媒介に、一般的な事態を見ているとはいえまいか」と言われる。目の前に現れている事態の元の事態は疑えず、真偽判定の度外であるというわけである。

結論として、「現象から直截に把握される本体を、つまり見えていることをそのように見えていると述べる。それが『らし』による事態の把握とその述べ方なのである」（p.30）と、「本体把握」の概念によって、「らし」のしていることが説明されるのである。

大鹿氏のこの考えを援用し、「…シ…ラシ」の例を見てみよう。

#### (239) 春日野に 煙立つ見ゆ 娘子らし 春野のうはぎ 摘みて煮らしも

（春日野に 煙が立っているのが見える 娘子たちが 春野のうはぎを 摘んで煮ているように思える<sup>52</sup>）

万葉 1879

大鹿氏の論を適用すると、(239)は「春日野に煙が立っている（＝A）」という眼前の事態に、「娘子がうはぎを摘んで煮ている（＝B）」という元の事態を見ていることとなる。A という眼前の事態はとりもなおさず B というように思える、とも言い換えられる。

これは、「現実に見える A が機縁となって、B へと自然に心が向かう」という「A（ヲ）見レバ B シ思ホユ」と良く似た構図である。眼前の事態にとどまらず、直接は知覚されない元（原因）にまで考えを巡らせるというのは、強度な関心の向け方である。(239)では、シは眼前の事態というよりむしろ元の事態へ関心があり、だからこそ元の事態がシによっ

<sup>52</sup> 大鹿氏に従い、本章のラシの訳語には「～と見える」、「～のように思える」などを当てる。

て強調されるのだとも考えられる<sup>53</sup>。実際、単に煙が立っていることそれ自体は詠み手の関心を引くとは思えない。背景に「娘子」の存在があつてはじめて「煙」が意味を持つ。

(240) 天の川 霧立ち渡る 今日今日と 我が待つ君し 舟出すらしも

(天の川に 霧が一面に立ちこめている 今日か今日かと わたしが待った君が 舟出をしたように思える)

万葉 1765

(241) うち鼻ひ 鼻をそひつる 剣大刀 身に添ふ妹し 思ひけらし<sup>54</sup>も

(くしゃみが出て またくしゃみが出た (剣大刀) 我が身に添う妻が 私のこと を思っていると見える)

万葉 2637

(242) 我妹子し 我を偲ふらし 草枕 旅の丸寝に 下紐解けぬ

(家の妻が わたしを思っていると見える (草枕) 旅の丸寝で 下紐が解けた)

万葉 3145

(240)では、たちこめる霧に、待ちに待った「君」の舟出を見て取る。(241)ではくしゃみが出たことで、(242)では衣の下紐が解けたことで、愛する人へと思いを向ける。これらの例でも、眼前の景物や事象はそれ単独では殊更言及されるほどでもない。その元にある事態こそが言語主体にとって重要な意味を持つのである。これらの例では、「…シ…ラシ」とシの指す事態が主体にとって重大な意味を持ち、他（眼前の事態）はそれに従属する位置づけにあると言えるであろう。「そのものへの重大視、他への等閑視」という助詞シの性質は、「…シ…ラシ」においてもよく認められるのである。

## 4.5. 条件句中のシ

### 4.5.1. 条件句における等閑視の第一のレベル

4.2 節で述べたように、万葉集中のシは条件句内の用法が全体の4割以上を占め、平安期以降、シはこの用法においてのみ存続することとなる。つまり条件文は一貫してシの主要

<sup>53</sup> シは、形式上は「娘子」を承けるが、内容としては「娘子ら（し） 春野のうはぎ 摘みて煮らしも」という文全体を指示しているだろう。

<sup>54</sup> ケラシはケルラシの縮約と見る。



な生起環境なのであった。これは条件文という言語表現の側に、シを受け入れやすい特質が備わっているからであると考えられる。

さて、条件文 —とりわけ日常言語のそれ— の持つ性質の一つについて、坂原茂 (1985) で重要な指摘がなされているのでここで取り上げたい。坂原氏は次のように言う。

真理関数的条件文  $p \supset q$  と比較した場合、日常言語の条件文 “ $p$  ならば  $q$ ” の発話に伴う最も顕著な特徴は、明言された命題が明示されない前提に支えられていることである。(p.86)

条件文 “ $p$  ならば  $q$ ” を一応真理関数的条件文  $p \supset q$  で表すと、条件文発話の基底にある論理構造は、先に述べた暗黙の前提の存在により、もう少し複雑な形をしている。前件  $p$  は通常単独で後件  $q$  の十分条件になっているわけではなく、 $q$  の十分条件を構成する命題の集合  $E = \{a_0, a_1, \dots\}$  のなかで、ある発話状況において最も言う価値の高い命題であるにすぎない。このとき、 $p$  自身はそれだけでは  $q$  の十分条件ではない。しかし、 $E$  の中に含まれる  $p$  以外の命題は既に与えられていると仮定されることにより、 $p$  は  $q$  の十分条件としての資格を得る。(pp. 86-7)

つまり氏によると、我々の日常言語の条件文 “ $p$  ならば  $q$ ” の  $p$  は、厳密な意味での十分条件ではなく、 $q$  の十分条件を構成する命題の集合の一つである。しかし、 $E$  の中で  $p$  が我々にとって言明する価値が最も高い命題として取り上げられ、他の命題は暗黙の前提として背景に退くことによって、“ $p$  ならば  $q$ ” という発話がなされ、また、自然に了解されるのである。氏のあげる次の例を使って説明しよう。

(243) 沸騰しているお湯に手を入れれば、やけどをする。(p.87、(1)の例)

は日常言語のごく普通の発話であるが、この前件はそれだけで後件の十分条件なのではなく、その他もろもろの補助的条件がまわりついている。たとえば「気圧が異常に低いということはない<sup>55</sup>」( $=a_0$ )とか、「断熱材でできた手袋をしていない」( $=a_1$ )とかである。 $a_0$  や  $a_1$  などは、言うまでもない暗黙の前提となっているのであり、実際、(243)を聞いてこれらをいちいち意識する人はいないだろう。それに、これらの細々した条件を全て言語化することは不経済的でもあるし、不可能である。

この「明示されない前提」・「暗黙の前提」こそが、日常言語の条件文の特質であると、

---

<sup>55</sup>気圧が十分低ければ、沸点もやけどをしない程度に低くなる。

坂原氏によって説かれたのであった。

ところで、坂原氏の言う「暗黙の前提」は、本論文のシの性質の規定に使った「等閑視」（特に第一のレベルの等閑視）に通ずるところがあるのではないか。本論文の言葉で坂原氏の主張を言い換えるならば、次のようになるだろう。

日常言語の条件文“**p** ならば **q**”で、**q** の十分条件の集合 **E** の多く（上記 **a<sub>0</sub>** や **a<sub>1</sub>** など）は言語化されない。これら細かい条件は取るに足らないがゆえに、我々の実際の会話では意識すらされず、等閑視される。一方で、**E** の中で最も言う価値の高い **p** が重大視され、十分条件を代表するものとして取り上げられる。簡単に言えば、実質的な十分条件として言語化されている **p** への重大視、他の前提への等閑視ということである。

以上のように条件文の特質を理解することで、助詞シが条件文を主要な生起環境とした理由も説明される。条件文の前件すなわち条件句には、重大視／等閑視構造が内在しており、シが取り上げる対象として条件句は格好の的だったのであろう。条件句に自然と含まれるこの重大視／等閑視構造を、もっと鮮明に表現したいという欲求も生じたはずである。古代語のシはこの欲求に応えるものとして、その本分が条件句の中で存分に生かされたと推察されるのである。

シの使われている条件文、なかんずく前件への重大視の様が感じられるものをいくつか挙げる。

(244) 心をし 無何有<sup>むがう</sup>の郷に 置きてあらば 藐孤射<sup>まこや</sup>の山を 見まく近けむ

万葉 3851

(245) ほととぎす 今し来鳴かば 万代に 語り継ぐべく 思ほゆるかも

万葉 3914

(246) 遠江 白羽<sup>とへたほみ</sup>の磯と 贄<sup>しろは</sup>の浦と 合ひてしあらば 言も通はむ

万葉 4324

(244)、藐孤射の山は神仙が住むという伝説上の山であり、それが見られるかどうかは心のあり方次第だと喝破される。(245)は左注に「右、伝云、一時交遊集宴。此日此处、霍公鳥不喧。仍作伴歌、以陳思慕之意。…」とある。「ほととぎすが鳴く」ということの重要性は、宴会の行われているこの今という一点にかかっている。(246)の歌は反実仮想で述べられており、前件の重大さに比べたら、言を届ける使いがいるか、などといったことは一々取り上げる意味が無いし、詠み手の意識にも上がっていないだろう。

シが条件文の中で使われるとき、その性質が構文パターンの中でいっそう鮮明に認められることがある。それを次節でみていきたい。

## 4.5.2. 構文パターン別に見るシの等閑視の第二のレベル

### 4.5.2.1. 仮定条件句

助詞シを含んだ条件表現を観察すると、構文的に有標で、表現としても固定化（パターン化）しているものがある。それらにおいては「他が言語化される程度には意識にのぼっているが、それには格別関心が払われない」という助詞シの等閑視の第二のレベルが見えやすくなっているのである。本節では仮定条件句の関わる構文を、 $\alpha$ から $\varepsilon$ という5つのパターンに分類した上で、助詞シの性質を確かめていきたい。

#### 4.5.2.1.1. $\alpha$ : 「A シ B ナラバ A'ハ B ナラズトモヨシ」のタイプ

(247) 白玉は 人に知らえず 知らずともよし 知らずとも 我し知れらば 知らずともよし

(白玉は 人に知られない 知らなくてもよい 知らなくても わたしが知っているのなら 知らなくてもよい)

万葉 1018

左注に「右の一首、或は云はく、元興寺の僧、独覚にして智多し。未だ顕聞あらねば、衆諸狎侮る。これに因りて、僧この歌を作り、自ら身の才を嘆く、といふ」とある。白玉とは世間に認められない詠み手自身を比喻として言ったものである。

『新全集』の注に「確定的事実を仮定的に表した」とあるとおり、「我し知れり」というのは発話時点で既定の事実なのであるが、それを「我し知れらば」という「未然形+バ」の仮定条件の形にして一般論として表現している。

以下、第四・五句について仔細に検討しよう（「知らず」の主語の「人は」を補った）。

(248) 我し知れらば人は知らずともよし

この構造は、

・ A シ B ナラバ A'ハ B ナラズトモヨシ

となっている。ここでは「我」（詠み手）と「人」（他の人）が、「我一知る」「人一知らず」と対照的に述べられ、ともに仮定条件句となっている。後の仮定条件句の表す内容「人知

らず」は、「他人が自分の価値をわかってくれない」ということであり、本来良からぬ事柄である。それを「よし」と受けるから「人知らずとも」という逆接になっているのである。

脇にそれるが、ここに見られる「…トモヨシ」は固定化した表現で、次の例がある。

(249) 青柳 梅との花を 折りかざし 飲みての後は 散りぬともよし

(青柳と 梅の花とを 折り髪に挿し 酒を飲んだそのあとは もう散ってもよい)

万葉 821

(250) 春山の あしびの花の 悪しからぬ 君にはしゑや 寄そるともよし

(春山の あしびの花のように 悪しくない あなたとのことでなら、ええい 言い  
騒がれてもかまわない)

万葉 1926

この語法について、『新全集』の頭注(万葉集 1011 歌)に「一般に放任を表し、どうでもよい、という意味。」とある。『時代別国語大辞典 上代編』では「よし」の項に「～してもよい。構わない」の意味があげられ、「…トモヨシ」の例が万葉集から2例(821 歌、1039 歌)引かれている。確かに(249)(250)における「…トモヨシ」は、言語主体にとって好ましくない事柄を受け入れ、どうともせずにそのまま放任する、ということを表していると思われる。

(248)の分析に戻ると、そこではこの「…トモヨシ」に、「…シ…ナラバ」という順接の仮定条件が加わっている。「私が知っている」という特に願わしい事柄があるからこそ、あえて「他の人が知らなくてもいい」と言えるのである。自分自身が知っている、それをとにかく重大なことと捉えるのであって、それに比べたら他人が知らないことなど、(本来は良からぬことではあるものの) どうでもかまわぬ、というわけである。ここに「他が言語化される程度には意識にのぼっているが、それには格別関心が払われない」というシの等閑視の第二のレベルが認められる。

#### 4.5.2.1.2. $\beta$ : 「P ニシアラバ P'ナリトモヨシ」のタイプ

(251) 我が背子と 二人し居らば 山高み 里には月は 照らずともよし

(あなたと二人でいるのなら 山が高くて 里には月が 照らなくてもかまわない)

万葉 1039

「我が背子と 二人し居らば」は発話時で実現している既定の事実であるが、仮定条件句と

して表現されている。

(248)では、順接と逆接の仮定条件句が「我し知れらば」「人は知らずとも」と対照的に述べられていた。その対照性は、知っているか否かという述語の肯否の対立によってもたらされるものである。

(251)の仮定条件句にはそのような文法的対立はないが、内容上の対立を見て取ることができる。「あなたと二人でいる」(=P)のは言語主体にとって歓迎すべきで強く望まれる事柄であるのに対し、「里に月が照らない」(=P')は実現してほしくない良からぬ事柄である。つまり言語主体にとって望ましいものであるか否か、という価値的な対立関係が、この二者に存するのである<sup>56</sup>。

ここでの助詞シは、「二人」に付いているものの、内容的には「我が背子と二人居(り)」(=P)という前件全体を取り上げていると見るべきだろう(シの付く位置によらず内容的に「Pナラバ」のPをシが承けていると見られるから、「Pニシアラバ」と表記する)。すると、シの働きは(248)と何ら変わることなく説明される。すなわち、言語主体はPという望ましい事を重大視し、一方でP'は取るに足らない事柄として等閑視されるのである。

#### 4.5.2.1.3. $\gamma$ : 「PニシアラバP'ナリトモ」のタイプ

次にあげるのは「PニシアラバP'ナリトモ」となっており、順接・逆接の二つの条件句のみで帰結句が無いものである。

(252) 佐伯山 卯の花持ちし かなしきが 手をし取りてば 花は散るとも

(佐伯山の 卯の花を持っていた 愛しい子の 手を握れたら 花は散っても)

万葉 1259

(253) 人言は 夏野の草の 繁くとも 妹と我とし 携はり寝ば

(人の噂は 夏野の草のように 繁くとも あなたと私とが 手を取って寝たのなら)

万葉 1983

(254) 谷狭み 峰辺に延へる 玉かづら 延へてしあらば 年に来ずとも

(谷が狭いので 峰辺に延びている 玉かづらのように 長く心を寄せていたら 一年ずっと来なくても)

---

<sup>56</sup> この、内容上の価値的対立は(248)にも認められる。(248)では、価値的対立に加え、文法的対立があるのである。

## (255) 秋萩に にほへる我が裳 濡れぬとも 君がみ舟の 綱し取りてば

(秋萩に 染まったわたしの裳が 濡れてしまおうとも あなたのお舟の 綱を手を取ったのなら)

このタイプの歌は、注釈書で帰結句として「よし」を補えると言われることがある。『新大系』では(253)について、「歌末の「寝ば」の下に、「よし」の語が省かれているのであろう。」と、(255)については「「綱」し取りてば」の下に「濡れぬともよし」の意が含まれる。」という。これは(252)-(255)が(251)と同様に扱えることを示唆する。今、(251)を分析したのと同様の視点から、上記歌を検討してみよう。

(252)で「愛しい子の手を握る」というのは、実現が強く望まれる事柄であり、対し、「花が散る」というのは好ましくない、良からぬ事柄である。このような対立の中、言語主体は前者の事柄を重大視し、それに対し、後者を等閑視する。愛しい子の手を握るということが仮に実現したらもうそれで満足であって、花が散ってもそれは取るに足らない、どうでもいいことだ、というのである。

(253)にしても、言語主体は、人の噂がひどくてわずらわしいという条件を想定しているが、その悩ましい事態にどう対処するとか、どう行動するとか、そのようなことに考えを及ぼさない。人の噂は、それはそれとして、無関心のまま放っておくのである。

つまり $\gamma$ のタイプとしてあげた歌にも、(251)同様言語主体の望むところのものであるか否かという価値の対立が認められる。しかも「…トモ」は(251)の「…トモヨシ」のごとく、「…であってもそんなことはどうでもよい」という放任を表すと考えられるのである。

注釈書を見ても、「よし」を補うかどうかに関わらず、解釈としては「…トモヨシ」風の「…でもよい、かまわない」という訳がとられている。(252)は「花は散ってもよい」(新全集)、「花は散って構わない」(新大系)のように訳されるのである。少なくとも解釈上は、 $\gamma$ が $\beta$ の型と同様に扱えると考えられる。

$\gamma$ 型に特有な語法があるのでそれを指摘しておこう。それは(252)(255)のいわゆる「テバ止め」である。『新全集』、3656 歌の頭注に、「テバは仮定条件だが、これが文末に用いられると、あとはどうなってもよい、もうしめたもの、というような語気が認められる。」とある。シは望ましい条件を取り上げ、その代わりに、他はもうどうなってもいい、と放任す

るものであったが、このテバ止めの語法は、それを強めた表現として見られるものである。

#### 4.5.2.1.4. $\delta$ : 「P ニシアラバ P' ナリトモ Q」のタイプ

ここまで $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ と見てきたタイプでは、言語主体にとって望ましいか否かという価値的な対立的関係にある二つの事柄が、仮定条件句として言語化されていた。その内で望ましい方の条件が助詞シによって重大視され、その傍ら、他の条件は無関心・放任の意を込めて述べられていた。この放任とは、「…トモ（ヨシ）」という固定化した表現中に認められるものだった。

$\delta$ としてあげるのは、帰結句が一般の述語 Q で「P ニシアラバ P' ナリトモ Q」の形をとるものであって、ここには前述の価値的対立が必ずしも認められないように思われる。しかし、上記のタイプとは別の意味で、 $\delta$ のタイプにも言語主体の等閑視的態度を認めることができるのである。以下、用例を通じてそのことを見ていこう。

#### (256) 我が背子し 遂げむと言はば 人言は 繁くありとも 出でて逢はましを

(あなたが 愛を貫こうというのでしたら 人の噂は うるさいとしても 出で逢いましたのに)

万葉 539

この歌の言語主体は、「出で逢う」(=Q)という事態が起きる背景として、「あなたが愛を貫く」(=P)、「人の噂がうるさい」(=P')という二つの条件を同時に設定している。前者の条件は Q を順当に導くものである。対し、後者の条件は Q が起こるのを阻害する(非 Q を導く)ものと考えられる。つまり、人の噂がうるさいのなら出で逢うことはない、というのが普通期待されることである。このように、二つの条件 P、P'を内容的に見ると、Q という帰結を導くかそれとも妨げるかという逆の関係がある。

言語主体は助詞シによって条件 P を取り上げ、重大な事柄として見る。P は Q を導くものと考えられるので、文の形としては順接仮定条件の「P ニシアラバ Q」となる。

重きを置かれる P からすれば、P'は所詮、帰結 Q を妨げるに及ばない。P'は通常は非 Q を導く条件と見込まれるものの、P との組み合わせると実際にはそうとはならないということである。P'の見込みに反する帰結となるのだから、P'は逆接仮定条件の形として表される。P、P'がそれぞれ順接、逆接の仮定条件となり帰結 Q に係るので、文全体としては「P ニシ

アラバ P'ナリトモ Q』という形になる。これが(256)の構造である。δのタイプにおける言語主体の等閑視的態度とは、Qの成立にとってP'という条件を想定しても別段かまわない、問題ではないというものであった。

δの例を追加する。

(257) 門に居し 郎子内に 至るとも いたくし恋ひば 今帰り来む

(門に居た 郎子は宇智<sup>57</sup>に 着いたとしても 私にひどく恋い焦がれたら すぐ帰って来るでしょう)

万葉 3322

宇智の遠くまで行き着いたら帰ってくるには時間がかかるはず、普通に考えればそうである。しかし、本当に恋い惹かれるのならそれをものともせずすぐに帰るだろう、というのである。

(258) 大野路は 繁道茂路 繁くとも 君し通はば道は広けむ

(大野路は 草木の茂る道 茂っていても あなたが通われるなら 道はきっと開けましょう)

万葉 3881

同様のものとして他に万葉集 1746、4124、4090 がある。

#### 4.5.2.1.5. ε : 「A シ B ナラバ A'ハ〈ドウデモイイ〉」というタイプ

以上見てきたタイプは、どれも「…シ…バ」、「…トモ」という仮定条件句が帰結句に二重に関与していた。

εの型では、事物 A をシで取り上げて、「A シ B ナラバ」という仮定条件の形でそれに言及している。そして A に対照される A'については、「どうでも構わない」というような放任的・無関心的な態度で言及される。εにおいては、その態度は、「…トモ (ヨシ)」のような文法的指標によってではなく、内容的に認められるのである。それに伴い、εは全体の構造としても、帰結句に二つの条件句に係るという α～δ の形から外れてくる。

(259) この世にし 楽しくあらば<sup>58</sup> 来む世には 虫に鳥にも 我はなりなむ

(現世で 楽しくあるのなら 来世では 虫にでも鳥にでも わたしはなってしまう)

<sup>57</sup>原文の「内」は、地名の「宇智」ととる。

<sup>58</sup>「楽しくあらば」とは、酒を飲んで楽しくあるならば、のことである。



(259)の構造を見ると、「この世」をシが承けて、その述語が「楽しくあらば」となり順接の仮定条件句を形成している。帰結句では「この世」に対する「来む世」でどうするか、ということが述べられている。

この歌は飲酒という現世での享楽に主眼がある（そのことがシで特に持ち上げられている）。「虫や鳥になる」ということは、通常は好ましくないことであろう。来世ではそうなってしまおうというのだから、その裏には、どのように生まれ変わろうと問題ではないという投げやりな気持ちが見て取れる。これは、今まで見てきたような「…トモ（ヨシ）」という放任的表現に通ずるものと言える。(259)を(248)のようにパラフレーズするならば、

(260) この世にし楽しくあらば来む世には虫に鳥にもなりぬともよし

とでもなろう。つまり、「来む世には虫に鳥にも我はなりなむ」が「来む世には虫に鳥にもなりぬともよし」の如く逆接仮定条件文として言い換えられるということである。このように考えるならば、「AシBナラバQ」の型が $\alpha$ の「AシBナラバA'ハBナラズトモヨシ」に準じて扱えることになる。

他の例を追加しよう。

(261) 現には 更にもえ言はじ 夢にだに 妹が手本を まき寝とし見ば

(現実には 更にその上に言うことはありません せめて夢にだけでも あなたの手枕で 寝たと見たならば)

澤瀉久孝『万葉集注釈』では「下の夢にだけでも叶うたならば、更にその上に、現実にもと贅沢な事は申せません」という解釈をしている。これは初句・二句と第三句以降とが倒置されていると見るものである<sup>59</sup>。今、この線に沿って(261)を分析してみよう。

この歌では「まき寝と」の後にシがついているが、内容的に夢と現とが対照されているのは明らかだろう。現実には逢えるのならばそれに越したことはないのだが、詠み手はそこまで高望みはしていない。とにかく夢で逢うことを望んでいる。講談社文庫本の注では「もとより「得言はじ」に主眼はなく、夢に共寝したい点にある」と言われるが、まさしくその通りである。言語主体は、夢で共に寝ることをシで取り上げて中心的話題と位置づける。

<sup>59</sup> 『新大系』もこの解釈をとる。

夢での共寝が達成されたのならば、現実でどうこうするとは関心の埒外であるのであって、「え言はじ」、つまり文句を付けることもないというのである。

(262) 伊香保ろの 沿ひの榛原 ねもころに 奥をなかねそ まさかし良かば

(伊香保嶺の 近くの榛原の根の ねんごろに 将来を思い悩まないでくれ 今さえ良か  
ったら)

万葉 3410

この歌ではシが承ける「まさか」(=今)に「奥」(=将来)が対照されている。「まさかし良かば」の後には「よからむ」のような語句が省略されていると見られる。将来のことはどうでもいい、だから先のことまで心配するな、今がよければそれでよいではないか、というのである。

#### 4.5.2.1.6. 仮定条件句の構文パターンのまとめ

この節では、 $\alpha \sim \varepsilon$ に分けて、「…シ…ナラバ」に関わる構文を眺めてきた。それらを振り返ってみよう。

$\alpha$  : 「A シ B ナラバ A' ハ B ナラズトモヨシ」のタイプ

$\beta$  : 「P ニシアラバ P' ナリトモヨシ」のタイプ

$\gamma$  : 「P ニシアラバ P' ナリトモ」のタイプ

$\delta$  : 「P ニシアラバ P' ナリトモ Q」のタイプ

$\varepsilon$  : 「A シ B ナラバ A' ハ 〈ドウデモイイ〉」というタイプ

$\alpha \sim \delta$ は、順接仮定条件をシが取り上げ、他の条件は逆接仮定条件で表されるという点で共通する。「…トモヨシ」という表現は、現代語の「…でもいい、…てもかまわない」同様に一種の定型表現と考えられるものである。この表現を含む $\alpha$ 、 $\beta$ は、構文として定型化かなり進んでいると見られよう。 $\gamma$ は、帰結句の省略が起きているが $\beta$ と同様に解釈されるものである。 $\alpha \sim \delta$ のどの構文型も、シがある条件一つを十分条件として取り上げ、他はどうでもいい、帰結には影響しないと等閑視するものである。 $\varepsilon$ は、構文としては自由な形を取るものだが、シの指すAと他のA'の軽重の差、という点では $\alpha \sim \delta$ と同様にシの性質を認めることができる。

以上、「他が言語化される程度には意識にのぼっているが、それには格別関心が払われない」というシの等閑視の第二のレベルを、条件文の構文パターンの上で検討した。

#### 4.5.2.2. 確定条件句

万葉集中に「…シ…ナレバ」の確定条件句は 112 例存在する。その中で前件と後件の間に因果性の弱い、いわゆる偶然確定条件と思われるものは多くとも 10 例程であり、9 割が因果関係に基づくものとなっている。確定条件句にも、シの働きがよくうかがえる構文型が 3 つ存在するので、順に見ていこう。

##### 4.5.2.2.1. と：「P ニシアレバ P' ナレド (モ) Q」のタイプ

δ：「P ニシアラバ P' ナリトモ Q」

の仮定条件句の構文型に対応するものとして、

と：「P ニシアレバ P' ナレド (モ) Q」

と確定条件句に関する型が 20 例ほど認められる。

(263) 針はあれど 妹しなければ 付けめやと 我を悩まし 絶ゆる紐の緒

(針はあるが あの娘がいないので 付けられるものかと わたしを悩ませ 切れる紐の緒だ)

万葉 2982

仮定条件の関わる δ 型では、二つの条件 P、P' に、Q という帰結を導くかそれとも妨げるかという逆の関係があった。と型は「確定」すなわち既定の事態になったというだけで、P、P'、Q の三者の関係は δ 型と全く同じである。シの性質もと型と同様に認められる。(263) は、紐を擬人化して詠んだ歌で、「いくら針があったところで、妹がいないので付けられまい」という紐の思いを表したものである。ここでは、シは「妹がいない」という既定の条件を取り上げている。この条件が決定的で重大なるがゆえに、同時に起こっている「針がある」という条件は等閑視され、結果として紐を付けることが無効に終わっている。

以下、いくつか同じ構造の歌を挙げる。

(264) 山のはに あぢ群騒き 行くなれど 我はさぶしゑ 君にしあらねば

(山の端に あじ鴨が騒いで 飛んで行くが わたしはさびしい あの人ではないので)

万葉 486

(265) 夢にだに 見えむと我は ほどけども 相し思はねば うべ見えざらむ

(せめて夢にでも あなたが見えるだろうと私は (紐を) ほどいて寝たが 両思いでな

いので見えないのももっともだろう)

万葉 772

(266) …いつしかも 都を見むと 思ひつつ 語らひ居れど 己が身し 労はしければ玉梓

の 道の隈回に 草手折り 柴取り敷きて 床じもの うち臥い伏して…

(…少しでも早く 都を見たいと 思いながら 仲間と話し合っているけれど わが身が 苦しいので (玉梓の) 道の曲り角で 草を手折り 柴を取って敷き 寝床のようにして 倒れてしまい…)

万葉 886

(267) うつせみと 思ひし時に取り持ちて 我が二人見し 走り出の 堤に立てる槻の木

の ちごちの枝の 春の葉の 繁きがごとく 思へりし 妹にはあれど 頼めりし 児らには

あれど 世間を 背きしえねば (春の葉の 繁っているように 思っていた 妻だが 頼み

にしていた 妻だが 世間の道理に 背くことはできないので) かぎろひの もゆる荒野

に 白たへの 天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちいまして 入り日なす 隠りにしかば (鳥で

もないのに 朝早く家を出て 入り日のように 隠れてしまったので) …

万葉 207

#### 4.5.2.2.2. $\eta$ : 「P ニシアレバ〈ドウシヨウモナク〉Q」のタイプ

「…シ…ナレバ」の仮定条件の場合、その帰結は「ヨシ」に代表されるように好ましい事態であることが多い。対して、「…シ…ナレバ」の確定条件では「…シ…ナレバヨシ」の形は無い。「…シ…ナレバ」の後には好ましくない事態がしばしば帰結として来るのである(例えば(267)の「妻の死」がその典型である)。

助詞のシが「…シ…ナレバ」と確定条件を取り上げると、それは動かしがたい重大な条件として表される。この重大なる条件が確定してしまえば、その帰結が望まないものであったとしても、もはや他の条件・手段で覆すことはできないのである。

以上のことが「手段が見つからない、どうしようもない」というような表現とともに表わされることがある。 $\eta$ として挙げるタイプは、「…シ…ナレバ」という条件句と、「どうしようもなく」という意味の副詞的語句がともに帰結句に係っているものである。「ある重大な条件のために自らの意志や希望が叶わず、どうしようもなく、不本意であるが別の行動を取るに終わった」という類型を成している。

(268) …ますらをと 思へる我も 草枕 旅にしあれば 思ひ遣る たづきを知らに 網の浦  
の 海人娘子らが 焼く塩の 思ひそ燃ゆる 我が下心

(丈夫と 思っている私も (草枕) 旅にあるので 思いを晴らす すべを知らず 網の  
浦の 海人の娘たちが 焼く塩のように 思い焦がれている 私の心の内は)

万葉 5 他、3898

「旅にある」という重大な条件があるために、自らの思いを晴らそうとしてもその手段が  
無く、思い焦がれるだけだというものである。

(269) …我が恋ふる 千重の一重も 慰もる 心もありやと 我妹子が 止まず出で見し 軽  
の市に 我が立ち聞けば … 玉杵の 道行き人も 一人だに 似てし行かねば すべをな  
み 妹が名呼びて 袖そ振りつる

(私の恋しい気持ちの 千に一つも 慰められる 気持ちもあろうかと 妻が 絶えず出  
て見ていた 軽の市に 私が立って聞いていると … (玉杵の) 道を行く人も 一人も  
(妻に) 似ている人が通らないので 仕方が無く 妻の名を呼んで 袖を振った)

万葉 207

人麻呂の泣血哀慟歌。亡き妻を思う気持ちを慰めようとしても、軽の市に一人も似ている  
人がいない以上、それが叶わずにいる。このままではどうしようもないので、代わりに名  
を呼び、袖を振るという行動を取ったということである。『和歌文学大系』に「この袖振り  
はやるせなさの余りの愛の所作。」とある。

次も同様の例である。

(270) …我が背子が 行きのまにまに 追はむとは 千度思へど たわやめの 我が身にし  
あれば 道守が 問はむ答へを 言ひ遣らむ すべを知らにと 立ちてつまづく

(…あなたの 行ったままに 追おうとは 何度も思うが かよわい 女の我が身である  
ので 関の番人が 尋ねる問への答えを すらすらと言う すべもわからないので 立ち  
上がったが進みかねている)

万葉 543

#### 4.5.2.2.3. θ : 「P ニシアレバ〈ドウシヨウモナイ〉」のタイプ

このタイプはηに近い構造であり、「どうしようもない、仕方が無い」という内容の語が  
「…シ…ナレバ」を承けて帰結句の述語に来るものである。『…シ…ナレバ』という重大

な条件がある以上、好ましくない状態を解消する方法が見つからず、何も出来ずにいる」というものである。

(271) 我が恋は 夜昼別かず 百重なす 心し思へば いたもすべなし

(私の恋は 夜昼の別がない 幾重にも 心に思うので どうにも仕方が無い)

万葉 2902

「幾重にも心に思う」ということが、シを使って重大な条件として表されている。こうなっている以上、どうすることもできない、恋を晴らすすべがないというのである。

(272) 袖振らば 見もかはしつべく 近けども 渡るすべなし 秋にしあらねば

(袖を振ったなら 互いに見えるくらい 近いのだが 渡るすべがない 秋ではないので)

万葉 1525

「…ドモ」と「…シ…ナレバ」の条件句を「渡るすべなし」が承けている。「渡って相手の元へ行く」という希望が達せられず、不本意なまま終わっている。

#### 4.5.2.2.4. 確定条件句の構文パターンのまとめ

ここまでをまとめると、「…シ…ナレバ」という確定条件句が関わるものとして、次の3つがあった。

$\zeta$  : 「P ニシアレバ P' ナレド (モ) Q」のタイプ

$\eta$  : 「P ニシアレバ <ドウシヨウモナク> Q」のタイプ

$\theta$  : 「P ニシアレバ <ドウシヨウモナイ>」のタイプ

$\zeta$  は、仮定条件の  $\delta$  : 「P ニシアラバ P' ナリトモ Q」に対応するものであった。シが P を重大視し、一方で P' を等閑視することは  $\zeta \cdot \delta$  に共通している。

「…シ…ナレバ」という仮定条件句が、しばしば好ましい事態を帰結句ととるのに対して、「…シ…ナレバ」の確定条件句では望ましからざる事態を帰結とする例が目立つ。 $\eta \cdot \theta$  の構文型は、シが条件 P を取り上げて重大で動かしがたいものと扱うがゆえに、その帰結が望まないものであっても、この重大なる条件を他の条件・手段で覆すことはできない。このことが <ドウシヨウモナイ> というような表現として表われるのであった。

#### 4.6. おわりに

本章では、助詞シの性質を「そのものへの重大視、他への等閑視」と考え、シを承ける述語ごとに分類して用例とともにこの語性を確かめてきた。

さて、3.7 節で述べたように、大野晋(1993)はコソが逆接を導き、シが順接を導くことから、この両者を対照的な助詞とみなしたのであった。大野氏は、

これらの項目（引用者注：万葉集中のシの主な用法のこと）に共通な性格は、物事を自然的成行きとしてうけとめ、それに対応して自然に内心に生起する情意あるいは推量を言い表わしていることである。(p.169)

と述べ、

…シは疑問詞を承け、かつ、句の終結部では極めて数多く順接条件の成立および自然的成行きの表現にかかわっている。これは逆接を導くコソとまさに一対をなす役割である。(p.170)

という結論を出しているが、大野氏の論では「シがどのように働くか」という用法のそれぞれが記述されているだけで、「シがどのような性質を持ち、なぜそのような用法を取るのか」については、結局のところ満足の行く説明がされていない。

本論文はこれまで「なぜコソが逆接に関わるか」、「なぜシが順接に関わるか」について部分部分で説明を与えてきたが、今ここで二者を比較しつつ論じ、コソとシの対照性を確かめて本章のまとめとしたい。

まずシの場合を振り返ろう。「なぜシが順接に関わるか」という問題を考えるに先だって、「なぜシが複文中（条件句中）に好んで現われるか」という事が説明されねばならない<sup>60</sup>。本稿は、4.5.1 節で条件文の特質について論じ、「明示されない前提」・「暗黙の前提」が日常言語の条件文の特徴であり、条件句には、重大視／等閑視構造が内在していることを述べた。そして、「そのものへの重大視、他への等閑視」を行う助詞であるシ（4.3 節）は、重大視される条件と等閑視される条件とをはっきりと区別するのに好んで使われたと考えたのである。ここからシが順接に関わる理由を説明するのはたやすい。シは帰結句にとって重大な条件、決定的な条件を指し示すのであるから、その条件句と帰結句との関係は逆接ではなく順接となるのは明らかである。

---

<sup>60</sup> 4.2 節で指摘したように、万葉集ではシは、その 4 割が順接の条件句中に現われ、さらに中古以降ではシの単独用法は順接条件句中にほぼ限られる。

次はコソである。コソが複文中に現われることは、シと異なる事情を持つ。コソは係り結びとなり、その結びは已然形である。3.2 節で述べたように、已然形という形式は句を接続するのにも使われるため、「コソ～已然形」で文が終わらずに後の句に続いていくのは自然である。問題は「コソ～已然形」が後句にいかなる意味で続いていくのかという接続関係にある。

本論文では逆接用法のコソの使用にあたっては、言語主体の内で、或る事物が前もって基準として設けられていると考えた。そして、コソは、その基準とはかけ離れた特別なもののとして対象を提示する助詞（特異的強調の助詞）であると見た（3.3 節）。逆接の係り結びの「A コソ B ナレ（前句）、C（後句）」では、基準となるのは後句にあたる C の部分に関係するのであった。特異的強調の助詞コソは、その基準とは別の特異な事柄として、前句を示す。前句と後句は「逆」の関係となる。特に、条件句内に現われるシと、反発的逆接となるコソの係り結びとを比較すると、次のようにシとコソの対照性がみやすい。

- 後句にとって重大な事柄を、前句として提示するのがシ。シは、他の条件は後句に影響しないものとして等閑視する。前句と後句は順接。
- 後句とは異質で例外的な事柄を、前句として提示するのがコソ。コソは、前句で認められる事柄は後句には通用しないと退ける。前句と後句は逆接。

複文でシとコソがどのような働きを行っているかを、上述のように分析することで、シとコソの持つ強調の質の違いが明確に示されたと思う。



## 5. コソの文末における一用法

### 5.1. はじめに

次に引くのは『源氏物語』、御法巻の一節である。

- (273) (源氏)「かく何事も、まだ変はらぬけしきながら、限りのさまはしるかりけるこそ」とて、御袖を顔におし当て給へるほど、大将の君(=夕霧)も涙にくれて、目も見え給はぬを、しひてしぼりあけて見たてまつるに、なかなか飽かずかなしきことたぐひなきに、まことに心まどひもしぬべし。(4-174)

紫の上の死後、彼女の顔に見入る源氏。その顔は生きている時と変わらぬも、臨終を迎えたということははっきりとしている、という文脈である。本稿で取り上げたいのは、この中の下線部、「限りのさまはしるかりけるこそ」という箇所、コソに関する語法である。

冒頭の例(273)を形式的にみると「～ハ～連体形+コソ」という形である。周知のとおり、係助詞のコソは、「～コソ～已然形」という係り結び句を形成する。大抵の場合は、「～ハ～連体形+コソ」という形は、連体形部分が主語の資格を有する準体句であって、結びの已然形述語が省略されている、と解されるであろう。つまり、「～ハ～連体形+コソ(～已然形)」と考え、連体形部分と已然形部分とが主述関係にあるとするのである。しかし、(273)はそのように受け取ることはいできない。

主な注釈書でこの部分がどう訳されているか見てみると、「もう最期であることははっきりしているのです」(新全集)、「亡くなっているという兆候ははっきりしてきたことよ。」(新大系)、「最後の相ははっきりしていてね」(角川文庫)となっている。これらの訳からもわかるように、結び句にあたる述語はそれと指摘できない。そして、注釈書では、連体形部分「しるかりける」は主語ではなく、述語のようにとられている。つまり、「限りのさまはしるかりけるこそ」は内容的には「限りのさまはしるかりけり」とほぼ同じなのである。すると、コソは終助詞同然に文末に添えられているだけ、と見ることもできる。このようなコソの用法は、「～コソ～已然形」という、いわゆる係り結びをつくるコソとはだいぶ様子が異なっているように見える。本稿ではこの特殊なコソの用法を整理し、いかにしてそのような語法が生じたのか、また、この語法をもたらした平安期の文法的背景を中心に探

っていききたい。

なお、管見の限りでは、この語法に関するまとまった論考は存在しないようである<sup>61</sup>。ただし注釈書類で、係り結びに使われるコソとの異質性が指摘されることがある。たとえば、『枕草子』の

(274) 左右の衛門の尉を、判官といふ名をつけて、いみじうおそろしう、かしこき者に  
思ひたるこそ。(『新大系』p.330)

の文末の「こそ」に対し、『新大系』(渡辺実校注)の注では「「こそ」で終止であろう。強調表現の一種で、恐ろしく、偉いものだと思っていることだ、の意。」と述べられている。

「「こそ」で終止であろう」とあるのは、係り結びに使われ文中に現れるコソとの差異を意識しての記述だと思われる。

## 5.2. 用例の整理

### 5.2.1. 中古資料中の用例の提示

前節で指摘したようなコソの文末用法は上代には無く、中古以降の資料中に見られるものである。本稿では平安初期から中期の作品における当該用法を探ることとする。

(273)(274)であげたのは「連体形+コソ」で文が終わり、述語のように働くものであった。本節では、体言もしくは用言連体形をコソが承け、そこで文が終止する例(コソの後に述語が補われないもの)を、作品ごとに列挙する<sup>62</sup>。なお以下では、便宜上「連体形+コソ」と「体言+コソ」をまとめて「N+コソ」と表記する(5.2.1節と5.2.2節では「体言+コソ」の例を△で示す)。また、(273)(274)のような文末用法かどうか不審なもの(コソの後に述語を補えるかもしれないもの)は、?で注意した<sup>63</sup>。

<sup>61</sup> 薦清行(2006)で、上代で文末に生起するコソの用法があることが指摘されているが、そこで挙げられているのは「理由句+コソ」で終止するものであり、本稿の用法とは構文上の性質が異なる。また、本稿の用法の出自を上代の文末用法に求めることもできない

<sup>62</sup> ハが後接した、「～コソハ」の形も含める。

<sup>63</sup> ここで扱った古典文学テキストの写本には句読点は存在せず、「文をどこで区切るのか」という問題が生ずる。つまり、コソ終止の文を集めるには、①「Aこそ。B。」と二文に分かれるのか、それとも、②「AこそB。」と一文に収まるのかを何らかの方法で見分けねばならない。しかし、②の場合は係り結びによって原則的にBの述語が已然形となり、それが①と②とを区別する文法的な判断材料になる。あとは已然形述語が省略されている場合に注意を払えばよい。

本章の用例の収集にあたっては、『新全集』または『新大系』を使用した（一部表記を改めたところがある）。作品名の後に、『新全集』・『新大系』のいずれから引用したのか、そしてその底本は何かを記した。用例の後には本文中のページ数を示してある。調査は『土佐日記』、『蜻蛉日記』、『竹取物語』、『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』（以上は『新全集』を使用）、『古今和歌集』、『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』（これらは『新大系』を使用）についても行ったが、これらの作品中にはコソの文末用法は発見されなかった。

ここでは、本稿筆者の収集した全用例を示し、用例の分布の大体の傾向を見ることが主な目的である。次節以降、いくつかの例については、議論に必要とされるだけの文脈を含めて改めて示すこととする。

● 『うつほ物語』（『新全集』、前田家本）… 29例

暁さへなきこそ 2-213／思し隔てたるこそ 2-352／常磐木のやうに見えたまふこそ 2-401／  
宮のけ劣らせたまふこそ 2-402／出ださずなりにけるこそ<sup>64</sup>2-412／思ひたまふこそ  
2-468／？渡らせたまはぬこそ 2-483／△おろかなるわざこそ<sup>65</sup>2-485／待ち取るなるこそ  
2-508／かき抱きたまふらむこそ 2-534／△異筋こそ 2-573／△？二の宮こそは 2-573／  
△？さても世人こそ 2-593／かうことなきやうに見えたまふこそ 3-22／承らずなりにしこ  
そ 3-90／？同じ心ならましかばと思ふこそ 3-101／かくのみものしたまふこそ 3-118／聞こ  
え触るべくもあらぬこそ 3-139／知らじと思すらむこそ 3-142／今かう思ひたまふこそ  
3-154／いひだにいはずなりにけるこそ 3-164／△院の御方こそは 3-173／△おほい大臣の  
みこそは 3-252／違へたまふなめるこそ 3-265／かかる恥を見るこそ 3-290／急ぎしたまへ  
るこそは 3-400／？引き具したまうてしこそ 3-428／いみじき大事のことを思すなるこそ  
3-472／？今に見せたまはぬこそ 3-477

● 『枕草子』（『新大系』、三卷本一類・陽明文庫本）… 8例

？ふとみさせ給へりしこそ 166／いみじうをかしきこそ 205／こと葉の、にくきこそ 275／

<sup>64</sup> 『新全集』と同じく前田家本を底本とする、『うつほ物語 全 改訂版』（おうふう）では、「なりにけるにこそ」となっている。

<sup>65</sup> 校訂で「おろかなるわざにこそ」とされているが、底本では「おろかなるわざこそ」であるので、後者を採る。

聞きわき給ひしこそ 284／かかるいましめもののあるこそ 295／△馬副のほどこそ 304／かしきものに思ひたるこそ 330／いましめおきたるこそ 347

● 『源氏物語』（『新大系』、大島本、ただし浮舟巻は明融本）… 15例

思ひ定めずなりぬるこそ 1-56／御方たがへこそ 1-69／△伊予の介におとりける身こそ 1-93／△母方は三月こそは 1-247／いとほしきことありぬべき世なるこそ 2-294／限りのさまはしるかりけるこそ 4-174／知らぬやうに侍るこそ 4-317／もてなさせ給ふこそ 4-442／常にとりない給ふこそ 5-154／いと艶なるこそ 5-169／さぶらひ侍らむこそは 5-199／かうのたまふこそ 5-210／かたほなるはなかりけるこそ 5-317／さすがにおぼし咎むるこそ 5-345／心づよくおはしますこそ 5-404

● 『和泉式部日記』（『新全集』、三条西家本）… 2例

？おしはからせたまふめるこそ 27／？殺させたまふべかなるこそ 60

● 『紫式部日記』（『新全集』、黒川本）… 1例

むつまじうなりにたるこそ 206

● 『更級日記』（『新全集』、御物本）… 1例

？やまと撫子しも咲きけむこそ 287

上に列举された、コソの文末用法の出現の実態として、次の三点が指摘される。

まず、平安中頃からこの用法が見られること。本稿の調査では、10C半ばまでの資料中には当該用法は発見されなかった。文献上は、『うつほ物語』が成立した10C末頃から認めうるものである。

次に、『うつほ物語』での用法の分布について。『うつほ物語』は物語の構造が執筆時期を絡めて問題とされる。構造上、二部あるいは三部などと分けられることがあるが、「俊蔭」以下「沖つ白波」までの部が、それ以降の巻と大きく区別されることは認められるだろう<sup>66</sup>。

---

<sup>66</sup>野口元大(1976: 273)を参照。

「沖つ白波」までを前編、それ以降を後編とすると、コソの文末用法は、前編にはわずか1例現れるのみで、残りの28例は後編に集中するのである。前編と後編の文章量はほぼ同じくらいであるのにこれだけの偏りが出るのは注目すべきところである。おそらくは前編と後編の制作時期に隔たりがあり、当初は新奇だったこの用法も、その間、徐々に定着していったのだと思われる。これがそのまま後編における出現頻度の増加につながったのだと見ておきたい。

第三に、和歌には現れないこと。三代集に現れないのは勿論のこと、他作品においても和歌部分にはこの用法は見られない。当用法は、『枕草子』で地の文に見られる以外には用例が会話文・心中思惟に限られるのであるが、これは口語的性質の強さを意味するであろう。このような性質を持つ当該用法は、伝統的な和歌の文体になじまなかったのだと考えられる。

## 5.2.2. 異文の整理

前節で、文末用法のコソの例を列挙したが、これらの中には異文が存在するものがある。本節で行いたいのは、この異文の整理と検討である。具体的には、異文をパターンごとに分類・整理し、各パターンの様相から当該用法の性質を探ろうというのである。相当数の異文が有意味なパターンに従って出現するならば、そこには、単なる誤写にとどまらない書写意識、ひいては当代の文法観が反映している可能性が高い<sup>67</sup>。今、我々は(273)(274)のようなコソの文末用法について知りたいわけであるが、まず異文について検討してみることは一つの手がかりになると考えられるのである。

以下、異文が存在するものについて、『新全集』または『新大系』で採用されている底本での本文(5.2.1節で示されたもの)をあげ、他本との相違部分を下線部で指摘し、「―」に続けて異文を示した<sup>68</sup>。〈 〉内にどの本によるのかを記す。なお、校異はコソに関わる

<sup>67</sup>幸い、調査した異文の多くは本節のパターン内におさまった。

<sup>68</sup>異文の引用は、次による。『源氏物語』…池田亀鑑編著『源氏物語大成』中央公論社。『枕草子』…根来司編著『新校本枕草子』笠間書院。『うつほ物語』…河野多麻校注『日本古典文学大系』岩波書店(=『旧大系』)。『源氏物語』、『うつほ物語』の諸本の略号はこれらの本に準ずる。『源氏物語』は、まず青表紙本(=青)、河内本(=河)、別本(=別)のどの系統に属するかを示し、それに続いて括弧内に写本の名称を記した。『うつほ物語』で、『新全集』と『旧大系』に異同があり、しかも『旧大系』で異文が載せられていない場合、『旧大系』の底本で異文を代表させて〈板〉とした。

部分に限る。

α. 「N+ニコソ」

(275) 「いとほしきことありぬべき世なるこそ」(源氏 2・294) 一にこそ<青(肖三)

>

(276) 「(仲澄は) 心のいと操に、かしこかりしかば、身をいたづらになして、ことも出ださずなりにけるこそ。…」(うつほ 2・412) 一にこそ<板>

『うつほ物語』で、逆に、前田家本(『新全集』の底本)では「N+ニコソ」だが他の本では「N+コソ」となっている例がある。

(277) 「常に聞こえむと思ひたまへつれど、ことのついでもなく、常に人騒がしかりつれば、聞えざりつるにこそ<sup>69</sup>。…」(うつほ 2・411) 一こそ<板>

(278) ここに、この尚侍の、世の中にまたなき者にものしたまふなれば、一人になりになるにこそ。(うつほ 2・596) 一こそ<板長宮榊二紀>

これら異文の「にこそ」の後ろには「あれ」や「あらめ」といった語句が省略されていると考えられる。ここでの「N+コソ」は、「N+ニコソ(アレ)」と同様の理解をされるだろう。『新全集』は、(275)を「いまにきとお気の毒なことになりそうなお二人の仲です」、(276)を「…おくびにも出さずに死んでしまったのです」と訳している。また、『旧大系』は(277)を「いつも人がいてうるさかったので申し上げなかったのです」と訳す(以上、三つの訳での下線部は引用者による)。これらでは「N+コソ」は述語的に理解されているのである。

β. 「N+コソアレ」

(279) △「御方たがへこそ。夜深く急がせ給ふべきかは」(源氏 1・69) 一こそあれ。あながちに<別(陽)>

この異文に見られる「体言+コソアレ」形については 5.4.3 節で検討するが、結論を先取りするならば、これは「体言+ニコソアレ」でニが無くなったものと考えられる。「体言+ニコソアレ」(コソを除けば「体言+ナリ」)はコピュラ文の述語として働き、「～である」と

---

<sup>69</sup> おうふう版では、「聞こえざりつるこそ」となっている。

訳されるが、(279)も「(これは) 御方違えですよ」とコピュラ文として解するのがよいだろう。

$\alpha \cdot \beta$  は、ともに「N+コソ」と「N+ニコソアレ」とのつながりを感じさせるタイプであることを注意しておく。

#### γ. 助詞による終止

(280) 「いとほしきことありぬべき世なるこそ」と、近う仕うまつる大宮の御方のねび人どもささめきけり。(源氏 2-294) 一なるを<別(麦阿)>

(281) おなじ枝さしなどのいと艶なるこそ。(源氏 5-169) 一いかなるぞ<別(陽図)>

(282) △「馬副のほどこそ」(枕草子 304) 一むまへのほどこ<能因本>

(280)の異文は、ナリの連体形に間投助詞ヲが後接した形で、(275)にあげたように「…世なるにこそ」の異文もある。(281)・(282)の異文はそれぞれ「連体形+ゾ」、「体言+ゾ」で、これらのゾは終助詞または、係助詞の終助詞的用法として扱われるものである。

(280)と(281)のヲやゾは言い切りの述語に付属しているのであって、「ありぬべき世なるを」を「ありぬべき世なり」、「いと艶なるぞ」を「いと艶なり」としても文意は大して変わらない。この異文の解釈を「連体形+コソ」についても当てはめれば、コソは文意にほとんど影響せず、語勢を強める程度の働きしかしていないと見ることができる。(282)の異文のゾは体言に付いて述語を構成し、「体言+ナリ」と同じくコピュラ文の述語として機能する。現代語では「～である」に相当する。これを元に考えるならば「馬副のほどこそ」も述語的と見られるのであって、「馬副といったくらいである」という内容だと考えられる<sup>70</sup>。

#### δ. その他、文終止の表現

(283) この心もとなきも、疑ひ添ふべければ、いづれとつひに思ひ定めずなりぬるこそ。  
世の中や、ただ、かくこそ。取りどりに比べ苦しかるべき。(源氏 1-56) 一なりぬ。  
これぞ <河・別>

---

<sup>70</sup> 『新大系』は「馬副童(馬の口とりをする少年)といったところね。」と、『旧大系』は「馬の附添の程度ですわ。」と解している。

- (284) 「…いとうとうとしくのみもてなさせ給ふこそ」(源氏 4-442) —こそもてなさせ給へく別(平) >
- (285) 「…若き人々は、もののほど知らぬやうに侍るこそ」(源氏 5-143) —こそく河(大)・別(横保) >
- (286) 「人の物言ひを、さすがにおぼし咎むるこそ」など、古体の人どもは物めでをしあへり。(源氏 5-345) —事く河(七) >
- (287) 今まで世に侍りて、かかる恥を見るこそと、伏し沈みて、(うつほ 3-290) —ことく長岡萩九羽イ(家兼) >
- (288) 「世に知らず心づよくおはしますこそ」と、みな言ひあはせて、母屋の際に木丁立てて入れたり。(源氏 5-404) —などく河(七) >、ことく別(保) >、などいひてく別(麦阿) >
- (289) 「…大人になりたまへる人を、知らじと思すらむこそ」(うつほ 3-142) —思すらむ」とぞく流〔兼掖紀萩前〕 >
- (290) …それに道にあひたりける女車の、ふかき所に落しいれて、えひきあげで、牛飼の腹だちければ、従者して打たせさへしければ、ましていましめおきたるこそ。(枕草子 347) —心のままにいましめおきたると見えたり。 <能因本>
- それぞれの異文にコメントを付す。

(283)は、大島本での「思ひ定めずなりぬるこそ」が「思ひ定めずなりぬ」と、終止形終止に変わっている。そのことによって「こそ」が「これぞ」となり、次の文に主語として繰り込まれることとなる。

(284)で「連体形+コソ」の箇所にあたる異文は「コソ～已然形」という係り結びになっており、「N+コソ」が係り結び相当の強調表現であることがうかがえる。(285)の異文では「知らぬやうにこそ」の後に「侍れ」を補うことができ、(12)同様に係り結び文となっている。

(286)の「おはします事」は、現代語だと「…ことよ」に当たる詠嘆表現と見てよい。述語「おはします」に「事」が添えられただけである。(287)もこれと同様。

(288)はく河(七) >と く別(麦阿) >で『…おはします』など…』という用言の終止形終止、只の文述語になっている。く別(保) >の『…おはしますこと』と…』は(286)同様の詠嘆表現。



(289)は、『…思すらむ』とぞ」という引用表現に変わることによって、「思すらむこそ」が「思すらむ」という用言の終止形終止になっている。

(290)について。能因本では「…と見えたり」という語句によって、「注意しておいたようである」と様相性が語彙的に明示されている。一方、三巻本の「いましめおきたるこそ」には様相的意味を表す語句が、表面的には存在しない。ここで $\alpha$ の「N+ニコソ」の異文を思い起こそう。 $\alpha$ のように「いましめおきたるこそ」が「いましめおきたるにこそ」と解されていたと考える。このように「いましめおきたる」ということは、書き手が直接確認した事柄ではなく推量したことであるから、「にこそ」の後ろには、様相性を込めた「あらめ」を補うのがよい。こうして、「いましめおきたるこそ」を「いましめおきたるにこそあらめ」のように捉えることで、「いましめおきたると見えたり」という異文とのつながりが見えてくるのである。話の流れとしても「いましめおきたるこそ」を「いましめおきたり+推量的表現」のように解するのが自然なところである<sup>71</sup>。これが文の述語となっているのは言うまでもない。

以上、 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 、 $\delta$ の各パターンの異文に共通することは、本稿で問題とする文末用法の「N+コソ」が述語的表現になっていることであつた。これは当代で「N+コソ」が述語として理解されていたことの証左となろう。

### 5.3. 「N+コソ」の機能と表現性

5.2.2 節で、 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 、 $\delta$ の各パターンを見たが、ここでそれらを通じて把握される「N+コソ」の文法的機能および表現性について考えてみたい。

(279)や(282)の「体言+コソ」の場合には、「体言+ナリ」や「体言+ゾ」のようにコピュラ文の述語相当として働く、と見てよいだろう。コソの強い指定性が、対象の指示に発揮されたのだと思われる。

「連体+コソ」についてはどうだろうか。前節の $\alpha$ を振り返ると、「連体+コソ」が「連体+ニコソ（アレ）」に近い解釈を受けていた。「連体+ニコソアレ」でコソを抜いた形は

---

<sup>71</sup> 『新大系』は「ましていましめおきたるこそ」を、「まして厳しく注意してあつたに違ない。」（下線部は引用者）と訳している。

「連体＋ナリ」であるが、それは説明の機能を持つとされる<sup>72</sup>。現代語ではおよそ「～ノダ」に相当するものである。(276)の例は、仲澄が死に至ったいきさつを推測し、他人に説明しているという文脈であり、いかにも「～ノダ」と訳したくなるところである。

しかし、

(291) 「…大人になりたまへる人を、知らじと思すらむこそ」(＝「成人された娘のことは、関知しないとおっしゃるのか」：『新全集』訳)(うつほ 3-142)

(292) 「え言はぬことを、かうのたまふこそ」と、うち怨じたるさまも若びたり。(＝「とてもお話しできないことを、そんなご無理をおっしゃって」と、すねている様子もあどけない。：『新全集』訳)(源氏 5-210)

などは説明に使われているとは捉えにくい。これらは相手を非難し、なじっているような文脈であるが、コソの持つ語勢の強さが前面に出てきていると思われる。

(280)(286)(287)、また冒頭の(273)の例などの文脈は、説明や非難とも言えず、コソは「発話者の詠嘆を表す」といったくらいの使われ方である。こうなると、「文末でのコソは実質的な機能を持たず、終助詞同然に文末に付け足されているだけ」との感も強くなるのである。

コソ自体が「説明」や「非難」の意味を持つというわけではないだろう。係り結びにおけるコソの語調の強さは先行研究でも度々指摘されることである<sup>73</sup>が、文末用法のコソも、強い調子を加えられると考えられる。それが、相手にきっぱりと説明する言い方や相手を強く非難する物言いに適当だった、というだけであろう。「連体＋コソ」におけるコソは「文末において強い調子で言い定める働きを持つ」というように見ておくのが穏当である。

なお、コソの文末用法の用例数を見ると、「連体＋コソ」に比して「体言＋コソ」の数は少ない(5.2.1節参照)。「体言＋ナリ」や「体言＋ニコソアレ」といったコピュラ形式は、述語であることがナリによって保証されているが、「体言＋コソ」は述語であることが見かけ上分からない。だから「体言＋コソ」は述語形式としてあまり好まれなかったのだと考えられる。一方、「連体＋コソ」は、用言の述語性によって、文末述語として安定しやすい。

<sup>72</sup>北原保雄(1966)、高山善行(1990)など。

<sup>73</sup>山田孝雄(1908: 658)では、「こ(引用者注:「こそ」のこと)は一方にては「ぞ」に対して一方に於いては「なむ」に対して論理的に又感情的に最高度の調子を有するものなり。」と述べられている。

「連体+コソ」は「用言述語+終助詞」のように再分析されていたとも考えられるのである<sup>74</sup>。

#### 5.4. コソの文末用法の発生

5.4 節では、コソで終止する語法がいかにして生じたのかを考える。まずその概要を述べよう。手がかりとしたいのは、5.2.2 節で見た異文のパターン $\alpha$ 「N+ニコソ」と $\beta$ 「N+コソアレ」である。これらは「N+ニコソアレ」を元とした表現であり、また、「N+コソ」に近い解釈を持つものでもある。「N+ニコソアレ」からアレを無くせば「N+ニコソ」になり、ニを無くせば「N+コソアレ」になる。そして、「N+ニコソアレ」でアレ・ニの両方が無くなったものとして「N+コソ」という形が生じたと考えられるのである。

以下各形式について、通時的な面を中心に必要なところを述べ、コソの文末用法の発生の話につなげたい。

##### 5.4.1. 「N+ナリ」と「N+ニコソアレ」の使用状況

「N+ニコソアレ」は、「N+ナリ」（の原型の「N+ニアリ」）にコソが介入して出来た形である。本節では「N+ニコソアレ」・「N+ナリ」の両形式の使用状況を通時的に見ていきたい。なお、「体言+ナリ」と「連体+ナリ」では発生時期的にも構文論的にも差があることが先行研究で説かれている<sup>75</sup>。よって、これらを区別して検討することにする。

まず、「体言+ナリ」について。このナリはニアリの縮約から出来たとされ、上代においてはナリとニアリが併存する状況である<sup>76</sup>。これが中古になると、通常はナリが使用され、ニアリは係助詞・副助詞が挿入された形やニアラズといった形で現れる<sup>77</sup>。

---

<sup>74</sup> 5.2.2 節、 $\gamma$ の異文もこれを裏付ける。なお、Ohori(1995)、同(2000)では「～テ。」「～カラ。」「～ノニ。」のように、本来従属節を表す形式が主節を伴わずに文末で働く「中断節(suspended clause)」の用法を分析している。この中断節には、①統語的には不完全だが口頭語に現われる、②それぞれの形式に特有の慣習化された意味を持つ、という特徴があり、「N+コソ」と類似の現象と見られる。

<sup>75</sup> たとえば、松尾捨治郎(1961)、北原保雄(1981)など。

<sup>76</sup> 上代におけるナリとニアリの分布、また、ナリの成立過程については、春日和男(1968)の第一編第二章第二節Ⅱ、また、釘貫亨(1999a)、同(1999b)を参照。

<sup>77</sup> 中村幸弘(1995)の第一編、第二章参照。

次に、「体言+ニコソアレ」の使用状況を通時的に見よう<sup>78</sup>。これは「体言+ニアリ」にコソが挿入された形であるが、上代ではほとんど見られない。『続日本紀宣命』には無く、『万葉集』では次の1例のみである。

- (293) 家島は 名にこそありけれ 海原を 我が恋ひ来つる 妹もあらなくに (万葉 3718)

中古では「体言+ニコソアレ」の形は活発に使用されるようになる。初期資料中、『古今和歌集』などにも用例が散見する。

- (294) かつ越えて別れもゆくかあふ坂は人だのめなる名にこそありけれ (古今 390)

- (295) 身を憂しと思ふに消えぬものなればかくてもへぬる世にこそありけれ (古今 806)

「連体+ナリ」に移る。定説では、上代において「連体+ナリ」の確例は無いとされており<sup>79</sup>、本稿も異存は無い。中古では、よく知られる土佐日記の冒頭の例を初めとして、早くから「連体+ナリ」が活発に使用されている。

- (296) 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。(土佐 15)

「連体+ニコソアレ」の形は、「体言+ニコソアレ」同様、上代ではごく少数に限られる。『万葉集』には見られず、『続日本紀宣命』に2例あるのみである。

- (297) 定不賜奴仁己曾阿礼 (サダメタマハヌニコソアレ) (第 31 詔)<sup>80</sup>

- (298) 悟給尔己曾在礼 (サトシタマフニコソアレ) (第 44 詔)

中古に入っても、初期では適当な用例が見いだせない。

- (299) 「うべ、かぐや姫好もしがりたまふにこそありけれ」(竹取 39)

これには「なるほど、かぐや姫が欲しがりなさるもの(※皮衣のこと)である」という訳が当てられる。連体形部分「かぐや姫好もしがりたまふ」は準体句として、実質的なモノ(皮衣)を指しており、「体言+ナリ」に分類するのが適当なところである。

『蜻蛉日記』では数例を数える。

- (300) 期もなく思すにこそあなれ。(蜻蛉 239)

- (301) 憂き身ひとつをもてわづらふにこそはあめれ、と思ふ思ふ、…(蜻蛉 323)

『源氏物語』になると、「連体+ニコソアレ」は80例ほどで、盛んに使用されていると言える。以上から、中古での「連体+ニコソアレ」の使用状況として、おおむね、「時代が

<sup>78</sup> 「ニコソアラメ」、「ニコソアメレ」のように、助動詞が付属した形式も含める。

<sup>79</sup> 松尾捨治郎(1961)の第4章、第1節で精査されている。

<sup>80</sup> 引用は『続日本紀宣命 校本・総索引』(吉川弘文館)による。

下るにしたがって漸増、11C頃には多数」と言える。

以上、各形式と、その使用状況をまとめると次のようになる。

- ・体言＋ナリ…上代、中古通して多
- ・体言＋ニコソアレ…上代では稀少、中古では多
- ・連体＋ナリ…上代には無、中古では多
- ・連体＋ニコソアレ…上代では稀少、中古では漸増

ここから、次の二点が指摘されよう。第一点は、「連体＋ナリ／ニコソアレ」は「体言＋ナリ／ニコソアレ」より遅れて増加していったということ、第二点として、コソが挿入された「ニコソアレ」は時代が下るとともに好んで使用されるようになったということである。

#### 5.4.2. 文中でのコソの出現位置の変化

本節では、前節の最後に述べた二点目の傾向（「ニコソアレ」形の増加）について、文中におけるコソの出現位置の変化という観点から捉えてみたい。大野晋（1993: 103-4）で指摘されているように、上代では、コソは主部や条件句に後接する例が多数を占める。

(302) 我が身こそ 関山越えて ここにあらめ 心は妹に 寄りにしものを（万葉 3757）

(303) 泊瀬川 流る水沫の 絶えばこそ 我が思ふ心 遂げじと思はめ（万葉 1382）

(304) 香具山は 畝傍ををしと 耳梨と 相争ひき 神代より かくにあるらし 古も 然に  
あれこそ うつせみも 妻を 争ふらしき（万葉 13）

(305) 我が名はも 千名の五百名に 立ちぬとも 君が名立たば 惜しみこそ泣け（万葉 731）

(302)は主部に後接した例。(303)では「未然形＋バ」にコソが付いて仮定条件句を成している。(304)の「已然形＋コソ」、(305)の「ミ語法＋コソ」は共に順接確定条件の例である。文全体の構造を眺めると、(302)は「主部＋コソ＋述部」、(303)・(305)は「条件句＋コソ＋帰結句」となっており、これらにおけるコソはいずれも、文の中間位置、特に文を大きく二分割する位置に割って入ったものと見なすことができる。

そして、上代のコソは、述語の内部に現れることがほとんどない。前述の「体言＋ニコソアレ」、「連体＋ニコソアレ」の形が若干例あるのみである。つまり、上代ではコソは文の中間に現れるのであり、述語内部のような文末に近い位置に来るのは非常に稀なのである。

しかし中古期になると、述語内部にコソが多く現れるようになる。例えば『源氏物語』で「～ニコソアレ」の形は 200 例余、コソの用例全体の 1 割以上に達する。この他にも、次のようにコソが多様な形で述語内部に出現している。

(306) 明けたてば蟬のをりはへ鳴きくらし夜は蛍のもえこそわたれ (古今 543)

(307) 人の世をあはれと聞くも露けきにおくるる袖を思ひこそやれ (源氏 1-315)

(308) 「…世づかぬ御もてなしなれば、ものおそろしくこそあれ」 (源氏 1-115)

(309) 「…なかなかこそ侍らめ」 (源氏 3-413)

(306)の「わたる」は動詞連用形に後接し、「…し続ける」の意を表す。コソが述語「もえわたる」の間に割り込んだ形となっている。(307)は複合動詞内部にコソが現れた例。(308)や(309)は、それぞれ形容詞、形容動詞にコソが介入した例である。これらのような形は上代では見られなかったものである。

このように、上代で文の中間に現れていたコソは、中古には文末の述語位置にも自由に出現するようになったのである。先に、「ニコソアレ」は時代が下るとともに好んで使用されるようになった」と述べた。これは、「係助詞コソの、述語内部への進出」という通時的变化の一端として捉え直すことができる。

#### 5.4.3. ニの脱落現象

「N+ニコソアレ」形式が中古で定着するようになってから、新たな形が見られるようになる。それはニが抜け落ちた「N+コソアレ」というものである。

この形については、夙に山田孝雄が触れている。山田孝雄(1908: 1114-5)では、本稿で扱ってきた体言や用言連体形に付くナリを「説明動詞」と呼び、「係助詞が附属するときは「に」を省きて「あり」に接することあり」と指摘している。そこで挙げられている例は、

(310) 人の心こそうたてあるものはあれ。(源氏)

(311) 何事も生けるかぎりのためこそあれ。(源氏)

などである。山田は「うたてあるものにはあれ」、「生けるかぎりのためにこそあれ」の「に」が省かれた、という見方をするのである。山田孝雄(1913)にもいくつかの例が列挙されている。

「N+コソアレ」の用例の実態はどうであろうか。「N+コソアレ」形は、中古中期の『うつほ物語』、『枕草子』、『源氏物語』から見え始める。『うつほ物語』に 10 例程度、『枕草

子』と『源氏物語』にそれぞれ5例ほど見つかるが、それほど盛んに使われているとは言えない。

「N+コソアレ」の用例には「N+ニコソアレ」という異文が存在することがある。5.2.2節と同様にして底本の本文とその異文とを提示しよう。

(312) 秋の野のおしなべたるをかしさは、薄こそあれ。(枕草子 78) 一にこそ<能因本>

(313) うきものはわが身こそありけれ、と思ひつづけらるれど、(源氏 2-108) 一にこそ<青(肖)・河>

(314) 何ごと身のためこそはべれ。(源氏 4-139) 一にこそは<別(麦阿)>

(315) ことわりこそはありけれ、父などの口開けさせなどしけるは。(うつほ 2-51) 一にこそ<イ(長宮)>

(316) 数ならぬ身に、思ふまじきことを思ひ初めたるが、過ちこそあれ、など思ひて参りたり。(うつほ 2-123) 一にこそあなれ<萩居九道塙琴伊(長宮富家)>

(317) まことには、恐ろしきものは、弾正の宮こそおはすめれ。(うつほ 2-404) 一にこそ<馬>

次は、『うつほ物語』で、前田家本では「N+ニコソアレ」だが他の本では「N+コソアレ」となっているものである。

(318) 繁き嘆きは身にこそありけれ(うつほ 1-460) 一こそ<流[榊一兼椋居]>

(319) 「…など人はえのたまひ触れぬにこそあめれ」(うつほ 1-504) 一こそ<板長宮榊一二椋岡>

(320) あやしくものの具など、ありがたく清らにするところにこそあれ。(うつほ 2-547) 一こそ<板>

『うつほ物語』、『枕草子』、『源氏物語』の三資料を見渡しても、諸本の異同はほぼコソアレーニコソアレに限られている。これらを見るに、書写意識においては「N+コソアレ」を「N+ニコソアレ」と同等に解していたようである。

「N+コソアレ」は「N+ニコソアレ」を元にして生じた、と推察しても差し支えなからう。しかし、山田孝雄のようにニの省略と簡単に片付けるのには問題がある。よく知られるように、「N+ニコソアレ」はアレが省略されて「N+ニコソ」の形になる。『源氏物語』などではこの省略は非常に頻繁に起こっている。一方で、「N+コソアレ」は指摘した

ようにわずかしき観察されない。このニの消失を、アレ同様の「省略」と捉えるには抵抗を感じるのである。さらに、このようなニの消失は(310)(311)のような「N+係助詞+アリ(の変化形)」という形に限られ、係助詞抜き「N+アリ」では「N+ニアリ」の解釈とはならない<sup>81</sup>。係助詞が存在する場合に限って上記の現象が起きるというのは、何らかの説明を要する事柄である。単に「ニの省略」と言っただけでは済まされないだろう。

ところで、山口堯二(1990)は中世で「ニヤアラン→ヤラン」という変化が起きたことを論じている。山口氏はこの変化はニの脱落を伴った、と述べる。氏の考えを追うと、

①文中の係助詞は、構文の論理的な流れを断ち切る提示性によって、その直前に位置する格助詞をしばしば脱落させる。

②ニヤアランのニは、ナリの連用形であるものの、語源的に格助詞のニとつながる。

③したがって係助詞ヤの提示性が、ニヤアランのニを脱落させたと考えられる。

という論法になっている。そこでは、ヤのみならずカやコソといった他の係助詞も、ニを脱落させる力を持つことが、中世の用例を以て示唆されている。山口論文で示されたニの脱落の論理は、特定の時代に限定されるものではなく、中古用例にも十分妥当するだろう。係助詞のコソが、格関係を断ち切ってニコソアレのニを脱落させたと考えられるのである。山口堯二(1990)で扱われたヤランと本稿のコソの文末用法との関わりは、5.5節で改めて考えてみたい。

#### 5.4.4. 「N+ニコソアレ」から「N+コソ」へ

5.4.1節から5.4.3節までを簡単にまとめよう。中古中期には「体言+ニコソアレ」、「連体+ニコソアレ」ともに、よく使われる形として定着していた。ここには、「上代で文の中

---

<sup>81</sup> 岩井良雄(1976)では、源氏物語から、『には』の意の『は』(p.343)及び『にこそ』の『こそ』(p.364)の例が引いてある。

・男しもなむ、子細なき者は、侍るめる。(帚木)

・人の心こそ、うたてある物はあれ。(葵)

・憂きものは、わが身こそありけれ(濤標)

などである。「には」と解すべき「は」は、上位に「なむ」「こそ」のような係助詞が現われる文に見られるという指摘がある(p.343)。係助詞のハやコソが関わる特殊な場合にしか、アリをコピュラの意で解釈することはできないのである。

なお、岩井氏は「にこそ」の意の「こそ」は、『こそ』の直上に『に』を省略したのではなく、『こそ』に『にこそ』の意のあるものという慣用によるのである(p.364)と言い、係助詞にコピュラの意が含まれる場合があると考えている。



間に位置していたコソの、述語位置への進出」という一般的傾向が背後にあった。中古中期は「N+コソアレ」という形が見え始めた時期でもある。この形は「N+ニコソアレ」でニが脱落したものと説明された。

さて、「N+ニコソアレ」でアレはしばしば省略され<sup>82</sup>、「N+ニコソ」となる。この「アレの省略」と「ニの脱落」を併せれば、「N+ニコソアレ→N+ニコソ」という変化が説かれるのである。10C末頃からという「N+ニコソ」の出現時期には、既に上記の文法的背景が備わっていたわけであり、上記説明は、通時的考証にも一致するものである。

このように「N+ニコソ」が

N+ナリ→N+ニコソアレ→N+ニコソ

というルートを経て生じたと考えると、ナリ（ニアリ）によって文末に存在することを許されたコソが、ニアリ無しでも文末に立つようになった、と見ることができる。これは、係助詞コソの、文末での自立の経過とも受け取れるのである。

## 5.5. 中世における係助詞の連体ナリへの介入

前述のとおり、山口堯二(1990)は中世での「ニヤアラン→ヤラン」の変化を考察したものである。氏は、ヤランの成立事情として、連体ナリに係助詞が介入した例が中世に目立ってくる（中古よりも）ことをあげる。本稿 5.4.1 節と合わせると、上代～中古～中世と時代が下るにつれ、係助詞の連体ナリへの介入が増加の一途をたどった、ということになる。山口氏はこの傾向を中世の係り結びの揺らぎ・崩壊と結びつけ、「介入する係助詞の用法が、質的に文末用法に近づく点も、既存の係り結び体系の、論理化に逆らう性格をそれだけ弱めるありようとして、時代の志向に沿えたことであろう。」(66 頁) と述べている。

もともと係り結び—特に上代で見られる典型—とは、述語である結び句（連体形や已然形をとる）に対して、係り句（～ヤ・コソなど）が張り合い、文構造に強烈な切れ目、断をもたらしものであった<sup>83</sup>。しかし、係助詞が述語内部に来るようになると、文構造としての係り句—結び句の対立が弱化、さらには消失してしまう。これは係り結びの乱れの一因としても考えられるものである。

<sup>82</sup> これは10C半ば頃までは少なく、『うつほ物語』、『源氏物語』に多く見られる。

<sup>83</sup> 尾上圭介(2002)参照。

さて、山口堯二(1990)は、中世で、係助詞が質的に文末用法に近くなる現象として、ニヤアラン→ヤランの他にニコソアルナレ→ゴサンナレ、ニコソアルメレ→ゴサンメレもあげている。これらに、本稿で問題としてきた「N+コソ」という用法を加えて、係り結びの典型から外れる、係助詞の文末的用法と括ることができる。

## 5.6. 逆接句を構成しないコソの係り結び

本章取り上げた文末で働くコソは、已然形の結びを欠き、逆接句とはならないものであった。一方、「～コソ～已然形」の形を取りながら逆接句とならないものも、既に上代から存在する。それが、逆接句を構成するコソの係り結びとどのような関係にあるのか、この節で検討したい。

本論文は、「ある基準となる事物から際だって異なる、特異的なものとして指し示す」という性質—特異性—をコソが有すると考えた。逆接句を構成するコソの係り結びでは、このコソの性質がよく発揮される。基準（物事の基礎となる標準）という概念を「典型的に成り立つ事柄」・「自然に認められる事物」と捉えると、基準とされる事物が言語主体の中心的主張となり、コソの指す特異な事物は例外として退けられる。これがコソの係り結びの逆接性につながるものであった。

しかし、基準・標準となる事物は、ともすると「衆たるもの」・「並の事物」・「平凡な事物」として、さしたる価値を持たないものとしても受け取られる。するとともはや基準となる事物に力点は置かれない。逆に、基準からかけ離れた特異な事物の方に、「衆をぬきんでいる」・「傑出している」・「際だってふさわしい」という肯定的価値が認められるようになり、そこに言語主体の主眼が置かれるようになる。このように基準への意識が変容することで、基準 —これは後続句に関わるのであった— への言及も必要ではなくなり、逆接で後に続かずそこで文が終わり単純な強調となるコソの係り結びが成立することとなる。

次は、逆接句を構成しないコソの係り結びの例である。

(321) …海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大君の 辺にこそ死なめ かへり見はせじと言立て…

（海を行くのなら 水びたしの屍になろうとも 山を行くのなら 草むす屍になろうとも 大君の お側で死のう （我が身を）顧みることは しまいと誓って…）

「～死なめ」は、「水漬く屍、草生す屍になろうとも、大君のお側で死ぬのなら本望だ」との意である。ここでのコソの係り結び「大君の辺にこそ死なめ」は逆接でない（逆接で続く句を意味的に補うこともできない）ことを確かめよう。

まず、これが「意外的逆接」でないことを見よう。「～死なめ」は言語主体の希望・決意を表しているが、その後続句の「かへり見はせじ」も言語主体の意思表示であって、「～死なめ」を否定する現実の事態ではない。さらに、「～死なめ」という希望が意に反して叶わなかったというわけではないので、逆接で続く句を「～死なめ」の後に意味的に補うこともできない。言語主体の期待が否定されてはおらず「意外的逆接」ではない。

それでは「反発的逆接」の解釈になるであろうか。反発的逆接の典型を振り返ると、次のごときものであった。

(322) …ま玉なす 我が思ふ妹も 鏡なす 我が思ふ妹も ありと言はばこそ 国にも 家にも行かめ 誰が故か行かむ

（玉のように 私が愛しく思う娘が 鏡のように私が愛しく思う娘が いると言うのなら 故郷にも 家にも行くだろうが （もはや） 誰のために行くだろうか）

万葉 3263、(124)・(170)の再掲

ここで言語主体の主眼は、あくまでも基準である後続句「誰が故か行かむ（誰のためにももう故郷には帰るまい）」にある。「故郷に帰る」ということは、コソによって、「妹がいるのなら」という例外的な一局面で成り立つことであるとされ、例外であるが故に結局は退けられるのである。

仮に(321)を(322)のように解釈したらどうなるか。言語主体の主張は「誰の側でも死ぬまい」ということにあり、「大君のお側で死ぬ」ということは例外であるが故に退けられることとなってしまう。これは全くおかしい解釈である。よって(321)を「反発的逆接」と取ることもできない。

「大君の辺にこそ死なめ」では、「大君の辺」が他とは異なるものとして特別扱いされているが、例外と退けられるわけではない。「海行かば水漬く屍山行かば草生す屍」と表わされるように、「大君の側でならどんな死に方でも構わない」、「大君の側こそが死ぬのにふさわしい」と、積極的・肯定的な価値が「大君の辺」に認められているのである。このように、(321)は逆接ではなくそこで文が終わる単純な強調と見るべきであり、ここでのコソは

例外を示すのではなく、肯定的価値とともに対象を提示しているのである。

次の例（平安期、三代集より）も類似のものである。

(323) 山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつつ

（山里は秋が特に寂しいものだ。鹿の鳴くその声に目をさましていて）

古今 214

(324) 千早ぶる神無月こそ悲しけれ我が身時雨にふりぬと思へば

（十月こそが悲しい月です。時雨が降るように、私の身が古くなってしまうと思えますので。）

後撰 469

(323)は「ことに」によって、他の季節と異なってひとときわ秋が寂しいということが明らかであるが、他の季節にはもはや主眼はない。コソの単純な強調の用法である。(324)も、「他の月に比べ、神無月が抜きん出て悲しい」、「神無月が最も悲しいというにふさわしい」というのであるが、他の月には力点が置かれない。「他の月」は「地」に退いてしまい、「神無月」が「図」として注目されるのである。

万葉集で、「カクシコソ～メ」のようにシとコソとが接続する例が見られる。

(325) 年のはに 春の来らば かくしこそ 梅をかざして 楽しく飲まめ

（年ごとに 春が来たならば このように 梅を髪に挿し 楽しく飲みましょう）

万葉 833

(326) しなざかる 越の君らと かくしこそ 柳かづらき 楽しく遊ばめ

（（しなざかる） 越中のみなさんと こうやって 柳を髪とし 楽しく遊びましょう）

万葉 4071

「カクシコソ～メ」は多く勧誘の意味で、「このように～しましょう」と訳される。ここには逆接性が全くなく、シコソは単純な強調として働いていると言える。本論文はコソとシとを対照的な助詞と見たが、この対照性は逆接句を作るコソにおいて鮮明化してくるものである。コソに逆接の意がなくなり、単なる強調となることでシとコソとの性質が近接し、

シコソのように複合した形ができたのだと思われる<sup>84</sup>。

さらに、次のようにコソが述語内部に来るようになると、コソの係り結びの非逆接性が決定的になる。

(327) めづらしと 我が思ふ君は 秋山の 初もみち葉に 似てこそありけれ

(立派なお方だと 私が思い申し上げる君は 秋山の 初紅葉に 似ていらっしゃる)

万葉 1584

ここでは係り句―結び句の対立は希薄であり、コソは文事態全体を取り立てている。もはや基準となっているものが想定できず、コソが何から何を区別していると指摘できない。

5.4 節で述べたとおり、かかるコソの述語内部への進出は、時代が下るにつれて増加していき、同時に、コソの逆接句を構成する働きも弱化していったのである。

## 5.7. おわりに

本章は、「N+コソ」という文末用法について、それが「N+ニコソアレ」から、ニの脱落とアレの省略を経て成立したということを主張した。この用法は中古・中世で見られる、係助詞の文末述語への介入という一般的傾向の、一つの現れと見ることができた。これは係り結びの乱れを示唆する現象として捉えることも可能であろう。

上代においては、コソの係り結びが逆接用法として多く使われていた。3.6 節で述べたように、万葉集の例を観察すると、結び句の述語と大きく対立する箇所ではコソが直前の語に働き、反発的逆接を生じる場合が多いのである。

ところが中古以降、逆接用法は消えないまでも、使用頻度が減っていく。中古になって係り句―結び句の対立が弱化すると、コソが漠然と文全体を強めるようになり、「何を基準として、何を特異的に区別するか」ということもぼやけたものとならざるを得ない。コソの特異的強調がどう働くかが明確にならず、コソの係り結びが逆接句を構成する力も弱くなってしまったのだと思われる。

---

<sup>84</sup> ただし、シコソの前に来る語は固定化しており、数もさほど多くない（万葉集で 14 例。平安期ではごく僅かのようなものである）。万葉集では他に「ウベシコソ」があるがこれも逆接とはならない。

本章の「N+コソ」という用法は文末に位置し結び句もなく、決して逆接句とはならないものである。この用法は、中古以降の係り句―結び句の対立の弱化、そして逆接用法の減少の一端として位置づけられるものである。

## 6. 本論文の結論

第2章～5章での結論を以下にまとめる。

第2章は逆接句一般の意味分類を行い、その上で、コソの係り結びがどのような逆接の意味を表すのかを記述した。

本論文では「期待性」という心理的概念を元に、「期待の否定」と言語主体との関わりを考え、逆接の意味を大きく三分類した。意外的逆接、反発的逆接、対比的逆接の三つである。これらをさらに細かく分類し、ド・ドモの使用とコソの係り結びの使用を観察した。

意外的逆接は、言語主体がいかにして期待を抱いているかという観点から、①「論理的推論に基づく期待」、②「言語主体の意思・希望・予想」、③「意思・希望・予想を伴う行為」という三つに細分類される。このうちコソの係り結びが逆接として示せるのは、①のうちの「結果たる事実を元にして原因を推し量るが、現実事態によって否定される場合」である。

反発的逆接は、言語主体がいかにして相手の期待を否定するかという観点から、①「相手の短絡への非難」、②「期待に反する心情の表示」、③「障害的状況への反抗」の三つに細分類される。このうちコソの係り結びが逆接として示すのは①だけである。また、対比的逆接はコソの係り結びによって表されない。以上、2章は逆接句一般の意味分類を詳細に行い、コソの係り結びという形式がどの意味を表すかについて見た。

第3章ではコソの性質がいかなるものか、そしてそれがいかにして逆接性につながるのかについて考えた。

本論文は、コソ（特に逆接用法のそれ）の使用にあたっては、言語主体の内で、或る事物が基準として設けられていると考える。そして、コソが指す対象は、その基準とはかけ離れたもの、基準から逸脱するものとして示される。つまり、「ある基準から際だって異なる、特異的なものとして指し示す」という性質—特異性—をコソが有すると見るのである。

前章の意味分類のおのおのにおいて、このコソの特異性がどのように発揮され、逆接の意がもたらされているのかを論じた。

意外的逆接では、後続句の眼前事実から導かれる原因を基準とし、特異性を持つコソが、

その原因を否定するように働いた。推論が失敗することによって言語主体は意外と感ずるのであった。

反発的逆接がでは後続句によって表される中心的主張が基準となっていた。コソは、その働く対象を、この基準とは無関係な事柄として示し、退ける。結果として、自らの中心的主張は揺るぎないものとして強く示されるのである。

第4章は、コソと対照的であると見られる助詞シの性質について考えた。

本論文はシの持つ性質を「そのものへの重大視、他への等閑視」と見た。そしてこのシの語性を、単文の「…シ…形容詞」・「…シ…ユ」・「…シ…ラシ」および、「…シ…ナラバ」・「…シ…ナレバ」という条件句内の使われ方において確かめた。

本論文の主張するシの語性は、「(他の) 或るものを基準として設定し、そこからコソの指すものを特異的に区別して扱う」というコソの語性とは対照的である。

第5章では連体形や体言に後接し、そこで文が終止するというコソの文末用法について考察した。当用法は10C末頃から認められること、『うつほ物語』では後編に集中すること、和歌には使われず口語的性格が強いことの三点が判明した。続いて当該用法の異文を調べ、異文の生じた時代では、当該用法が文の述語相当として理解されていたということを見た。

さらにこの用法の発生について、「体言・連体形+ニコソアレ」とのつながりから探った。上代では助詞コソは主部や条件句に後接し文の中間に現れることが多いが、中古期になると、述語位置に多く現れるようになる。「体言・連体形+コソ」の用法は、「体言・連体形+ニコソアレ」表現の定着を下地として、そこから①アレの省略、②ニの脱落という二つの変化によって生じたものであると考えられる。

この用法における係助詞の述語位置への進出は、中古以降の係り句―結び句の対立の弱化和捉えることができ、またこのことは、時代が下るとともにコソの逆接性が失われていったことと関係すると見られるのである。



## 出典一覧

5章以外の用例の引用は以下の本による（5章の用例の引用については本文中で記述してある）。

[ ]は出典表示で略した部分である。出典の後に、以下の本でのページ数（歌の場合は歌番号）を示した。表記など私に改めた部分がある。

万葉[集]…『万葉集 CD-ROM 版』（塙書房）。

万葉集の解釈については『新編日本古典文学全集』（小学館）、『新日本古典文学大系』（岩波書店）、『和歌文学大系』（明治書院）、『万葉集全注』（有斐閣）、『万葉集注釈』（中央公論社）、『万葉集積注』（集英社）、『万葉集 全訳注原文付』（講談社文庫）、『口訳万葉集』（折口信夫全集、中央公論社）を参考にした。

古事記、日本書紀、土佐日記…『新編日本古典文学全集』（小学館）。

記紀歌謡の解釈については『古代歌謡全注釈 古事記編』（角川書店）、『古代歌謡全注釈 日本書紀編』（角川書店）、『古事記歌謡 簡注』（おうふう）、『古代歌謡集（日本古典文学大系）』（岩波書店）も参考にした。

源氏[物語]、古今[和歌集]、後撰[和歌集]、拾遺[和歌集]…『新日本古典文学大系』（岩波書店）。

なお、『新編日本古典文学全集』を『新全集』と、『新日本古典文学大系』を『新大系』と略することがある。

## 参考文献

青木勝彦(1970)「助詞「シ」について—中古における用法の狭さの意味するもの—」『言語と文芸』71.

青木伶子(1984)「現代語「こそ」の結合卓立」『国語学』139.

青木伶子(1994)「書評 大野晋著『係り結びの研究』」『国語学』179.

浅見徹(1993)「本居宣長の文法整理—係結びの周辺—」『文林』27.

安達隆一(1991)「係助詞『コソ』の構文史—近代日本語構文の成立に関連して」神戸外大論叢 42-2.

- 石黒圭(1999)「逆接の基本的性格と表現価値」『国語学』198.
- 石田春昭(1939)「コソケレ形式の本義（上）（下）」『国語と国文学』16・2・3.
- 井島正博(1996)「期待の表現機構」『成蹊国文』29.
- 井島正博(1996)「助詞から探る日本文法4 接続助詞あるいは期待対比構造」『言語』28・4.
- 伊牟田経久(1981)「ゾ・ナム・コソの差異—蜻蛉日記を中心に—」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』.
- 色川大輔(2007)『『宇治拾遺物語』における「ゾ」・「ナム」・「コソ」の係結び』『国学院大学大学院文学研究科論集』34.
- 岩井良雄(1976)『源氏物語語法考』笠間書院.
- 江口正弘(1963)「「こそあれ」考—文型と意味—」『国語学』55.
- 大鹿薫久(1997)「助動詞「らし」について」『語文』67.
- 大槻文彦(1897)『広日本文典』(『広日本文典・同別記』復刻, 勉誠社).
- 大西拓一郎(2003)「方言における「コソ～已然形」係り結び」『国語学』215.
- 大野晋(1955-7)「日本古典文法（一）～（十）」『国文学解釈と鑑賞』20・12～22・3.
- 大野晋(1978)『日本語の文法を考える』岩波新書.
- 大野晋(1993)『係り結びの研究』岩波書店.
- 小川栄一(1989)「係結びと焦点」『福井大学教育学部紀要(国語学・国文学・中国学編)』37.
- 小川栄一(1993)「情報構造としての係結び」『国語国文学』32.
- 沖裕子(1991)「接続詞「しかし」の意味・用法」『日本語研究』12.
- 小田勝(1998)「係結の流れをめぐって—源氏物語を資料として」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』35.
- 小田勝(2006)『古代語構文の研究』おうふう.
- 小田勝(2010)『古典文法詳説』おうふう.
- 尾上圭介(1982)「文の基本構成・史的展開」『文法史(講座日本語学2)』明治書院.
- 尾上圭介(2001)『文法と意味I』くろしお出版.
- 尾上圭介(2002)「係助詞の二種」『国語と国文学』79・8.
- 澤瀉久孝(1941)『万葉古径』弘文堂書房.
- 春日和男(1968)『存在詞に関する研究—ラ変活用語の展開』風間書房.
- 勝又隆(2007)「上代「一こそー已然形」節の機能とその変遷について」『国語国文』76・4.

- 川岸克己(1993)「係助詞コソの非提題性と間投助詞的性格(上)」『学習院大学上代文学研究』19.
- 川岸克己(1994)「係助詞コソの非提題性と間投助詞的性格(下)」『学習院大学上代文学研究』20.
- 川端善明(1958)「接続と修飾—「連用」についての序説—」『国語国文』27-5.
- 川端善明(1962)「助詞「し」の説—係機能の周辺—」『万葉』45.
- 川端善明(1982)「動詞活用の史的展開」『文法史(講座日本語学2)』明治書院.
- 川端善明(1994)「係結の形式」『国語学』176.
- 北原保雄(1966)「〈終止なり〉と〈連体なり〉—その分布と構造的意味—」『国語と国文学』43-9.
- 北原保雄(1981)『日本語助動詞の研究』大修館書店.
- 北原保雄(1981)『日本語の文法(日本語の世界6)』中央公論社.
- 北原保雄(1982)「係り結びはなぜ消滅したか」『国文学 解釈と教材の研究』27-16.
- 北原保雄(1984)「既知と未知」『国語学』136 (『日本語文法の焦点』教育出版1984所収).
- 衣畑智秀(2004)「古代語・現代語の「逆接」—古代語のトモ・ドモによる意味対立を中心に」『語文(大阪大学)』83.
- 衣畑智秀(2005)「日本語の「逆接」の接続助詞について—情報の質と処理単位を軸に」『日本語科学』17.
- 木下書子(1990)「『万葉集』における「し」について」『国語国文学研究』26.
- 木之下正雄(1943)「仮定条件法について」『国語国文』13-5.
- 木下正俊(1972)『万葉集語法の研究』塙書房.
- 京極興一(1960)「奈良時代における已然形の一用法」『国語と国文学』37-1.
- 金水敏(1994)「文法(史的研究)(平成4年・平成5年における国語学界の展望)」『国語学』177.
- 金水敏(1997)「国文法」, 益岡隆志ほか著『文法(岩波講座 言語の科学5)』岩波書店.
- 釘貫亨(1999a)「完了辞リ、タリと断定辞ナリの成立」『万葉』170.
- 釘貫亨(1999b)「断定辞ナリの成立に関する補論—万葉集と宣命を資料として—」『日本語論究』6.
- 蔵野嗣久(1961)「中世初期の強調表現に関する考察—「こそ」の用法を中心として—」『国

- 文学攷』25.
- 桑山俊彦(1993)「「係り結び」の消失」『言語』22-2.
- 小泉保(1987)「譲歩文について」『言語研究』91.
- 小路一光(1988)『萬葉集助詞の研究』笠間書院.
- 鴻野知曉(2010)「ゾの係り結びの発生について」『国語国文』79-12.
- 鴻野知曉(2012)「助詞コソの文末における一用法」『言語情報科学』10.
- 此島正年(1966)『国語助詞の研究 助詞史の素描』桜楓社.
- 此島正年(1979)『国語助動詞の研究 体系と歴史』桜楓社.
- 小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房.
- 小林芳規(1959)「『し』の研究」『国文学—解釈と教材の研究—』4-9.
- 小林芳規(1982)「古代の文法Ⅱ」築島裕編『文法史』(講座国語史第4巻)大修館書店, 第3章.
- 小松光三(1993)「いわゆる「間投助詞」と「係助詞」の意味機能と体系」『国文学攷』139.
- 小柳智一(1995)「時しあらば一助詞シと文体一」『国語研究(国学院大学)』58.
- 小柳智一(2001)「係結についての覚書: 学史風」『学芸国語国文学』33.
- 小柳智一(2007)「訳語の位置—『あゆひ抄』の移動訳」『福岡教育大学紀要 第1分冊』56.
- 小柳智一(2010)「『あゆひ抄』の副助詞研究」『国語と国文学』87-1.
- 近藤泰弘 (2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房.
- 近藤泰弘 (2003)「とりたての体系の歴史的变化」, 沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異』くろしお出版.
- 齋藤摂子(1991)「助詞「シ」の研究—係助詞との関係を中心に」『学習院大学国語国文学会誌』34.
- 斎藤茂吉(1938)『万葉秀歌』(上巻・下巻) 岩波新書.
- 佐伯梅友(1938)『萬葉語研究』文學社(1963年、有朋堂より再版).
- 佐伯梅友(1950)『奈良時代の国語』三省堂.
- 佐伯梅友(1956)「「にあり」から「である」へ」『国語学』26.
- 佐伯梅友(1966)『上代国語法研究』大東文化大学東洋研究所.
- 佐伯哲夫(1971)「こそ」『文法』3-5(『語順と文法』関西大学出版広報部 1976 所収).
- 酒井秀夫(1960)「上代の係結」『金城学院大学論集』15.

- 阪倉篤義(1993)『日本語表現の流れ』岩波書店.
- 坂詰力治(1990)「室町時代における「こそ」の係り結び」『近代語研究』8.
- 坂原茂(1985)『日常言語の推論』東京大学出版会.
- 坂本信幸(2010)「笹の葉はみ山もさやに一「乱友」考一」『万葉』207.
- 佐佐木隆(1996)「『万葉集』一番歌の〈我許背齒告目〉」『学習院大学文学部研究年報』42.
- 佐佐木隆(2001)「上代語の已然形と歌の表現—無助詞の用法／誰れ絶多倍／雪波布礼々之」  
『万葉集研究』25.
- 佐佐木隆(2007)「続紀宣命と『万葉集』に見える助詞「し」」『学習院大学文学部研究年報』  
53.
- 佐治圭三(1974)「係り結びの一側面—主題・叙述(部)に関連して—」『国語国文』43・5(『日  
本語の文法の研究』ひつじ書房 1991 所収).
- 佐藤信子(1970)「助詞「し」について」『玉藻』6.
- 重見一行(1994)「「連体なり」文と係結び文と「のだ」文—係結び文から「のだ」文へ」『高  
知大学教育学部研究報告 第2部』49.
- 品田悦一(2007)「神ながらの歓喜—柿本人麻呂「吉野讃歌」のリアリティー—」『論集上代文  
学』29.
- 品田悦一(2014)「畸形の文法—近代短歌における已然形終止法の生成—」『万葉』217.
- 高山善行(1990)「連体ナリと終止ナリの差異について」『国語学』163.
- 高松佐久江(1958)「助詞「し」の用法と機能」『女子大国文』9.
- 竹内史郎(2008)「助詞シの格助詞性について—非動作格性と品詞分類—」『語学と文学』44.
- 竹内美智子(1986)『平安時代和文の研究』明治書院.
- 竹林一志(2002)「現代語の助詞「こそ」の機能」『解釈』48・5・6.
- ダシー, トークイル(2003)「近江荒都歌における作中主体の二面性」『上代文学』91.
- 田中康二(2015)「係り結びの法則成立史」『紀要(神戸大学)』42.
- 塚原鉄雄(2002)『国語構文の成分機構』新典社.
- 築島裕(1960)「漢文訓読語に於ける係助詞に就いて」『語文研究』10.
- 蔦清行(2006)「終止のコソ」『国語国文』75・5.
- 蔦清行(2007)「係りのコソ」『国語国文』76・4.
- 蔦清行(2011)「コソ・已然形研究史抄」『日本語・日本文化』37.

- 葛清行(2015)「連体形結びの役割—カとコソの場合」『国語国文』84-4.
- 津之地直一(1959)「万葉集係助詞攷—係結びのぞ・か・や・こそについて—」『愛知大学文学論叢』19.
- 鉄野昌弘(1989)「人麻呂における聴覚と視覚—「み山もさやに」をめぐって—」『万葉集研究』17.
- 時枝誠記(1959)『古典解釈のための日本文法(増訂版)』至文堂.
- 時枝誠記(1978)『日本文法 文語篇』岩波書店.
- 富田大同(1995)「万葉集のコソ」『園田語文』9.
- 永井洸(1938)「係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」の本質意義について」『国文学攷』4-1.
- 中川祐治(2004)「「コソ」「ゾ」による係り結びと交替する副詞「マコトニ」について—原拠本『平家物語』と『天草版平家物語』の比較を手がかりに」『文学・語学』178.
- 中村幸弘(1977)「ばこそあらめ」『国学院雑誌』78-11.
- 中村幸弘(1995)『補助用言に関する研究』右文書院.
- 中村幸弘(2004)「題述文「…は…こそあれ」と、その変移・漸移の諸相(上)・(下)」『国学院雑誌』105-7・12.
- 中村幸弘(2010)「「…ばこそ…め」文型と、その後続語句」『国語研究』73.
- 仁田義雄(1984)「係り結びについて」, 鈴木一彦・林巨樹 編『研究資料日本文法第5巻 助辞編(一) 助詞』明治書院.
- 丹羽哲也(1997)「現代語「こそ」と「が」「は」」, 川端善明・仁田義雄 編『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房.
- 丹羽哲也(1998)「逆接を表す接続助詞の諸相」人文研究 50-10.
- 丹羽哲也(2006)『日本語の題目文』和泉書院.
- 野田尚史(2003)「現代語の特立のとりたて」, 沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて—現代語と歴史的変化・地理的変異』くろしお出版.
- 野口元大(1976)『うつほ物語の研究』笠間書院.
- 野村剛史(1995)「カによる係り結び試論」『国語国文』64-9.
- 野村剛史(2001)「ヤによる係り結びの展開」『国語国文』70-1.
- 野村剛史(2002)「連体形による係り結びの展開」『日本語学と日本語教育』東京大学出版会.
- 野村剛史(2004)「述語の形態と意味」, 北原保雄 監修・尾上圭介 編『朝倉日本語講座 6 文

法Ⅱ』朝倉書店、第3章.

野村剛史(2005)「中古係り結びの変容」『国語と国文学』82-11.

半藤英明(2003a)『係助詞と係結びの本質』新典社.

半藤英明(2003b)『係結びと係助詞―「こそ」構文の歴史と用法』大学教育出版.

半藤英明(2005)「「こそ」の機能と解釈のゆれ」『西日本国語国文学会会報』平成17年度.

半藤英明(2006)『日本語助詞の文法』新典社.

フィアラ, カレル(2000)『日本語の情報構造と統語構造』ひつじ書房.

藤井貞和(2007)「係助辞「こそ」の活用呼応の形成」『立正大学大学院紀要』23.

藤井聖子(2002)「所謂「逆条件」のカテゴリー化をめぐる一日本語と英語の分析から一」,  
生越直樹編『対照言語学』東京大学出版会.

富士谷成章『あゆひ抄』(中田祝夫・竹岡正夫(1960)『あゆひ抄新注』風間書房).

船城俊太郎(1987)「係り結び」『国文法講座3』明治書院.

船城俊太郎(2003)『かかりむすび考』勉誠出版.

北条淳子(1995)「接続の語について―逆接の語を中心に」『早稲田大学大学院文学研究科紀  
要(文学・芸術学)』40.

堀尾香代子(1991)「『万葉集』における係り結び「ぞ」「こそ」」『愛知大学国文学』31.

堀尾香代子(2004)「係助詞の構文機能に関する一考察」『北九州市立大学文学部紀要』67.

前田直子(2009)『日本語の複文―条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版.

松尾捨次郎(1936)『国語法論攷』文学社.(追補版1961白帝社).

松尾捨治郎(1961)『助動詞の研究』白帝社.

松下大三郎(1928)『改撰標準日本文法』紀元社.

宮坂和江(1952)「係結の表現価値―物語文章論より見たる」『国語と国文学』29-2.

宮地裕(1983)「二文の順接・逆接」『日本語学』2-12.

本居宣長『詞の玉緒』(大野晋・大久保正 編集校訂(1990)『本居宣長全集』第5巻, 筑摩書  
房).

森重敏(1947)「上代係助辞論」『国語国文』16-2.

森重敏(1953)「係り結びの原理」『国語国文』22-5.

森重敏(1958)「係結」『続日本文法講座1』明治書院.

森重敏(1971)「係り結びと日本語の性格」『文法』3-5.

- 森重敏(1971)『日本文法の諸問題』(笠間叢書 21) 笠間書院.
- 森重敏(1977)『日本文法通論』 風間書房.
- 森野崇(1987)「情報伝達と係助詞―「は」及び「ぞ」「なむ」「こそ」の場合―」『早稲田大学教育学部学術研究(国語・国文学)』 36.
- 森野崇(1988)「係助詞「こそ」の機能―『源氏物語』を資料として」『早稲田大学教育学部学術研究(国語・国文学)』 37.
- 森野崇(2002)「係助詞「こそ」の機能とその変容の要因に関する考察」『国語学研究と資料』 25.
- 森野崇(2002)「<特立>を行う「こそ」の変容をめぐって」『早稲田日本語研究』 10.
- 森野崇(2003)「特立のとりたての歴史的変化―中世以前―」, 沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて―現代語と歴史的変化・地理的変異』 くろしお出版.
- 安田章(1977)「助詞(2)」『文法Ⅱ』(岩波講座日本語 7) 岩波書店.
- 安田章(1980)「コソの拘束力」『国語国文』 49-1.
- 安田章(1992)「コソの領域」『国語国文』 61-1.
- 安田章(2005)「コソの中世」『国語国文』 74-8.
- 安田喜代門 (1924a)「国語法上の諸問題 (その一) ―「こそ」についての一考察」『国学院雑誌』 30-3.
- 安田喜代門 (1924b)「「こそ」の研究―(つづき)」『国学院雑誌』 30-4.
- 山口明穂(1965)「十三代集における係助詞「こそ」の用法」『国語国文学報』 19.
- 山口明穂(1995)「係結びの変遷」『築島裕博士古稀記念国語学論集』 汲古書院.
- 山口堯二(1980)『古代接続法の研究』 明治書院.
- 山口堯二(1990)「疑問助詞「やらん」の成立」『語文(大阪大学)』 53・54.
- 山口堯二(2000)『構文史論考』 和泉書院.
- 山口堯二(2005)「「にあり」式連語係助詞介入小史」『国語と国文学』 82-11.
- 山田健三(2004)「係り結び・再考」『国語国文』 73-11.
- 山田昌裕(2007)「「コソガ」の発生とその用法」『恵泉女学園大学紀要』 19.
- 山田孝雄(1908)『日本文法論』 宝文館.
- 山田孝雄(1913)『奈良朝文法史』 宝文館.
- 山田孝雄(1913)『平安朝文法史』 宝文館.



- 山田孝雄(1936)『日本文法学概論』宝文館出版.
- 吉田茂晃(2005)「"結び"の活用形について」『国語と国文学』82-11.
- 渡部学(1995a)「ケド類とノニ―逆接の接続助詞―」, 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』.
- 渡部学(1995b)「ケレドモ類とシカシ類―逆接の接続助詞と接続詞―」, 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』.
- 渡辺実(1997)『日本語史要説』岩波書店.
- Malchukov, A. L. 2004. Towards a semantic typology of adversative and contrast marking. *Journal of Semantics*, 21(2).
- Ohori, T. 1995. Remarks on suspended clauses: a contribution to Japanese phraseology. In M. Shibatani and S. A. Thompson (eds.), *Essays in Semantics and Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Ohori, T. 2000. Framing effect in Japanese non-final clauses: toward an optimal grammar-pragmatics interface. *Berkeley Linguistic Society*, 23.
- Whitman, J. 1997. Kakarimusubi from a comparative perspective. In J. Haig and H. Sohn (eds.), *Japanese/Korean Linguistics*, 6.

#### 辞典・事典類

- 『角川古語大辞典』角川書店.
- 『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社.
- 『時代別国語大辞典 上代編』三省堂.
- 『日本国語大辞典』(第二版) 小学館.
- 『日本語文法事典』大修館書店.
- 『日本語文法大辞典』明治書院.